

スーパーグローバルハイスクール(SGH) 取組事例集(2019年版)



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN



筑波大学
University of Tsukuba



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

文部科学省が平成 26 年度より開始したスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業では、グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、様々な国際舞台で活躍できる人材の育成を掲げ、SGH 指定校 123 校における質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を進めてきました。

平成 26 年度に指定した 56 校が 5 年間の活動を終えて SGH から巣立っていき、本年度は 67 校が活動しています。2019 年 6 月 28 日には「2019 年度スーパーグローバルハイスクール (SGH)・WWL コンソーシアム構築支援事業・地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）合同連絡協議会・事業別連絡会*」が開催され、各事業の関係者が一堂に会し、交流を深めました。本書はその分科会において SGH 指定校から発表された内容を中心にとりまとめたものです。

単なる英語力の強化に留まらない、より汎用的な能力の育成を目指すために、多くの指定校において、教科横断的なカリキュラム開発や海外研修を含めた体験的な学習など、先進的な取り組みが意欲的に実施されています。

その多様な成果を広く共有するために本書が活用され、SGH 事業や日本のグローバル教育の一層の充実が図られることを期待しています。

*連絡会の詳細についてはHPをご覧ください。 <http://www.sghc.jp/>

筑波大学副学長：附属学校教育局教育長 茂呂雄二

目 次

はじめに i

事例発表 平成 27 年度指定校

立命館慶祥中学校・高等学校	1
札幌日本大学高等学校	3
岩手県立盛岡第一高等学校	5
埼玉県立不動岡高等学校	7
早稲田大学本庄高等学院	9
千葉県立松尾高等学校	11
青山学院高等部	13
富士見丘中学高等学校	15
横浜市立南高等学校	17
法政大学国際高等学校	19
新潟県立国際情報高等学校	21
愛知県立時習館高等学校	23
中部大学春日丘高等学校	25
京都市立西京高等学校	27
京都学園高等学校	29
同志社国際高等学校	31
大阪府立能勢高等学校	33
大阪府立千里高等学校	35
大阪府立泉北高等学校	37
清風南海高等学校	39
兵庫県立伊丹高等学校	41
兵庫県立国際高等学校	43
啓明学院中学校・高等学校	45
鳥取県立鳥取西高等学校	47

岡山県立岡山操山高等学校	49
岡山学芸館高等学校	51
愛媛県立宇和島南中等教育学校	53
福岡県立鞍手高等学校	55
福岡県立京都高等学校	57
福岡雙葉中学校・高等学校	59
明治学園中学校・高等学校	61
宮崎県立宮崎大宮高等学校	63
鹿児島県立甲南高等学校	65

立命館慶祥中学校・高等学校

「共鳴」と「創造」マインドを育む - 世界に通用する18歳 - 多文化共生を共に創る

【構想の概要】

私たちは、グローバル・リーダーとは「異文化にある他者との違いを相互に理解し、認め合い、尊敬し合うこと」によって『共鳴』し、世界のさまざまな課題の解決に向けて、言語や文化、宗教、生活習慣の違いを超えて新たなものを『創造』することができる人間であると考えます。立命館慶祥のSGHは様々な学習・経験を通して、「世界に通用する18歳」を目指し、「『共鳴』と『創造』マインド」を育み、グローバル・リーダーを育成することを研究開発課題とします。

Beyond Borders
立命館慶祥中学校・高等学校

関係機関との連携

- 立命館大学 ●立命館アジア太平洋大学 ●立命館大学国際平和ミュージアム ●北海道大学 ●札幌大学
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター ●一般財団法人アイヌ民族博物館 ●道立北海道博物館
- 一般社団法人札幌大学ワレシバクラブ ●北海道庁観光局 ●(株)JTB北海道 ●パンコクYMCA

研究開発課題 「共鳴」と「創造」マインドを育む - 世界に通用する18歳 -

課題研究テーマ「多文化共生を共に創る」

目的 北海道に生きる者として、地域特有の課題を学び、異文化に「共鳴」し、世界の課題の解決策を「創造」する。

課題研究α（世界の課題の深掘り1）

提携先：サハリン州

ロシア・観光開発講座（3単位）

- ・北海道とサハリンの歴史文化を研究。
- ・道北地方（稚内・礼文）-サハリン間のフィールドワークを基に、サハリンの学校とスタディーツアーの共同開発を行いビジネス展開の可能性を探る。

課題研究β（世界の課題の深掘り2）

提携先：NZ、カナダ

アイヌ文化研究・国際社会講座（3単位）

- ・アイヌ文化を学び、先住民文化の社会化に貢献。
- ・第四言語としてのアイヌ語学習。伝統的生活様式を調査研究し、エッセンスを現代に生かした、自然と共存する都市計画や伝統芸能の伝承について提言。

課題研究γ（世界の課題の深掘り3）

提携先：タイ

タイ・アジア学講座（3単位）

- ・北タイエリアを中心とした東南アジアをフィールドとし、学際的な問題を学習・研究。
- ・ケーススタディーとディスカッションを通じ、「多文化共生」の観点から諸問題の解決方法を導き出す。

目指すグローバル・リーダー像

- 違いを受け止め共感できる力
- 平和的解決へ向け対話する力
- 現状分析のための探求心
- 情報収集・調査研究の知識
- 問題解決のための牽引力
- 信頼・尊敬される人格

高校1年次（地域の課題） 地域研究（1単位分）

地域特有の課題学習（各教科での取組＋講演会）

- ・アイヌの方とともに「共創」
- ・現代社会問題への興味・関心
- ・情報収集能力の向上
- ・基礎的教養の習得

高校2年次（世界の課題） 海外文化研究（1単位分）

海外研修8コース（事前学習＋現地活動＋事後学習）

- ・現地でのディスカッション
- ・多様な価値観の形成
- ・異文化体験
- ・TOEFL-ITP全員受験

（ツールとしての言語の習得・高いコミュニケーション能力の育成）

- ・豊大成としての英語フェスティバルの実施
- ・中・長期留学生の受入・留学プログラムの充実
- （海外留学プログラム提携校等）安養外国語高校（韓国）、東北青森外国語高校（中国）、ロードボタダ高校（米国）、ハガ高校（スウェーデン）、第1・第2ギムナンア（ロシア）、コプリバ（フランス）

中学3年生の取組

- 中1（地域の課題）
 - ①総合学習（1単位）-論理的文章を書く力の育成
 - ②北海道の自然とアイヌ文化をテーマにした探究研究
- 中2（思考力・表現力の育成）
 - ③総合学習（1単位）-4つの思考を養うディベート
 - ④N.I.E-取組活動と教室のまとめ（北海道新聞社）
- 中3（世界の課題）
 - ⑤平和学習グローバルキャリアスタディー
 - ⑥「地球を巡るに」NZ海外研修（3週間）

卒業時の姿を体現した Beyond Borders

自分の中にある空間的ボーダー・文化的ボーダー・心理的ボーダーを超え、「多文化共生」のための公共圏を創造できる地球市民。

成果の普及 研究成果の社会的発信 → 成果報告書の作成 ・ SGH課題研究発表会の開催 ・ 専用Webページの開設（含英語版）

2019年度教育課程表（SGH対象生徒）

学年・クラス	国語		歴史		公民		数学		理科		保健体育		芸術		外国語		家庭情報		学校設定							総合的な探究の時間 LHR																		
	国語総合	現代文B	古典B	世界史A	世界史B	地理B	現代社会	数学I	数学II	数学A	数学B	○数学演習	物理基礎	化学基礎	生物基礎	地学基礎	体育	保健	音楽I	美術I	英語表現I	英語表現II	英語表現III	英語表現IV	○スピーチ		家庭基礎	社会と情報	SS課題研究I	グローバル・ア	中国語	フランス語	起業者講座	会計士講座	アジア学講座	国際社会講座	メディアデザイン	日本文学特講	表現特講	観光開発講座	スホーツと健康	課題研究		
1年	4					2		4		3			2	2	2	2	2	1	★1		4	2					1	1														1	1	
2年	文系	2	3	▲	●	●	▲	4		2			▲	▲	▲	▲	1	★1			4				1		2		1													1	1	
3年	立命館コース	I	3	2	▲	●	▲					3									4	2			◇	◇								3								4	1	1
	J	3	2	▲	●	●	▲					3										4	2			◇	◇							◆	◆	◆	◆	◆				4	1	1
	L	3	2	▲	●	●	▲					3										4	2			◇	◇							◆	◆	◆	◆	◆				4	1	1

□はSGHに係る単位 ★から1単位選択 △・▲・◇・◆は共通のマークから3単位選択 ●から4単位選択

SGHの取組 特設3講座（高3対象）

I. 観光開発講座

今や日本経済の発展において重要な一産業として確立した「観光」に焦点を当て、「地域と観光の連関性」をテーマとして、観光行政、観光と地域づくり、観光プランニングなどを中心に学びを深める。学習を進めるにあたり、JTBスタッフとティームティーチングで授業を進め、専門的なアドバイスを受けつつ、高度な分析と地域研究を進めることを目指す。

2018年度の主な取組

- ①観光学・ツーリズム概論（ツーリズムに関する動向や北海道観光の現状と課題）。
- ②サハリン研修3泊4日（選抜）事前事後学習。
- ③北海道内観光プランニング、サハリン研修報告書作成。
- ④農林水産省北海道農政事務所担当者、北海道国際局国際課、立命館大学食マネジメント学部教授、JTB教育旅行担当者 他を対象として報告会を実施。
- ⑤立命館大学食マネジメント学部との連携。

II. 国際社会講座

「多文化共生を共に創る」を課題研究テーマに、北海道で学ぶものとしてアイヌの歴史文化に対する理解を深め、文化振興のあり方について学習する。この講座をとおして、自分と異なる立場に「共鳴」し、仲間と協同して着地点を「創造」できる思考力と行動力を獲得することを目指す。

2018年度の主な取組

- ①「北海道とアイヌ」をテーマに北海道とアイヌの歴史の概要を学ぶ。
- ②「国立「民族共生の象徴空間」構想の到達点と課題」をテーマに、内閣官房アイヌ総合政策室北海道分室の佐藤久泰内閣参事官を招いた特別講義を実施。
- ③「北海道旧土人保護法を忘れないために」をテーマに、北海道博物館の小川正人氏（学芸副館長・研究部長・アイヌ民族文化研究センター長）を招いた特別講義を実施。
- ④「樺太アイヌと江別」をテーマに、江別市郷土資料館学芸員の園部真幸氏を招いた特別講義を実施。
- ⑤「アイヌ語学習」を実施。特別講師として平取町立二風谷アイヌ文化博物館の関根健司氏を招き、全9回の特別講義を実施。
- ⑥「アイヌの文化」をテーマに、アイヌアートプロジェクト代表の結城幸司氏を招いた特別講義を実施。
- ⑦「アイヌ語の伝承・普及」をテーマにした課題研究の実施。最終授業日に発表会を実施。

III. アジア学講座

東南アジアの知識を得るだけでなく、そこで得た知識を日本が抱える問題や他の社会問題に置き換え、主体的に解決策を考える力や、国・民族の違いを超えて解決しなくてはならないという使命感・責任感、他者との協働作業で重要となる協調性などを身につけさせることを目標とする。そこで、多様な民族が対立・共生する東南アジアについて、紛争・歴史・開発などのいくつかのテーマを設け、詳細な学習を行う。また、アジアの抱える社会問題に取り組む活動をより深く理解するために、北タイでの研修プログラムを実施する。

2018年度の主な取組

- ①国際協力理解：国家間の援助をテーマに、国際協力の在り方や援助の捉え方・視点などを学習・考察。ダイヤモンド型ワークを用いて、国際協力に必要な観点を学習・考察。
- ②国際経済理解：国際貿易ゲームを行い、国際貿易が抱える矛盾・問題点を理解。
- ③APU学生NGO団体PRENGOの特別講義：SGHタイ研修に向けた学習。
- ④3テーマ別学習：カンボジア内戦、東ティモール独立、ミャンマー（ビルマ）の民主化の3テーマをグループでそれぞれ発表。
- ⑤APU（立命館アジア太平洋大学）との高大連携講座：教授3名（李教授・淵ノ上教授・大塚教授）による講義と生徒の発表。
- ⑥アジアの戦争・紛争：第二次世界大戦時の沖繩戦、ミャンマー（ビルマ）の紛争。
- ⑦開発・支援ワーク：北タイの山岳民族の村を舞台に具体的な開発・支援について考察。
- ⑧SGHタイ研修：今年度の研修内容の検討、事後発表。

SGH 海外研修

I. サハリン研修

観光開発講座の「実習」として、ロシア共和国サハリン州ユジノサハリンスクを訪問



し、実地での地域調査の手法と情報の整理術、提言方法を学ぶ。「食を通じたインバウンド観光の推進」をキーワードとし、北海道・サハリン両地の観光資源発掘・整理・魅力の発信及び観光プランニングを模索し、日本及び北海道への外国人観光客の誘致のための具体的な方策やその政策提言、ならびに現地での実地調査の中でインタビュー調査や学校交流を行い、さまざまな人々と交流を図り、豊かな多文化共生を築き、未来を担うグローバル人材を育成することを目標とする。

II. NZ 研修

先住民保障政策の先進国であるニュージーランド（AucklandとWhakatane）を研修先とし、「マオリとの共生を学ぶ」をテーマに、マオリの文化をどのように保護し継承しているのか、どのような問題があるのかを現地学習・活動・インタビューを通して調査することを目標とする。この学びにより、「アイヌ文化との共生」をより具体的・詳細に考えることができるようになる。



III. タイ研修

パヤオ県にあるNGO施設YMCAパヤオセンターとバーンタム村に滞在することで、多文化共生を考える一つの経験を得て、これまでと異なる視点・意見・考えを持てるようにすることが目標である。



学校設定科目

本校はSSHの指定高校でもあり、高校1年次において「SSH探求科学」・「SGH課題探求型学習」のいずれかを選択履修することとしている。時間数は2単位とし連続授業としている。SGH課題探求型学習は、「探求基礎（高校1年）」「探求応用（高校2年）」「探求発展（高校3年）」としている。

探求研究として取り扱うテーマは、社会、経済、文化などグローバル化が急速に進展し、国際的な流動性が高まっている現在、科学技術の急速な進歩と社会の高度化、複雑化や急速な変化に伴い、過去に蓄積された知識や技術のみでは対処できない新たな諸課題が生じており、それらに対応していくため、新たな知識や専門的能力を持った人材が求められていることから、21世紀の社会状況を展望し、国際社会でリーダーとなるべく人材育成のプログラムを開発としている。グループワークを多く取り入れた研究の進め方とした。

【グループワークの進め方は次のように定めた】

	目安時間	教員の役割
・ディベートの班ごとにグループ ・各班で、司会・記録・リーダーを決定	5分	リーダー力の観察
・個人のワークシート策定 ・個人のワークシート発表 ・質疑 ・グループワークシート策定	50分	個々の相違点に注意を払う
・グループでポスター策定	30分	
・振り返り	10分	

成果と課題の分析検証

(1) 生徒の変容調査

SGH事業の成果を分析するため、入学直後と3年後の質問調査を実施した。特筆すべき点として、

- ①受身ではなく主体的に学習することについて
指定前肯定率：45.5%→指定後：55.0%
- ②課題解決に向けた有益な考え方について
指定前肯定率：32.1%→指定後：42.5%
- ③社会課題に興味・関心が沸いたか
指定前肯定率：67.1%→指定後：83.4%
など、生徒の意識が向上することとなった。

(2) 身近な地域に関する調査

- ①身近な地域の課題を積極的に考えるようになった
指定前肯定率：52.4%→指定後：76.5%
他調査も受講後の意識は高まった結果となった。

(3) 海外への意識と行動の変化

最も大きな変化をもたらしたものは海外への意識・行動であった。

指定前留学（海外研修含）率：10.1%→指定後：30.8%となり、大幅な伸び率であった。また、その多くが国際会議、インターンシップなどへの参加となり、自主的な活動を求める結果となった。

(4) 教員の意識変容調査

教員、学校の取り組みについて、SGH事業の開始前、開始後について調査した。結果は指定後の変化が大きく、成果として認識することができる結果であった。

- ①学校の取り組みが向上した
指定前肯定率：32.5%→指定後：78.0%
- ②グローバル人材育成につながった
指定前肯定率：46.8%→指定後：63.7%

教科との連携・探求活動

SGH課題探求型学習の主たるチームは、地歴・公民、英語、国語の各科が中心となって研究を行なった。探求型学習については、各教科が連携して研究開発を行なうこととしており、年2回近隣の中学・高校・大学と合同の研究会を実施した。事例として中学生対象（本校の中学部）で、「社会科・理科・国語科・英語科」が連動した「社会研究授業」の研究を実施し、現在は定着した科目として継続している。それらの研究結果をベースとして、2019年度からiPadを取り入れた、探求型授業の研究を開始した。

地域との連携

北海道の産業、経済など地域に密着したテーマを使った課題研究を行なった結果、道庁・ニセコ町などの行政機関と連携した街づくりの国際会議開催や地域活性への参加を行なえるようになった。北方領土問題では「ビザなし交流」に教員・生徒が参加し、元島民へのインタビューなどを通じて問題意識を学んだ。外交関係の難しさや領土問題の解決の難しさを学んだ。

岩手県立盛岡第一高等学校

イーハトーブ世界（万人の幸福を希求するグローバル社会）の開拓者の育成

【構想の概要】

本校の研究開発は、グローバル・リーダーに求められる諸資質の涵養を目指し、大きく分けて1年生から3年生の3年間にわたり、総合的な学習の時間を活用して探究的学習に取り組むSG課題研究（海外フィールドワークもその一環とする）と、それを教科の面から補完する科目としての「グローバルコミュニケーション英語」・「グローバル現代社会」の2つの柱からなる。

地域のグローバル課題を題材とした課題研究を、学年の進行に応じて段階的に構成することにより、グローバル・リーダーが備えるべき素養を涵養し、それと並行して、既存の科目の発展的再構成を中心に、教育活動全体を通じてこれを下支えることで得られる成果の最大化をはかる。

岩手県立盛岡第一高等学校スーパーグローバルハイスクール（SGH）研究開発構想

◆目的 グローバル課題を発見し、原因を探り、解決法を探究・議論し、その成果を本国のみならず、世界のパイロットモデルとして発信する一連の取組みを通して、21世紀の理想的なグローバル社会を開拓し得る人材の育成を目指す。

◆目標
 ・グローバル課題の解決法を探究し、その成果を世界へ向けて発信するとともに主体的に課題解決に向けた実践を行う姿勢を養う。
 ・世界の諸国・諸地域の実態と抱える課題への関心を高めるとともに、論理的思考力、課題解決能力、積極性、行動力を養い、主体的な学びを醸成する。
 ・他者との相互理解・協業に必要な傾聴力、共感力、質問力、説得力を養成し、自分の考えを分かりやすくかつ説得的に伝える力を身に付ける。
 ・上記3つの目標を十分に達成するに足る実践的英語力を習得する。



イーハトーブ世界の開拓者の育成

東日本大震災からの復興
 ・著しい高齢化
 ・世界各地で発生が懸念されるグローバル課題が先鋭的に存在
 ・ILC誘致活動
 ・宇宙の誕生の解明

SG課題研究Ⅲ（3年普通科全員）

・岩手から国内および海外へ研究成果を発信

・英文による論文作成 ・英語による成果発表

SG課題研究Ⅱ（2年普通科全員）

・論理的思考力、問題解決能力の育成
 ・課題研究のテーマ 『岩手が抱える6分野の諸問題をグローバルな視点で解決する探究活動』
 ① 21世紀型地方都市の探究 ② ローカルな魅力を活かしたグローバル観光モデルの探究
 ③ Made in Iwateブランドの確立へ向けた探究 ④ グローバルスタンダード教育モデルの探究
 ⑤ グローバルな知の拠点の創設へ向けた探究 ⑥ 世界を支える地域医療の探究

・課題研究発表会 ・連携大学や企業との共同研究 ・SG海外研修（台湾） ・SG講演会

SG課題研究Ⅰ（1年全員）

・問題発見能力、コミュニケーション能力の育成

フィールドワーク、グループワーク、ディベート、プレゼンテーションという一連の取組みを通じてグローバル課題の抽出からその解決法の模索までの探究活動

・実践的英語力の育成
 「グローバルコミュニケーション英語」
 ・国際時事問題に対する関心と専門性の育成
 「グローバル現代社会」

岩手大学、岩手医科大学、東北大学など
 ・指導プログラム開発への助言
 ・講義（講師派遣、サテライト授業）
 ・TA（大学生、大学院生の派遣）
 ・留学生とのディスカッション

企業、国際機関、海外の大学海外の高校など

◆これまでの取組み
 ◇国際交流事業（SS5～）
 ・海外派遣研修（のべ483名）
 ・外国人高校生受入（のべ252名）
 ◇理教科振興プログラム
 ・課題研究（連携：岩手大学等）
 ・つくば研修
 ・施設見学実習

課題研究以外の取組み

- 海外派遣研修「白鷺の翼」
- 約1か月の本校独自の海外派遣事業
- グローバル研究会
- 外国人高校生招致
- SGH、SSH校との合同発表会
- 英語版学校案内
- 英語部の活動充実
- 外国大学進学研究

令和元年度 入学者の在学期間の教育課程【数字は週あたりの授業時数】

課程	第1学年	第2学年系	第2学年系	第3学年系	第3学年系	第2学年	第3学年
普通科	国語総合 5 現代社会 2 数学Ⅰ 3 数学Ⅱ 1 物理基礎 2 生物基礎 2 体育 3 保健 1 芸術Ⅰ 2 コミュニケーション英語Ⅰ 4 英語表現Ⅰ 2 家庭基礎 2 情報科学 2 総合 1 LHR 1	現代文B 2 古典B 3 世界史B 4 *日本史地理 4 数学Ⅱ 4 数学B 2 自然科学A・B 2 地学基礎 2 化学基礎 2 体育 2 保健 1 芸術Ⅱ 1 コミュニケーション英語Ⅱ 4 英語表現Ⅱ 2 総合 1 LHR 1	現代文B 2 古典B 3 地理A 2 *地理B 3 数学Ⅱ 3 数学Ⅲ 1 数学B 2 中物理生物 3 化学 2 化学基礎 2 体育 2 保健 1 芸術Ⅲ 1 コミュニケーション英語Ⅱ 4 英語表現Ⅱ 2 総合 1 LHR 1	現代文B 3 古典B 3 *世界史A・日本史地理 4 数学Ⅱ 3 数学Ⅲ 2 自然科学A・B 4 体育 3 芸術Ⅲ 4 コミュニケーション英語Ⅱ 5 英語表現Ⅱ 2 総合 1 LHR 1	現代文B 2 古典B 3 *地理B 3 数学Ⅲ 8 中物理生物 4 化学 5 体育 2 コミュニケーション英語Ⅱ 4 英語表現Ⅱ 2 総合 1 LHR 1	現代文B 2 古典B 3 世界史A 2 地理B 3 体育 2 保健 1 コミュニケーション英語Ⅱ 4 英語表現Ⅱ 2 理数数学Ⅱ 4 総合 2 理数物理 理数生物 理数地学 3 理数化学 4 課題研究 2 総合 1 LHR 1	現代文B 2 古典B 3 地理B 2 体育 2 コミュニケーション英語Ⅱ 4 英語表現Ⅱ 2 理数数学Ⅱ 5 理数数学特論 4 理数物理 理数生物 理数地学 4 理数化学 5 総論 1 総合 1 LHR 1

総合的な学習の時間を軸とした SG 課題研究

総合的な学習の時間の中で、3年間を通じた探究的学習のプログラムを確立

(1) SG 課題研究Ⅰ（1年次）

3年間にわたり展開する SG 課題研究の導入に当たる本取組では、とりわけ「課題の発見」を重視し、本校が所在する岩手県というローカルな視座からグローバル課題を俯瞰し、それに関わる社会人と交わることを通じ、課題発見から調査、そして解決策のプレゼンテーションという一連の探究のメソッドを習得することを目的としている。盛岡市との連携による地方創生プログラムと関西フィールドワークを通じてアクションプランを策定、実践に繋げる。

(2) SG 課題研究Ⅱ（2年次）

岩手県が抱える様々なグローバル課題を発見し、多角的な視座からその原因と解決策を追究するとともに、具体的な行動へと移す能力を高めるため、特に喫緊の課題であり、かつ普遍性の高い6つのカテゴリーを設定し、課題研究に取り組む。SG 課題研究Ⅰとの接続を考慮し、アクションプランを実行する中でその結果を検証するところから新たな探究を導き出すような構成としている。

(3) SG 課題研究Ⅲ（3年次）

2年間の研究成果を英語でまとめ、相互にプレゼンテーションし合うことで、国際的な発信力を涵養するという仮説のもとで行われる、3年間にわたる SG 課題研究の集大成となる取り組みである。

(4) 台湾フィールドワーク

1,2年生の希望者12名を選考し15日間台湾へ派遣。個々の研究のためのフィールドワークを実施。

成果の発表と普及

(1) 成果発表

- ・課題研究発表会（各学年）
- ・SGH・SSH校との合同発表会
- ・東北地区 SGH 課題研究発表フォーラム
- ・岩手県教育研究発表会
- ・行政機関との意見交換
- ・マイアワード等での発表



(2) ILC 推進校成果交流会の実施

最先端の素粒子物理学の実験施設である ILC（国

際リニアコライダー）の誘致は岩手県が掲げる県政課題の一つであり、その実現に向け、8つの県立高校（内 SSH2校、SGH1校）がモデル校に指定された。

指定校の一つである本校が主管となり、岩手県科学 ILC 推進室と連携して、指定校の生徒が一堂に会し、取組の成果と課題を共有する成果交流会を立ち上げ、2019年2月19日に実施した。



特色ある取り組み

(1) 「白鷺の翼」

創立100周年を記念して発足した本校独自の生徒海外派遣事業。平成30年度は40回目で10名の生徒を約1ヶ月イギリスへ派遣。

(2) 「課外活動としての外部機関での探究活動」

- ・盛岡市福祉人材育成事業
- ・「盛岡という星で」SNS活用講座
- ・盛岡まなび会議



(3) 「英語部の活動充実」

- ・SGH 指定後、ディベート大会で全国大会へ

(4) 「外国大学進学研究」

- ・台湾留学セミナーを実施。高校卒業後、直接台湾の大学への進学する生徒も出てきている。

今後の探究的学習のプログラム

今までの課題研究や台湾フィールドワークで培った、国内外の研究協力機関との関係を継続し、限られた人的・時間的・予算的リソースの枠内でよりバランスの取れた能力の伸長を図り得る持続可能な本校オリジナルの探究学習モデルの完成を目指す。

	SG 指定期間（令和元年）	SG 指定期間終了後
内容	SG 課題研究	総合的な探究の時間
SG 課題研究	・外部指導者による指導 ・指定終了後の課題研究の態様になるよう、研究をすすめる。 ・全職員で取り組む体制の構築。	・市役所、大学、民間団体等の今まで培った外部機関をフルに活用し、指導していただける体制をつくる。盛岡市との共同プログラムを継続、深化を図る。
海外 F W	・台湾での連携機関を確立し、指定終了後も継続を目指す。	（予定案） ・R2年、R3年は同窓会からの支援を受け、指定期間同様派遣された生徒による派遣を行なう。 ・R4年からは1年次で行なっている「関西研修旅行」を台湾に変更し、2年次で実施。連携機関との交流や F W を行ない、課題研究Ⅱとの連携を図る。
I C T 機器	・SG 予算で大型プリンター、タブレット端末等の機器を整備 ・情報管理課と連携して、より良い機器のあり方、使い方の検討	・SG 予算がなくなるので、学校予算の中でできることに集約せざるを得ない。 ・校内 WiFi の整備。端末は個人のものを利用。 ・大型プリンタは必要
進路関係	・生徒の活動を記録できるポートフォリオの様式の開発と運用。 ・AO 入試等への活用を検討	・新入試制度ではポートフォリオが必要。 ・AO 入試等で活用
運営主体	・SG 推進課 ・新学習指導要領検討委員会で次年度の体制を検討	（予定案） ・「総合的な探究の時間」の運営主体となる新たな組織の設立

埼玉県立不動岡高等学校

明日の世界を創造する品格あるリーダーの育成

【構想の概要】

埼玉県北部及び隣接地域の課題を3分野5項目に分類し、普通科・外国語科全生徒を対象とした探究、学習をFプラン（総合的な学習1年次）、異文化理解（外国語科専門科目）、SG課題研究Ⅰ・Ⅱ（総合的な学習の時間2・3年次）、スーパーグローバルクラブ（課外活動）で実施する。

「明日の世界を創造する品格あるリーダー」とは

①地域社会・国際社会で起こっている社会問題に対し、地球市民として当事者意識を持って解決に取り組むリーダー

- ・消滅可能都市と指摘されている埼玉県東部、加須市周辺地域において、今後起こるであろう問題を想定し、その解決に向けて取り組む。
- ・資源エネルギー庁では「2030年エネルギー政策のあり方」について広く国民からの提言を求めている。今の高校生が30代になる2030年という長期展望を踏まえ、国内外のエネルギーに関わる問題について学習をしながら、エネルギー政策の在り方について考える。
- ・地域社会で起こっている問題やグローバル社会が抱える問題に対して主体的に取り組む。

ドイツ研修、マレーシア研修、オーストラリア研修、異文化理解、エンパワメントプログラム、SG課題研究、SGグローバルスタディーズ、福島県エネルギーツアー、SGH甲子園、SGH全国高校生フォーラム、高校生国際ESDシンポジウム、SGH課題研究発表会(立教大学)、地産公民科、数学科、理科、外国語科、SS家庭、SS保健、SGH課題研究

②日本人のアイデンティティを大切にしながら多様な価値観を認めることができる国際的視野を身に付けたリーダー

- ・創立134年の歴史を活かし、卒業生などの人脈を活用し、国際舞台で活躍する先輩との交流を通じてグローバル社会で活躍するための意識を育む。
- ・海外との豊富な交流機会を活用し、多様な価値観に触れることで国際的な視野を獲得する。
- ・日本の歴史や日本人が大切にしてきた思想について深く学び、日本人のアイデンティティとは何かについてのしっかりとした考えを持つ。

ドイツ研修、マレーシア研修、オーストラリア研修、異文化理解、エンパワメントプログラム、Fプラン、SG課題研究、SGグローバルスタディーズ、台湾修学旅行、海外からの視察受入(フィリピン・マレーシア・インド・アメリカなど)、国語科、地産公民科、芸術科、外国語科

③個の多様性を尊重しながら国内、海外問わず臆することなく自分の意見を発信できるリーダー

- ・SGHの各関係機関主催のフォーラム等に参加し、プレゼンや情報交換の機会を積極的に捉える。
- ・国内研修、海外研修に積極的に参加し、プレゼンテーションや意見交換を積極的に行う。
- ・自分自身のことを深く知る。その長所や特性をどのように発揮すればチームに相乗効果を与えることができるかを学ぶ。
- ・実用的な情報リテラシーを身に付け、必要とするデータや情報を的確に収集し、それを効果的にまとめる力をつける。

ドイツ研修、マレーシア研修、オーストラリア研修、異文化理解、エンパワメントプログラム、Fプラン、SGグローバルスタディーズ、SGH甲子園、SGH全国高校生フォーラム、高校生国際ESDシンポジウム、SGH課題研究発表会(立教大学)、各種英語スピーチコンテスト、英語ディベート大会参加、数学科、理科、保健体育科、外国語科、SS情報、SGH課題研究

教育課程・授業単位数表 普通科

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	#
全員 共通履修 1年	1年	国語総合(5)			世界史A(2)	現社(2)	数学Ⅰ(4)			数学A(2)	物理基礎(2)	生物基礎(2)	体育(3)	SS保健(1)	芸術Ⅰ(2)	ECⅠ(3)			EEⅠ(2)		SS情報(2)	LHR	Fスタ											
文系進学	2年	現代文B(2)	古典B(4)	日本史B(3)			世界史Bor地理B(3)	数学Ⅱ(5)			数学B(2)	化学基礎or地学基礎(2)	体育(2)	SS保健(1)	ECⅡ(4)			EEⅡ(2)		SS家庭(2)	LHR	SG課題												
国公立	3年	現代文B(3)	古典B(3)	世界史Bor日本史Bor地理B(4)	地歴探究Ⅰor政経(3)			数学探究Ⅰ(4)			理科基礎探究①	理科基礎探究②	体育(3)	ECⅢ(4)			EEⅡ(2)		選択(2)	LHR	SG課題													
私立	3年	現代文B(3)	古典B(3)	国語探究(2)	世界史Bor日本史Bor地理B(4)	地歴探究Ⅰ(3)			地歴探究Ⅱ(2)		体育(3)	芸術探究Ⅰ(2)	ECⅢ(4)			EEⅡ(2)		選択(4)	LHR	SG課題														
ディスカッション、芸術探究Ⅲ、体育探究、家庭探究、英語探究、国語探究(国)、倫理(国)、数学探究Ⅳ(国)、政経(私)、芸術探究Ⅱ(私)(2)																																		
理系進学	2年	現代文(2)	古典B(3)	日本史B/地理B(3)	数学Ⅱ(5)			数学B(2)	化学基礎or地学基礎(2)	物理(2)or生物(2)	化学探究(2)or地学探究(2)	体育(2)	SS保健(1)	ECⅡ(4)			EEⅡ(2)		SS家庭(2)	LHR	SG課題													
	3年	現代文(2)	古典B(2)	地歴探究Ⅱor政経(2)	数学Ⅲ(7)or数学探究Ⅱ(5)+国語探究(2)/英語探究(2)/体育探究(2)/芸術探究Ⅱ(2)			物理(4)+数理総合(1)			生物(5)		化学(5)or地学(5)	体育(3)	ECⅢ(4)			EEⅡ(2)		LHR	SG課題													

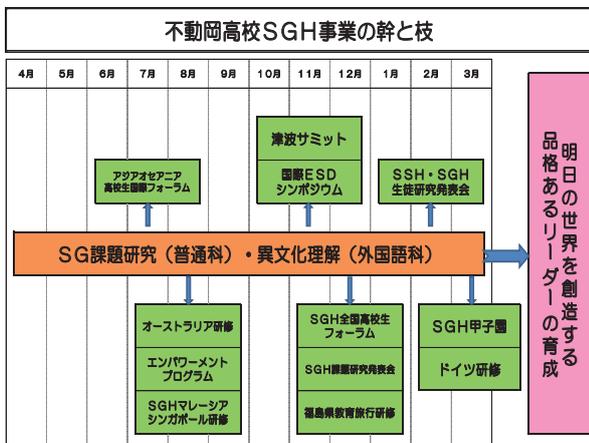
教育課程・授業単位数表 外国語科

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	#
全員 共通履修 1年	1年	国語総合(5)			世界史B(2)	現社(2)	数学Ⅰ(3)			数学A(1)	生物基礎(2)	化学基礎(2)	体育(3)	SS保健(1)	芸術Ⅰ(2)	総合英語(5)			英語表現(2)		SS情報(2)	LHR	Fスタ											
文系進学	2年	現代文B(2)	古典B(4)	世界史B(2)	日本史Bor地理B(3)	数学A(1)	数学Ⅱ(3)			物理基礎or地学基礎(2)	体育(2)	SS保健(1)	総合英語(4)			英語表現(2)	異文化理解(2)	第2外国語(2)	SS家庭(2)	LHR	SG課題													
	3年	現代文B(3)	古典B(3)	世界史Bor日本史Bor地理B(4)	地歴探究Ⅰor政経(3)			2外or数学B		体育(3)	総合英語(4)			英語表現(4)		選択(4)-倫理(2)、数学探究(2)、英語探究(2)or国語探究(2)or理科基礎探究選択①(2)、理科基礎探究選択②(2)、体育探究Ⅰ(2)、芸術探究Ⅱ(2)、芸術探究Ⅲ(2)、家庭探究(2)、ディスカッション(2)			LHR	SG課題														

Fプラン（1年次）とSG課題研究（2,3年次）

“Think globally, act locally”の精神を軸に、1年次は企業のミッションについて探究しながら、課題研究の基礎を学び、2年次には「居住する地域」の課題についてグループで探究し、解決策を提案する。そして3年次には2年次の地域課題研究の成果を論文にまとめていく。2,3年次の地域課題研究においては、①環境との共生、②他者との共生、③地方創生の3分野を設定。教材は「クエスト・エデュケーション」（教育と探求社）、「答えのない問題に、答える力が身につく本」（マイナビ）を使用する。評価については①本校が独自に作成したルーブリックを活用した自己評価と他者からの評価、②課題研究発表会のオーディエンスからの評価、③教員の観察によるグループワークにおける積極性、④教材内の個人ワークの取組、の4本を柱にしている。

130年を超える歴史の中で培われた地域とのつながりや卒業生の人脈を活用し、毎年80を超える外部機関や企業と連携をしている。また海外研修は課題研究のテーマを軸に参加者の選考を行う。

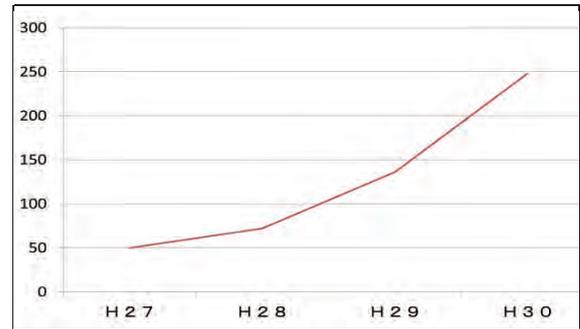


不動岡高校の国際交流

姉妹校協定をしているオーストラリアのクイーンズランド州・キングロイ高校をはじめ、SGH事業のマレーシア・シンガポール、ドイツ、SSH事業のアメリカ、日仏高等学校ネットワークによるフランス・ニューカレドニアに生徒を派遣している。海外研修希望者の急増に伴い、修学旅行の行き先を台湾とした他、夏期休業中にはアイビーリーグに通うアメリカの大学生を不動岡高校に招請し、不動岡生がホストファミリーとなり、課題研究に関連した

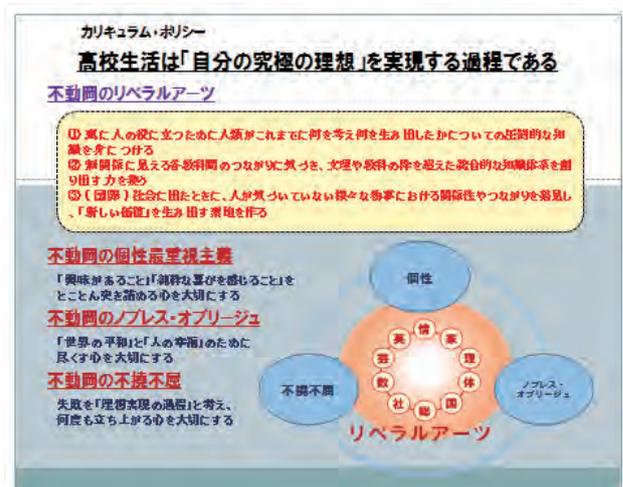
ワークショップを1週間行う国内留学プロジェクトを実施しており、毎年70名程度が参加している。

本校で実施している海外研修参加希望者の推移



新しい教育課程の完成に向けて

平成30年度に完成した本校独自のカリキュラムポリシーを教育課程に落とし込むために「新教育課程検討委員会」を立ち上げた。真に人の役に立つために人類がこれまでに何を考え、何を生み出したかについての圧倒的な知識を身につけ（不動岡のリベラルアーツ）、一見無関係に見える各教科間の繋がりを発見し、文理や教科の枠を超えた統合的な知識体系を創り出す力を各生徒が養い、社会に出たときに、人が気づかない様々な物事における関係性や繋がりに目を向け、新しい価値を生み出す素地を高校生の中に作り出せる教育課程の編成を目指している。そのような教育課程の完成こそが、本校SGH事業5年間の活動の集大成となるであろう。なお、この新教育課程は、令和元年度内には具体的な形に落とし込み、令和4年度からの実施を目指している。

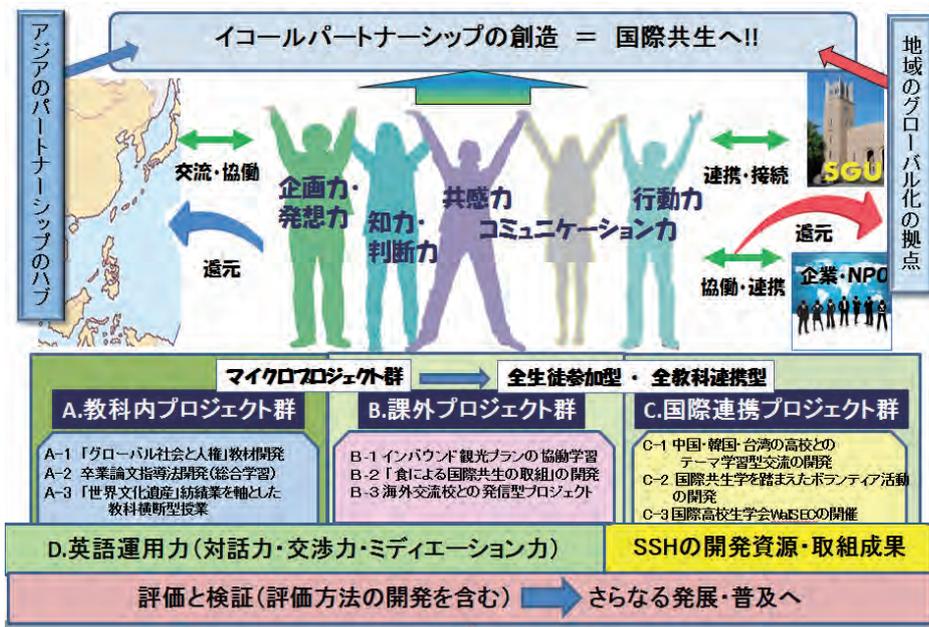


早稲田大学本庄高等学院

国際共生のためのパートナーシップ構築力育成プログラム ～チームで取り組む「マイクロプロジェクト」を通じた交流・協働・連携・還元～

【構想の概要】

国際共生を推進するために、国内外のパートナーを尊重しながら生徒が主体的にプロジェクトを企画し運営する力を養成する。授業、論文作成指導、国内外交流校とのテーマ型学習推進、発展的・先進的な課外活動など、学校生活のあらゆる機会に少人数での学習活動「マイクロプロジェクト」を組み込み、全校生徒が当事者意識を持って課題に取り組めるプログラムを開発する。



教育課程 赤枠: 研究・討論・発表スキル学習 青枠: 教科横断型展開含む

教科	1年	2年	3年
国語	国語総合④	現代文B② 古典B②	現代文B③
地理歴史	世界史B②	世界史B② 日本史A②	地理A②
公民	倫理②	政治・経済②	
数学	数学I③ 数学A②	数学B③	
理科	物理基礎② 生物基礎②	化学基礎② 化学①	地学基礎②
保健体育	体育③ 保健①	体育② 保健①	体育②
芸術	音楽I・美術I②※1		
外国語	コミュニケーション英語I③ 英語表現I②	コミュニケーション英語II④ 英語表現II②	コミュニケーション英語III④ 英語表現II②
家庭	家庭基礎②		
情報	情報の科学①	情報の科学①	
総合的な学習の時間			総合的な学習の時間②
選択科目		文系 古典講読② 数学II(文系)③ 理系 数学II(理系)③ 物理① 科学課題研究①	一右欄参照
特別活動	HR①	HR①	HR①
単位合計	計32単位	計32単位	計32単位

※1.音楽I・美術Iから1科目選択

3年次選択科目 (2019年度)
選択科目の内容は、学部・学科の専門への接続をはかるものや教科横断的なものなど多岐にわたります。

必修選択科目(文系)	必修選択科目(理系)
古典B②	数学Ⅲα③
政治経済②	数学Ⅲβ③
近現代の世界②	Academic English② (一部講座は上級)
人文社会科学特論②	物理④
数学Ⅲ③、又は 国語総合(日本語総合)②	化学②

自由選択(文系・理系共通科目、学際的科目)②
2018年度実績例・批評を読む、和歌を読む、早稲田大学と文学、地理学演習、幾何学入門、生物・地学・農業と環境、ア・カベラ、合唱、絵画、美術、スペイン語入門、中国語入門、朝鮮語入門、フランス語入門、英語学術発表基礎、食文化、多変量データ分析入門

- 3年次総合的な学習の時間(教科横断的学習)**
- 課題探究
卒業論文作成指導、及び、修学旅行事前学習
 - 「大久保山学」
本庄キャンパス(大久保山)を「教材」にした学習
大久保山で「変化を捉える」(数学・理学・工学・農学系)
大久保山と生活科学(理学・工学系)
大久保山と地球環境(英語・人文科学系)
大久保山に生活する人たちが、どんな人? (情報・理学・工学・農学系)
大久保山の樹生と森林生態学(理学・工学・農学系)
不確実性下における意思決定入門(数学・理学・工学・農学系)
「平家物語」からみる武蔵武士(国語・人文科学系)
本市周辺文学(国語、人文科学系)

授業での展開と卒業論文での学びの統合

早稲田大学の各学部にも内部進学をさせる本学院では従来から全生徒に学際的な知の鍛錬を行い、ゼミ方式の発表や討論および実地研修の機会を設け、2年後半から1年以上かけて約2万字の「卒業論文」執筆を通して、生徒個々が問いを立て探求をする教育を実施している。SGH指定を契機に、評価ガイドラインを全教科で統一し、また早稲田大学 Global Education Center(GEC) のアカデミックライティングセンターの支援も得て、論文作成法の3年生一斉指導を実施した。

1年次と2年次は「情報の科学」が「総合的な学習の時間」の役割を担い、問いの立て方・データの読み方、効果的な発表（スライドおよびポスター）の基礎を学ぶ。また、国語・理科・英語で口頭発表やレポート執筆の基礎を学ぶ。教科横断型授業の展開は、国語と世界史、政治・経済と英語、家庭基礎と英語、情報と英語で授業実践が続いている。3年次は「総合的な学習の時間」の1単位を卒業論文一斉指導に充て、3学年担任団と「進路指導委員会」（構成員は複数教科）とで大学生に求めるのと同様なスタイルの学術論文の執筆に向けて課題探求指導を行っている。

優秀な論文を執筆した3年生は年度末に2年生全員対象の「卒業論文報告会」で成果および執筆過程を発表し、後輩の指導にあたる。また、論文作成指導では慶應湘南藤沢高等部との連携も継続している。2017年度はSGH「研究課題」の学内・学外対象の成果報告会をポスター発表形式でも実施し、1、2年生が「ポスターセッション」を参観した。ポスターセッションは通常授業にも取り入れられ、発表と議論の技術として定着しつつある。

“WaISEC” 開催と生徒による運営

SGH事業が全校生徒が関わり、本学院が国内外交流校および地域の「学びのハブ」としての役割を務めることを目的として、「アジア一人と人、人と自然の共生」をテーマにした高校生国際学会WaISECを2018年11月15日～18日に開催し、会期前・会期中・会期後の約半年の学びのプロセスに、ゲスト校生徒も本学院生徒も関わる国際高校生学会の実践例を示すことができた。また、生徒の変

化としては、深いディスカッションをする機会に手を挙げたり、有識者も交えた討論の機会の希望が増えるなど、知的なチャレンジへの志向をする生徒が増えていることが観察できた。

2016年度のプレ大会を含めた実践経験から、国際高校生学術交流を行う際は、以下のポイントを押さえることを提唱したい。

- ・ 明瞭な学習テーマとリサーチクエスションの方向性のある程度教師側で示す方が、焦点が拡散しない。
- ・ 交流学習プログラムのゴールとプロセスを、相手校メンバーと十分共有する。
- ・ 関わる生徒と好ましい人間関係を作るため、「遊び」の時間もプログラム内に確保する。

4年間の検証から

SGH事業では年度末の効果検証として、「定点調査」で留学への関心や「国際的志向性」の変化を追っているが、SGH指定期間に在学した生徒は留学への関心が他の学年より高いこと、SGH指定期間に在学した生徒は「国際的志向性」および「世界の諸問題への関心」が比較的高いこと、短時間であっても留学生や海外の学生と接触する機会を持つことが、上記の志向性にプラスとして働くことが推測できる。

また、WaISEC運営チームの事後の聞き取り調査からは、負荷の高い探究学習や他校・他組織も関わる運営を生徒が担って進める場合、教師側は、たとえ細かく指導はしなくても、必要なときはいつでも助言をする姿勢、また課題への取り組みを細かいステップに分けるための支援など、生徒に見守りを感じさせる寄り添いが必要だということもわかってきた。



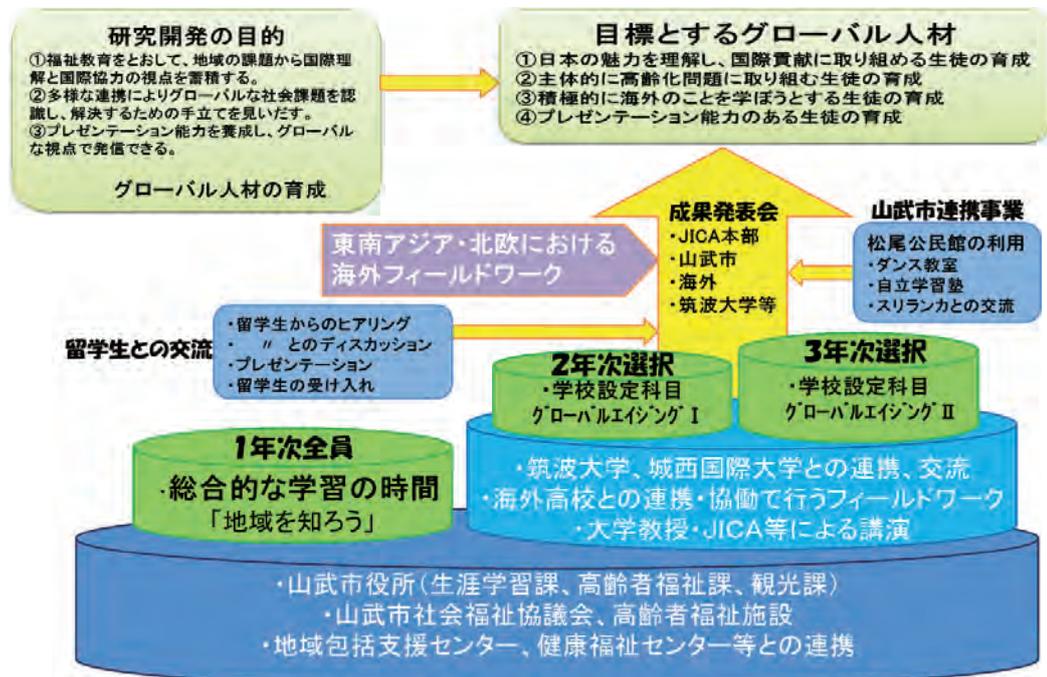
千葉県立松尾高等学校

地域から考える グローバルエイジング研究

【構想の概要】

日本の高齢化問題やその対策としての社会保障や福祉分野での制度、個人の健康管理などについての調査・研究を行う。地域と日本さらには、北欧、東南アジアを比較しながら、グローバルエイジング（地球規模の高齢化）を考え、諸課題の解決に向けて活躍できるグローバル人材を育成する。

【構想図（申請時）概略】



H29入学生用		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
1年	共通	国語総合			地理A	数学Ⅰ		数学A	生物基礎	体育		保健	芸術Ⅰ	コミュニケーション英語Ⅰ	英語表現Ⅰ	家庭総合	社会と情報	総学	LHR														
2年	文系	現代文B	古典B	世界史B	数学Ⅱ		化学基礎	地学基礎	体育		保健	*選択1	コミュニケーション英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	家庭総合	情報処理	総学	LHR															
	理系	現代文B	世界史B		数学Ⅱ		数学B	物理基礎	化学基礎	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	家庭総合	情報処理	総学	LHR																
	ビジネスコース	現代文B	*選択2	世界史B	数学Ⅱ	化学基礎	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅱ	家庭総合	簿記	情報処理	総学	LHR																			
	生活コース	現代文B	*選択2	世界史B	数学Ⅱ	化学基礎	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅱ	家庭総合	情報処理	ファッション造形基礎/フードデザイン	総学	LHR																			
福祉コース	現代文B	*選択2	世界史B	数学Ⅱ	化学基礎	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅱ	家庭総合	社会福祉基礎	介護福祉基礎	総学	LHR																				
3年	文系	現代文B	古典B	*選択3	日本史B		現代社会	数学Ⅱ	化学/生物	体育	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅱ	総学	LHR																			
	理系	現代文B	日本史A	現代社会	数学Ⅲ		化学	物理/生物	体育	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅱ	総学	LHR																				
	ビジネスコース	現代文B	*選択4	日本史A	現代社会	数学Ⅱ	地学基礎	体育	コミュニケーション英語Ⅲ	課題研究	簿記	ビジネス情報	総学	LHR																			
	生活コース	現代文B	*選択4	日本史A	現代社会	数学Ⅱ	地学基礎	体育	コミュニケーション英語Ⅲ	子どもの発達と保育	ファッション造形基礎/フードデザイン or 服飾文化・栄養	総学	LHR																				
	福祉コース	現代文B	*選択4	日本史A	現代社会	数学Ⅱ	地学基礎	体育	コミュニケーション英語Ⅲ	コミュニケーション技術	生活支援技術	介護総合演習	総学	LHR																			

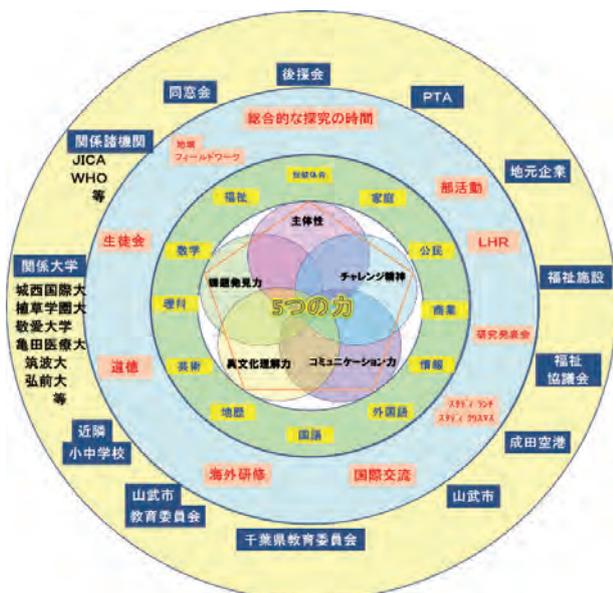
* 選択1: 芸術Ⅱ、GA(グローバルエイジング)Ⅰから一つ、 * 選択2: 基礎国語、基礎数学、芸術Ⅱ、GAⅠから一つ、
* 選択3: 実用国語、実用数学、芸術Ⅲ、GAⅡから一つ、 * 選択4: 実用国語、実用数学、芸術Ⅲ、服飾手芸、GAⅡから一つ

【教育課程表】

生徒に身に付けさせたい5つの資質・能力

本校では、様々な取組を通じて「生徒にどのような資質・能力を身に付けさせたいのか」を明確にすることで、それぞれの取組がゴールに向かって有機的につながるよう、5つの力を設定した。

さらに、全職員でこれらの活動を取り巻く環境について共通認識を持つことで、個人ではなく、学校全体でグローバル人材の育成に取り組むとともに、教員一人一人がカリキュラム・マネジメントを意識して、不断の改善を図れるよう努めている。



主体的・対話的で深い学び

生徒の活動は、まず1年次の総合的な学習（探究）の時間を使った、地域フィールドワークから始まる。すべての生徒が、地域の方と「一緒に働く」ことを体験しながら、働く人と「直接対話する」ことで、その地域や仕事が抱えている課題を発見する。



2年次以降はSGHによる学校設定科目「グローバルエイジング（GA）Ⅰ、Ⅱ」を選択することで、

グローバル化の意義と課題についてアクティブに学ぶ。1年次に発見した課題を主に高齢者福祉の面から研究し、海外フィールドワークなども通して、高校生の視点から問題解決の方法を研究し、提言する。実現可能なものは、行政により具現化されることもある。なお、GAの授業は公民科、福祉科、英語科教員及びALTによる教科横断的な授業展開としている。

【活動の流れ】

地域の課題を自分で発見し、解決策を自ら創造し、その策を提案する。

▶ 地域フィールドワーク

▶ アクションプラン

▶ プレゼンテーション
(日本語と英語)



【実現例】



海浜公園の壁画作成



改良型棒サッカーの実演

成果と普及

SGHの成果については、ポートフォリオとルーブリック、イベントへの参加状況などで測っている。ルーブリックは、5つの資質・能力各項目をさらに5つの観点に分け、生徒の変容を確認している。生徒の、「地域に具体的提言をすることができた」「アクションプランが市政に反映された」「海外の方と英語でディスカッションできた」という経験は、「自分たちが地域に役立っている」「地域と自分たちの高校がつながっている」という実感につながり、コミュニケーションが苦手だったこれまでの生活からの脱却にもつながっている。こうした本校SGHの取組により、

- 1 地域に根差すグローバルリーダー志向
- 2 自己肯定感

が生徒に育まれたことは、大きな成果と言える。

これらの成果は、引き続き本校の総合的な探究の時間に引き継ぐとともに、県教育委員会主催の学力向上交流会などを通して、県の内外に広く普及させることとしている。

教科、学習活動をつなぐプラットフォーム

教科や行事など本校でのすべての学びを一つの理念でつなぐファイリングシステム「平和共生 LogBook」を作成。すべての教科が「平和」「共生」というテーマで行う学習項目をルーズリーフページに記載、3年間ファイリングして蓄積する学習記録ノートという意味合いを持つ。聖書・礼拝での学びや、キャリア教育に関する取り組みも対象とする。基本コンセプトは以下の3点。（取り組み内容例は前頁）

- すべての教科が平和共生教育という視点で有機的につながっていることへの理解。
- 社会の諸問題を平和共生という視点から見つめ直す習慣の確立。
- 生徒 1250 名全員がこの価値観を大切にしている仲間であるというアイデンティティの共有。

個人の学びの場としての平和共生論文

平和・共生に関する考え方や理解を自ら関心のあるテーマに基づいて掘り進めていく「平和共生論文」の執筆活動。（執筆過程は前頁）

実際の執筆は2年生の秋から始まり、春休み後に書き上げた作品を提出する、という工程をたどる。

学びの共有

毎年12月に外部の学校・教育関係者、保護者をお招きして、成果発表会を行っている。様々なスタディーツアーで培われた学びの発表、代表生徒の論文の発表、養われた共生マインドに関する英語でのディスカッション等をお見せし、校内で進められているSGHの学びを広く外部の方に発信してきた。

外部に発信するSGH成果発表会と併せて、内部で学びを共有するグローバル・ウィークという催しも持っている。社会課題に取り組んでいる生徒の学びや、ボランティア部の活動、スタディーツアーでの学びを全生徒や教員と共有する一週間を、6月と10月に実施してきた（グローバル・ウィークⅠ、Ⅱ）。毎日の礼拝のメッセージを基調として、生徒が主体となり、NGOや国際機関の協力も得て、昼のセッションや放課後のワークショップを実施してきた。

「自分ごと」として、捉える仕掛けづくり

SGH指定当初は、スタディーツアーの学びを全体に伝え、二次体験者を生み出すことを目指していたが、サービスラーニングのメソッドを取り入れて、発題者のプレゼンを基に生徒個々の周囲に起こっている問題を探させる方向性へ移行していった。海外の貧困国で起こっている問題が、ここ15年間で、国内の身近な課題として検証し、取り組むべき構造にあることが分かってきた。他人事ではなく「自分ごと」としての体感を得られる現場を用意し、生徒に働きかけていく。論文の取り組みにおいても一層情熱が注がれることになる。

グーグルクラスルームの採用

本校では、サービスラーニングの取り組みにグーグルサービスを用いている。（セッションやワークショップの参加者募集、クラス化、教材提供等）

プログラム参加後はリフレクションフォームを送付し、再グループ化したり、自身の振り返りを行わせたりしている。最終的にまとめた学びの記録は、eポートフォリオに清書し、蓄積する。

この手順を普段の学習やクラス・委員会・部活動に活用しやすくするために、来年度より生徒1人1台タブレットが配布される予定である。

青学大との連携（SGHプログラム関連のみ）

- 論文執筆指導（アカデミックライティングセンター）
- 現場リソースと学びのノウハウの提供（ボランティアセンター／サービスラーニングセンター）
- 青学大「サービスラーニングⅠ、Ⅱ」講座への本校生徒の出席（来年度より）
- チャットリーダーとして青学大留学生を本校に招聘（国際センター）
- 青学大協定校留学プログラムの早期斡旋、資格試験となるIELTS講座の提供（国際センター）等

富士見丘中学高等学校

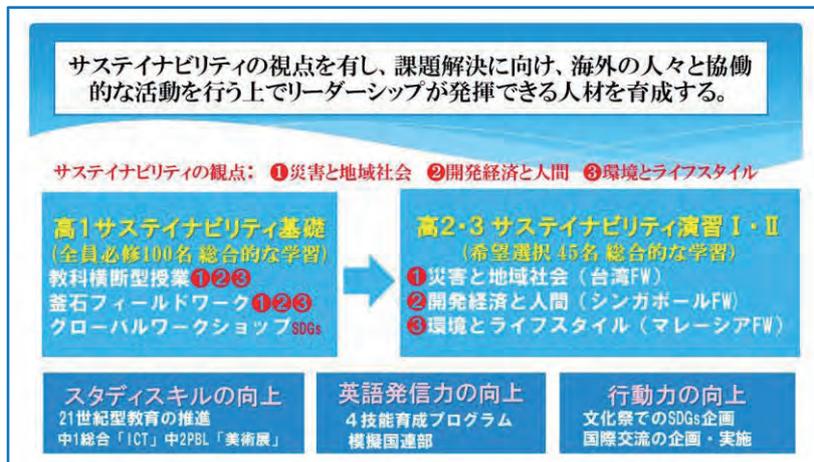
サステナビリティから創造する グローバル社会

【構想の概要】

サステナビリティの観点から社会をとらえ直し、地球規模の課題について海外の高校生や専門家と対話ができるようになるための教育プログラム「サステナビリティから創造するグローバル社会」を構築する。

生徒の課題研究を深めるため、連携大学・企業・国際機関などによる協力・支援のもと、教科横断型の探究学習「サステナビリティ基礎」「サステナビリティ演習Ⅰ」「サステナビリティ演習Ⅱ」の研究開発を行う。

また、各教科学習において研究の土台となるスタディスキルを身につける「スタディスキルの向上プログラム」、海外の高校生や専門家との対話・発信を可能とする「英語発信力の向上プログラム」、校外でのアクションによって主体性や責任感を養成する「行動力の向上プログラム」も併せて開発する。



	1年		2年				3年							
	必修科目	単位数	必修科目	単位数	選択α	単位数	選択β	単位数	必修科目	単位数	選択α	単位数	選択β	単位数
国語	国語総合	4			現代文B 古典B	3	現代文・古文読解演習 古文演習 漢文演習 国語総合(β) 小論文基礎 理系国語	2 2 2 2 2 2			現代文読解 古典読解 理系現代文演習 小論文応用	4 4 4 4	現代文演習 古典演習 国語総合演習 小論文演習	2 2 2 2
地理 歴史	世界史A 日本史A	2 2			世界史B 日本史B	3	世界文明史 日本文化史 地理B	2 2 2			世界史B 日本史B	4 4	世界史B演習 日本史B演習 地理B演習	2 2 2
公民									現代社会	2			現代社会演習 政治・経済演習 倫理演習	2 2 2
数学	数学I 数学A	3 2			数学II(a)	3	数学B 三角・指数・対数関数 文系数学IA演習 SAT MATH	2 2 2 2			数学IA演習 数学IIB演習 数学III SAT MATH	4 4 4 4	数学IA基礎演習 数学IIB基礎演習 数学III演習 SAT MATH	2 2 2 2
理科	化学基礎 生物基礎	2 2			化学(a) 生物(a) 物理 地学	3 3 3 3	化学(β) 生物(β)	2 2			化学 生物 物理 地学	4 4 4 4	化学演習 生物演習 物理演習 地学演習	2 2 2 2
保健体育	体育 保健	3 1	体育 保健	3 1					体育	3			体育実技演習	2
芸術	音楽Ⅰ	2	音楽Ⅱ	2			美術Ⅰ 書道Ⅰ	2 2					音楽演習 美術演習	2 2
外国語	コミュニケーション英語Ⅰa R.A.L.A.* コミュニケーション英語Ⅱ 英語表現Ⅰ A.O.C.* EXTENSIVE READING # ACADEMIC ENGLISH	4 2 2 2 1 1 (2)	コミュニケーション英語Ⅰa R.A.L.A.* コミュニケーション英語Ⅱb 英語表現Ⅱ A.O.C.*	4 3 3 2 2			ADVANCED ENGLISH I INTERMEDIATE ENGLISH I BASIC ENGLISH I LISTENING・SPEAKING I ACADEMIC ENGLISH	2 2 2 2 2	コミュニケーション英語Ⅱ R.A.L.A.* 英語演習 英語表現Ⅲ A.O.C.*	4 3 2 2 1		ADVANCED ENGLISH II INTERMEDIATE ENGLISH II BASIC ENGLISH II LISTENING・SPEAKING II	2 2 2 2	
家庭	家庭総合	2	家庭総合	2			調理演習 袖服演習	2 2					調理演習 袖服演習	2 2
情報			社会と情報	2	情報演習	3					情報演習	4		
総合	サステナビリティ基礎 自主研究5×2(課外)	2	サステナビリティ演習Ⅰ 自主研究5×2	2					サステナビリティ演習Ⅱ 卒業研究	2				
単位数合計	36		23		9		6		15		12		0~6	
特別活動	LHR	1	LHR	1					LHR	1				
総合計	37				39						29~35			

サステナビリティ基礎、演習Ⅰ・Ⅱ

サステナビリティ（持続可能性）に関わる社会課題を探究する授業として、「サステナビリティ基礎」「サステナビリティ演習Ⅰ・Ⅱ」を、高1～高3の総合的な学習の時間（2単位）に実施している。

高1全員（100名）が履修する「サステナビリティ基礎」は、「災害と地域社会」「開発経済と人間」「環境とライフスタイル」という3つの視点（テーマ）の基本的な理解と課題研究へのモチベーション喚起が目的。①教科の異なる3名の教員がチームとなり、3名×3チームで指導する「教科横断型授業」、②10月に岩手県釜石市を訪問し、社会課題の現場で学ぶ「釜石フィールドワーク」、③慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科と連携し、大学院生・留学生とともにICTを活用してグローバルな課題を学ぶ「グローバルワークショップ」の3つの内容を実施している。



高2・高3の「サステナビリティ演習Ⅰ・Ⅱ」は、「災害と地域社会」「開発経済と人間」「環境とライフスタイル」の3つのゼミに分かれ、各学年45名（15名×3）の生徒が選択履修する（非選択者は「自主研究5×2」を履修）。それぞれが関心を持ったテーマについて、本校教員2名と大学の研究室・専門の研究者による指導・助言を受け、海外フィールドワークを経ることにより、グループ研究を深化させていく。研究成果は、英語プレゼンテーション（高2）、英語研究論文（高3）にまとめ、ルーブリックにより評価を行う。

	災害と地域社会	開発経済と人間	環境とライフスタイル
主な連携大学	慶應義塾大学環境情報学部 大木聖子研究室	シンガポール経営大学 経済学部 藤井朋樹研究室	慶應義塾大学理工学部 伊香賀俊治研究室
海外FW	台湾（台中） 	シンガポール 	マレーシア（ジョホール） 

3つのスキルアップ・プログラム

課題研究や海外の高校生との研究交流の土台となる力を身につけるため、(1) 行動力の向上、(2) 英語発信力の向上、(3) スタディスキルの向上の3つのプログラムを企画・実施し、全教員がSGH事業に関わる体制としている。

「行動力の向上」では、文化祭におけるSDGs企画、生徒会の呼びかけによる社会貢献活動、生徒主体の国際交流会などを実施。「英語発信力の向上」では、英語4技能向上のための授業改善、ネイティブ教員との連携強化、英語関連のコンテストへの参加推進などを実施。「スタディスキルの向上」では、ICT活用およびアクティブラーニング教員研修、中1「ICT学習」、中2「美術展づくりプロジェクト」などの特別授業を企画・実施した。

成果と課題

毎年2月に実施しているSGH研究発表会は、年を追うごとに発表内容が充実し、生徒・教員ともにSGHの成果を実感している。この5年間で、CEFRのB1レベル以上の生徒の割合（16%→60%）、国内外の課題発表会での入賞者数（3人→23人）海外大学への進学者数（1人→8人）など、設定した成果目標はほぼ達成することができた。SGH甲子園で、優秀賞（2017年、2018年）、最優秀賞（2019年）を3年連続で受賞できたことは、本校生徒の大きな自信となっている。

今後の課題は、①SGH予算終了後の高大連携、国内外FWの持続的な実施、②新たな数値目標の設定③教科内での探究指導のさらなる充実、である。

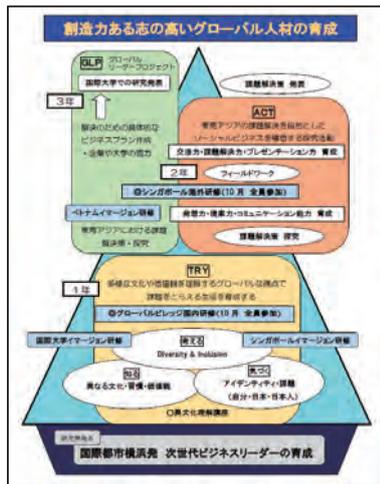


横浜市立南高等学校

国際都市横浜発 次世代ビジネスリーダーの育成

【構想の概要】

- 総合的な学習の時間（平成31年度＜令和元年度＞入学生からは総合的な探究の時間）「TRY & ACT」を中心に、東南アジア地域を主たるフィールドとして、持続性のあるソーシャルビジネスによって社会の課題を解決するアイデアを構想し、実践することができる次世代ビジネスリーダーの育成を目指す。
- 「環境」「資源」「経済」の側面から東南アジア社会の課題を捉えるため、専門家からのレクチャーや国内グローバル系大学との連携によるグループワーク等の協働学習、国内外フィールドワークによる探究活動等を通して、多様な文化や価値観を理解するとともに、コミュニケーション能力や論理的な思考力を育成する。
- 探究活動の深化を図るため、2年生より「グローバルリーダープロジェクト」(GLP)を設置し、海外イマージョン研修、現地フィールドワークなどを進め、将来のキャリアイメージの拡大も図る。



1年	2年	3年
TRY	ACT	
異文化を受容と、世界に貢献する意欲を持つ (Diversity and Inclusion)	東南アジアの課題発見	ビジネスによる東南アジアの課題解決プラン提案
	グローバルリーダー・プロジェクト グローバルビジネス課題解決型プログラムによる未来予測と起業 1月 研究発表 3年7月 国際大学研究発表	
	● シンガポールイマージョン ● ベトナムイマージョン ● シンガポール海外研修 (2学年) ● グローバルビレッジ (1学年) ● 国際大学国内イマージョン	

横浜市立南高等学校 令和元年度入学生 教育課程表

一部変更することもあります。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
1年	国語総合		世界史A		日本史A		数学I	数学II	数学A	物理基礎	生物基礎	体育	保健	(芸術選択) 音楽I 美術I 書道I	英語I	コミュニケーション	英語表現I	社会と情報	総合的な探究の時間	LHR													
2年	現代文B	古典B	現代社会	数学II	数学III	数学B	(理科選択) 化学基礎 地学基礎	体育	保健	英語II	コミュニケーション	英語表現II	家庭基礎	(4単位選択) 世界史B 日本史B (2単位選択) 地理A 政治・経済 物理 化学 生物 音楽発展 美術発展 書道発展 英文化理解 情報の科学 7&2' 5&1' Aと7' 5&1'	総合的な探究の時間	LHR																	
3年	現代文B	現代文B	現代文B	古典発展	数学総合 (数学I・数学II・数学A・数学B)	数学III	体育	コミュニケーション英語III	英語表現II	(4単位選択) 古典発展 世界史発展 日本史発展 地理B 政治・経済発展 物理 化学 生物 地学 (2単位選択) 国語表現 古典探究 地理探究 世界史探究 日本史探究 倫理 倫政探究 政治・経済 数学探究A 数学探究B 物理応用 化学応用 生物応用 地学応用 生物・化学探究 生物・地学探究 A&T-FA&T入ハート 音楽研究 演奏研究 美術研究 絵画 書道研究 英語応用 英語理解 フードデザイン 家庭看護・福祉と保育 ファッションデザイン 課題研究 (情報)	総合的な探究の時間	LHR																					

英語コミュニケーション能力に関する状況

2年生が全員で参加するシンガポール海外研修のほか、国内外イメージ研修や英語によるプレゼンテーション等、ツールとしての英語を実際に活用する場面を多く設定している。英語を活用したコミュニケーションを通して、世界の多くの人たちと意思疎通ができる喜びを感じさせながら、上達への意欲を喚起した。

平成30年度は3年生の91%が、6月に実用英語検定を受験した。これにより、高校入学時から卒業時までの3年間にわたる同検定の取得状況を比較することで、同一指標を用いた英語能力の伸長を検証することができた。

平成28年度入学生の、CEFRのB1～B2レベル以上の生徒の割合は、高校入学時に12.9%であったものが、高校2年生修了時に34.3%、高校卒業時には53.5%となっており、SGH指定の3年間に英語コミュニケーション能力が確実に伸長している。

【1年生4月（入学時）から3年生3月（卒業時）までの3年間の経年変化】

	実用英語検定 平成28年4月 (入学時)	実用英語検定 平成29年3月 (高1修了時)	実用英語検定 平成30年3月 (高2修了時)	実用英語検定 平成31年3月 (卒業時)
C2レベル	0人	0人	0人	0人(0人)
C1レベル	0人	0人	0人	1人(1人)
B2レベル	0人	2人	2人	24人(3人)
B1レベル	22人	43人	57人	67人(5人)
A2レベル	125人	114人	101人	74人(2人)
A1レベル	23人	13人	12人	6人(0人)

※CEFRの英語習熟度レベルに換算した数値。未受験の生徒は含まない。

※平成31年3月の数値は、3年生からSGH非対象となった生徒も含んでいる。

なお、平成30年度3年生のSGH対象生徒（GLP生徒）については、内数として（ ）で表記した。

課題探究の基礎を身につける

1年生全員を対象にした総合的な探究の時間に行う課題研究活動「TRYグローバル」のカリキュラムの中で、国際社会の多様性の理解や、課題を探究するにあたっての柔軟な発想や思考に資するよう、専門家等の講演やワークショップの機会を設けた。

「IBM講座」や「米国外交官講座」において異文化を受け入れる視座の必要性を実感したり、「デザイン思考講座」での演習を通して課題の発見方法を習得したりするなど、これからグローバルな課題探究を進めていくうえで、基礎となる知識や技能を身につけるといって効果的なプログラムである。

また、1年生全員を対象に一泊の宿泊研修を実施

している。そこで、公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）やグローバル企業の方々を講師として種々ワークショップを行い、異文化適応力や課題解決能力の向上に資する企画となっている。

研究を相互に支える生徒を教員がサポート

課題設定や解決策の模索等、種々活動が進みつつある7月に、3学年の生徒がそれぞれのTRY&ACTの学習について情報を交換し、これまでの活動を振り返ったり、今後の活動に見通しをもったりする時間を設けている。

1年～3年の生徒2人ずつの6人グループに、教科に関係なく教員がつく。そして、例えば、1年生が「文化の違う人々と一緒に仕事をするには」という課題に対しての自分たちの考えを同じグループの2・3年生に説明して共有し、2・3年生からのアドバイスを受ける。さらに複数教科の教員が、テーマや意見等について教科横断的な視点で必要に応じて助言し、活動の質や意欲の向上に努めている。

GLPの取組で研究の深化

「TRYグローバル」で身につけた知識や技能を踏まえ、「ACTグローバル」として東南アジアの課題を発見しソーシャルビジネスの手法で解決策を提案する活動を続ける。その中で、研究の深化を希望する生徒約40人を上限に、グローバルリーダープロジェクト（GLP）として、本校教員と外部の講師（横浜市立大学、慶應義塾大学、株式会社日本政策金融公庫、種々グローバル企業等）から指導・支援を受けた。グローバルな問題につながる分野において自ら課題を定義し、国内外のフィールドワークを行い、分析検討し、解決策を提案した。

平成30年度の2年生GLP14名は、課題意識に応じていくつかのチームに分かれ、東南アジアの課題を発見してビジネスプランを立案し、起業に向けた行動計画を作成した。「第6回高校生ビジネスプラン・グランプリ」（日本政策金融公庫主催）で、全国4359件中、ベスト10に1チーム、ベスト100に1チームがそれぞれ選出されたことは一つの成果である。

法政大学国際高等学校

持続可能な社会の実現を担う グローバル・リーダー育成プログラム（GLP）の開発

【構想の概要】

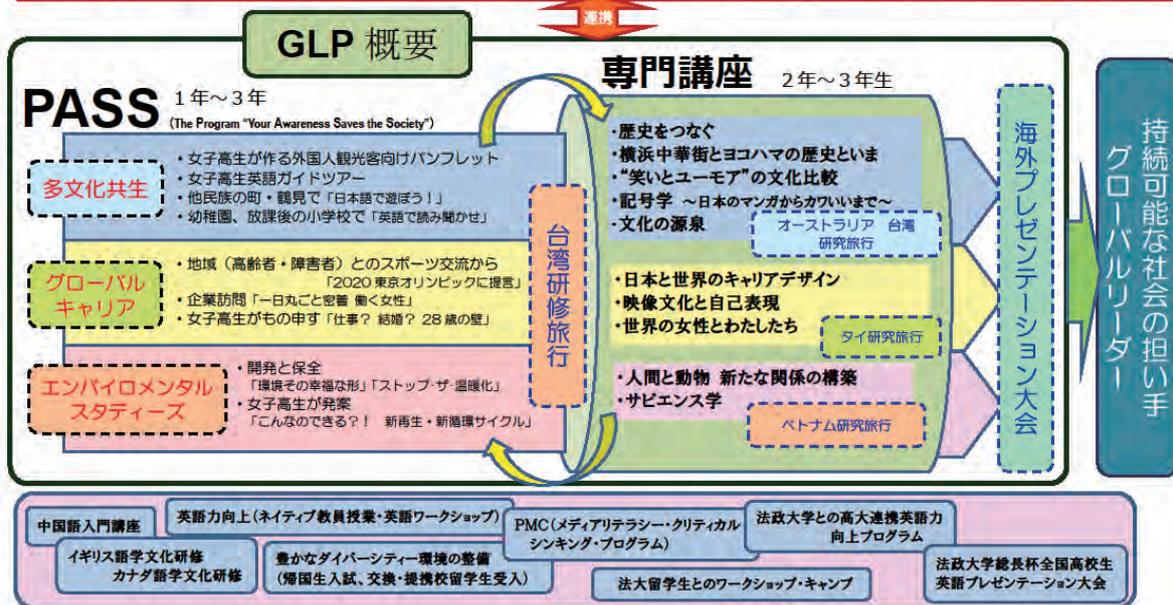
持続可能な社会の実現に向けて解決すべき諸問題を3領域「多文化共生」・「グローバルキャリア」・「エンバイロメンタル・スタディーズ」に大別し、各領域を、実社会での体験的アプローチ：The Program “Your Awareness Saves the Society” (PASS) と、専門家の話やワークショップに参加する学術的アプローチ：「専門講座」の二つから学ぶ取組みを行う。前者は、主に企業やNPO団体および行政の取組み等との連携により、後者は、主に法政大学をはじめとする国内外の大学等との連携により、実現させる。これら二つのアプローチを通じて、社会への高い参画意識や行動力、ならびに、論理的思考に基づく問題抽出力やその解決能力の育成を図り、次世代のグローバルリーダーに必要な資質を体得させる体系的なプログラムを開発する。

持続可能な社会の実現を担うグローバル・リーダー育成プログラム（GLP）

法政大学女子高等学校

持続可能な社会の構築のために、世界が抱える課題を「多文化共生」「グローバルキャリア」「エンバイロメンタル・スタディーズ」の3領域に分け、①社会に参与するプログラム「PASS」、②学術的探究プログラムである「専門講座」の2つのアプローチから探究し、課題解決方法を提言する。

提携・連携： 法政大学 日本台湾教育センター 淡江大学 キリン株式会社環境推進部(予定) MFC(マイ・フューチャー・キャンパス) NPO 法人 ABC ジャパン 横浜市国際交流協会 全国高校生エコ・アクション・プロジェクト ホーチミン市人文社会科学大学(予定) など



【本校の教育課程】 ※18年度より国際高校と校名変更。男女共学、新カリキュラム（単位制）をスタートさせた。

1年目	世界史A(2)	化学基礎(2)	コミュ英(4)	2, 3年目	国際理解I、II	体育(2)×2
HR(1)	数学I(3)	体育(2)	英語表現(2)	HR(1)×2	卒業論文(各2)	家庭基礎(2)
総合的学習(1)	数学A(2)	音楽I	社会と情報(2)	総合的学習(1)×2	生物基礎	保健(2)
国語総合(4)	物理基礎(2)	美術I(各2)	リテラシー(1)	現代社会(2)	地学基礎(各2)	選択科目

PASSの概要

「PASS」は、本校の全生徒（18年度1年次生は297名、2年次生、3年次生はともに265名）が3年間取り組んでいるSGHプログラムの核の一つである。1、2年次においては、生徒（3～5名程度のグループ）が自らの手で社会課題を見出して、その解決に向けたプランを立案し、具体的なアクションに移行させていく。3年次は個人活動となり、各自が2年間の取り組みについてまとめたポスターを作成して、社会に向けた提言をプレゼンテーションしていく。

1、2年次のそれぞれでは、「総合的な学習の時間」の年間15時間程度を、3年次ではおよそ8～10時間程度を生徒の活動のために確保している。ただし、課外活動を重視したプログラムであるため、生徒たちは、放課後や土日、夏季休暇などの時間にも様々な活動をしている。

外部に向けた発表の場としては、「SGH中間発表会」（1、2年生の生徒全員が発表するプレゼン大会で高い評価を得た代表チームによる発表の場。1月に実施）と、「PASS成果報告会」（3年生全員が発表するポスター大会において高い評価を得た生徒が、個人発表を行う。9月に実施。）の二つを毎年実施している。運営指導委員の先生方から様々なアドバイスをいただいているほか、生徒保護者、定期的に交流している他のSGH校（横浜国際、公文国際）の生徒、来場された他校の先生方なども積極的に発言をされていて、毎回生き生きとした〈学び〉が展開している。

課題研究の発表会は、学校を外部に開くことで、教育活動のフィードバックを得られる貴重な場だと言える。と同時に、生徒の〈学び〉の定着、深化において大きな役割を果たしている点も見逃すべきではない。1年次生を対象にGoogleフォームを使用したアンケートを実施したが、「PASSの取り組みテーマの理解が十分深まった」、「深まった」という回答と、発表会への選出経験との間には強い相関があった。また、外部向けの場で発表したいという生徒の積極性自体、年々高まっている様子が窺える。

SGH指定以降、課題研究の「プレゼン」という実践は、生徒たちの学校生活の中にしっかりと根を下ろしたことに間違いはない。そしてそれは、各授

業におけるアクティブ・ラーニング的な実践とも年々結びつきを深めていると言える。



※中間発表会の様子。

専門講座の概要

「専門講座」は、本校のカリキュラムの中にある「国際理解Ⅰ」と「Ⅱ」に設置されている選択授業である（全10講座を設定。希望による選択）。教科科目の枠にとらわれず、教員が自分の専門性を活かしながらテーマを設定。大学のゼミのスタイルを取り入れ、ディスカッション、発表、レポート作成などに取り組んでいる。

幾つかの講座においては海外研修を実施。台湾の淡江大学にある「村上春樹研究センター」、タイのバンコクにあるYMCAパヤオセンター、ベトナムのホーチミンにあるJICAなど、様々な海外大学や機関と連携をして、フィールドワーク、ディスカッション、プレゼンテーションなどを現地で行っている。そうした実践に取り組んだ生徒の成果は、上記した外部向け発表の場で生徒自身が報告しているほか、『生徒論文集』にもレポートを掲載している。



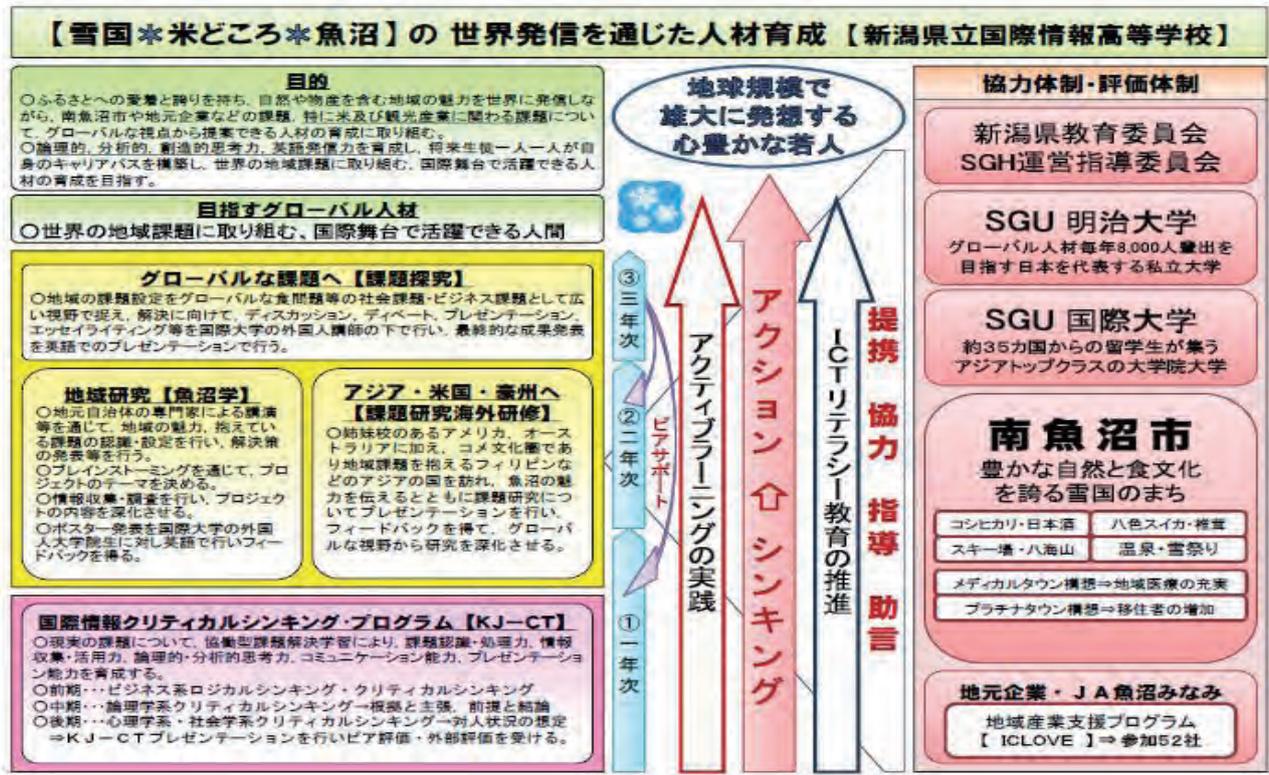
※タイでのフィールドワーク。この時の様子は『高校生新聞』（2017年10月10日）でも紹介された。

新潟県立国際情報高等学校

雪国*米どころ*魚沼の世界発信を通じた人材育成 ～浦佐から世界へ～

【構想の概要】

国際文化科、情報科学科を設置する専門高校としての教育を土台に、雪国で米どころでもある地元魚沼の魅力の世界に発信しながら、スーパーグローバル大学の国際大学・明治大学との連携を通じて、地域が抱える課題、さらには関連する世界の地域課題について、グローバルな視点から考察・提案できる人材の育成を目指す。



新潟県立国際情報高等学校 平成30年度入学生 教育課程表

教科	科目	単位数	第1学年	第2学年	第3学年	単位	計
		必修	必修	必修	必修	必修	必修
国語	国語総合	4	5				18
	現代文	B	4	3		3	
	古典	B	4	3			
	世界史	B	4	4			
	日本史	B	4				
地理	地理	B	4				12
	世界史特論*					◇(4)	
	日本史特論*					◇(4)	
	地理特論*					◇(4)	
公民	現代社会	2		2			2
	数学						
数学	数学I	3	3				17/12
	数学II	4	1	4			
	数学A	2	2				
	数学B	2		2			
	数学総合*						
理科	科学と人間生活	2	1				10/8
	化学基礎	2	2				
	生物基礎	2		2			
総合理科I*				1			★(4)
総合理科II*							

教科	科目	単位数	第1学年	第2学年	第3学年	単位	計	
		必修	必修	必修	必修	必修	必修	
保健体育	保健体育	7~8	3	2		2	9	
	音楽	2	1	1				
芸術	音楽	1	2	0(2)			2	
	美術	1	2	0(2)				
	書道	1	2	0(2)				
家庭	家庭	2		1			1	
	情報社会と情報	2						
共通教科・科目 小計			25	25	22/13		72/63	
専門教科	総合英語		5	4		4	23/21	
	異文化理解				★(2)			
	英語表現A*		2					
	英語表現B*			2		2		
	上級英語*					2		
	国際理解*							▲(4)
	国際地域文化研究*							▲(4)
	グローバルスタディーズⅠ(国際)*		2	1				7/18
	グローバルスタディーズⅡ(国際)*				★(2)			
	専門教科・科目 小計			9	9	12/21		
L+R			1	1		1	3	
総合的な学習の時間			1	1		1	3	
合計			36	36	36		108	

愛知県立時習館高等学校

日英独高校生の国際シンポジウム等による グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

本校の「自ら考え自ら成す」の精神を実践し、「問題（課題）発見・解決力」「論理的思考力・批判的思考力」「英語によるプレゼンテーション能力」「異文化理解力」等の国際的素養を身に付けた、日本の未来を創造的に描くことのできるグローバル・リーダーの育成を、以下の4つのカテゴリーに分類して行う。

- ① カリキュラム開発
- ② 国内の大学や企業等と連携した「SGH発展学習」
- ③ 日本及び日本を取り巻くアジアについての探究活動
- ④ 英国、ドイツ、マレーシアの姉妹校や海外の大学、国際関連機関、企業と連携した「SGH海外学習」



□教育課程表

※○内の数字は1週間あたりの時間数 ★SS&SG ESP…SS&SG English for Social Purposes ◆SS総合理科AもしくはSS総合理科B

学年	SG日本文化探究 I	SGアジア探究	数学 I	数学 A	数学 II	数学 B	SS総合理科A	SS総合理科B	体育	SS健康科学	音楽 I	美術 I	書道 I	コミュニケーション英語 I	★SS&SG ESP I	家庭基礎	探究基礎	LT
1年	⑤	②	②	②	①	①	②	②	②	①	②	②	②	④	②	②	③	①
2年 グローバルコース	SG日本文化探究 II	世界史B	日本史B	地理B	数学 II	数学 B	◆SS総合理科C	体育	SS健康科学	音楽 II	美術 II	書道 II	コミュニケーション英語 II	★SS&SG ESP II	SS国際探究	LT	①	
3年 グローバルコース	現代文B	古典A	古典B	世界史B	日本史B	地理B	人間の思想	発展数学	数学演習	SS総合理科A	SS総合理科B	SS総合理科C	体育	コミュニケーション英語 III	★SS&SG ESP II	SSグローバル	LT	
	②	②	②	③	③	③	①	③	②	②	②	②	③	⑤	②	①	①	

1学年 320名で、第1学年は全員がSGHの対象である。第2・3学年は「サイエンスコース（理系）」と「グローバルコース（文系）」に分かれる。そのうち後者がSGHの対象で、各学年約120名が該当する。

カリキュラム開発

(1) 課題研究を実施する科目

本校では、学年進行で「アジアの中の日本を知る」(第1学年)、「世界の中の日本を知る」(第2学年)、「日本の未来を描く」(第3学年)の各目標に沿った課題研究を段階的に展開し、以下の①～③の学校設定科目を設けている。そのいずれにおいても、連携大学である愛知大学より招聘した教員及び留学生在が研究指導にあたるほか、生徒は研究にあたり、同大学の図書館で論文検索を行うことができる。

① SGアジア探究 (第1学年)

公民科、2単位

10月中旬以降に集中して、教員が設定した5つのカテゴリについて、グループ研究を実施する。

② SG国際探究 (第2学年)

学校設定教科「SS&SG」、1単位

年間を通して、SDGsに基づいて生徒が設定したカテゴリについて、グループ研究を実施する。

③ SGグローバル社会探究 (第3学年)

学校設定教科「SS&SG」、1単位

年間を通して、各自で進路目標に関連したテーマを設定して個人研究を行い、行動計画を発表する。

(2) 課題研究に関連する科目

① 探究基礎 (第1学年)

学校設定教科「SS&SG」、3単位

課題研究を行うにあたって必要となる能力(情報活用能力、数的処理能力、論理的思考力等)を身につけることを目的に、3つの分野から展開する。

② SS&SG ESPI・II (第1～3学年)

英語科、各学年2単位

課題研究やその発表に必要な能力や態度を、表現活動を通して育成する。2年次に行う事業では、豊橋技術科学大学の留学生在が講師として参加する。

(3) 課題研究以外の科目

SG日本文化探究I・II (第1・2学年)

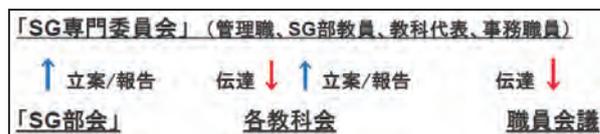
国語科、第1学年：5単位、第2学年：6単位

日本の文化や伝統を深く知り、それを伝えることに重きを置く。文化の発信については、3ヶ国の姉妹校生徒が来校する機会に発表会を設けている。

課題研究成果の校内での共有

「SGアジア探究」と「SG国際探究」については合同で成果発表会を設け、学年を超えた研究成果を互いに共有している。また、次年度初頭にはSSHと合同で、事業全体の成果発表会を行っている。

教員は担当分掌「SG部」を中心に、下図に示すような体制をとり、情報共有の体制を整えている。



成果に関するエビデンスとそこからみえる課題

事業の成果は、生徒及び教員の自己評価に基づいて実施する「SG意識調査」で検証している。同調査は、研究構想にある「グローバル・リーダー」に必要なと考えられる8つの要素について問うている。

本校生徒はこの調査に限らず、各種調査においてハードルを高め設定する傾向がみられる。平成30年度に実施した「SG意識調査」でも、異文化理解力についてその傾向が示された。課題研究にかかる指導の中で生徒の自己肯定感を高め、発展的な取組に挑戦する機運を高めることが課題である。

同年度の教員向け調査では、生徒の能力等が「大変増した」もしくは「増した」と回答する割合が高かった。一方で、年間事業計画の立案に遅れをとった事業に関する項目では数値がやや低くなっており、早期の計画及び立案の重要性が課題といえる。

他校への成果の普及と今後の展望

本校の研究開発による成果は、成果発表会で共有を図るほか、別途「情報交換会」として質疑応答や研究協議の場を設け、他校への普及を図っている。「総合的な探究の時間」の開始を控え、本校の取組を参考に探究型授業の計画に着手した学校もあると聞く。今後は、本校で課題研究指導に携わった教員が、その経験を他校で生かすことが期待される。

指定終了後は県の事業において、持続可能な形で課題研究への取組等の事業を継続させ、「グローバル・リーダー」を地域、並びに世界へ輩出したい。

中部大学春日丘高等学校

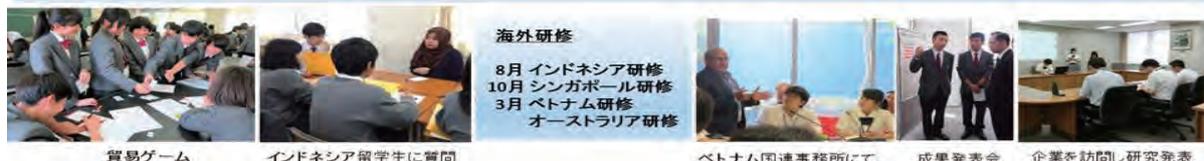
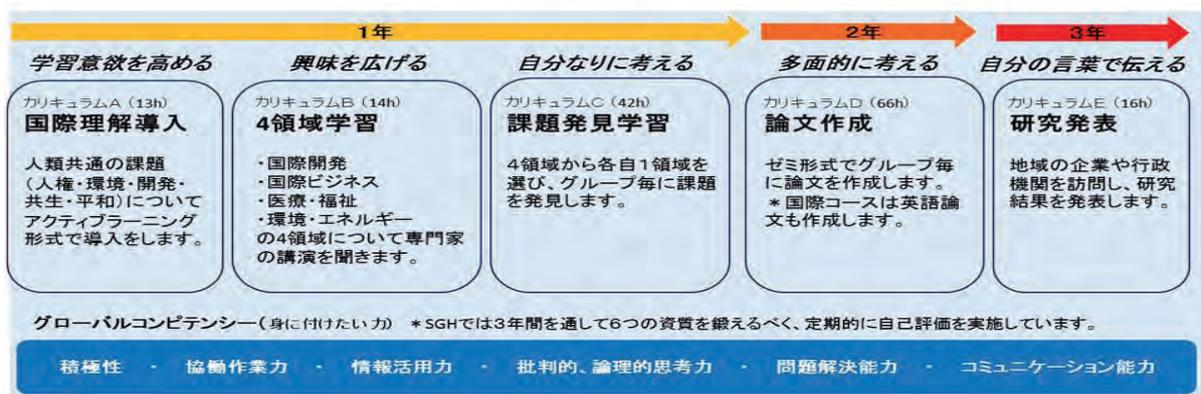
中部圏のグローバル化を推進する 若きパイオニアの育成

【構想の概要】

中部大学の全面協力による少人数グループゼミ形式で東南アジア、東アジアを主な研究領域とし、4つの研究分野（国際開発、国際ビジネス、環境・エネルギー、国際医療・福祉）を設定し、学校設定科目「グローバル課題研究」において課題探究型学習をする。春日井商工会議所、グローバル展開をする地域企業、海外提携大学・提携高校と連携し、国内・国外のフィールドワークを効果的に位置付ける。さらに、学校設定科目ロジカル・シンキング（国語）、クリティカル・ライティング、イングリッシュ・プレゼンテーション（英語）を教科横断的に関連付け、グローバルコンピテンシー（①積極性 ②協働作業力 ③創造力（問題解決能力） ④批判的・論理的思考力 ⑤判断力（情報活用能力） ⑥コミュニケーション能力）を有するグローバル・リーダーを育成する教育カリキュラムを研究する。



スーパーグローバルハイスクール (SGH) 3年間カリキュラム



教育課程 (一部抜粋)		国際コース			啓明コース			進学/特進コース		
教科	科目	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
SGH	グローバル課題研究	2	2	2	2	1	1	1	1	1
	ロジカルシンキング	1	1	1						
	クリティカルライティング	2	2	2						
	イングリッシュプレゼンテーション	2	2	2						

* 数字は単位数

I SGH カリキュラム開発（教科の取り組み）について

1 グローバル課題研究（3カ年 3～6単位）

＜グローバル課題研究を通して得られる力＞

- (ア) 課題発見能力・設定力や、協働学習を通し他者と協力して問題解決できる力を身に付ける。
- (イ) 論理的思考力・表現を高めることができる。
- (ウ) 多面的かつ総合的なものの見方を身に付けることができる。
- (エ) 知的好奇心が喚起され、大学での学びに対する興味・関心が高まり、自律的に学び続ける意欲を醸成できる。

上記の目標が実現でき、グローバルリーダーを目指すためのグローバルコンピテンシー（積極性、協働作業力、情報活用能力、批判的思考力、コミュニケーション能力、問題解決能力）を育てることが本カリキュラムの目的である。3年間の学びをAからEの5段階に分けて学びを深化させていくカリキュラムを作成し、年2回の自己評価票の集計数値から各能力の伸長を測っている。

＜第1学年＞

- A 参加型学習による国際理解教育
- B 4領域（国際開発、国際ビジネス、環境・エネルギー、医療福祉）の概要理解（専門家講演）
この間に領域の選択とグループ編成
- C 問題認識学習、情報収集、留学生との意見交換、校外学習
この間にプレゼンテーション

＜第2学年＞

- D ゼミ形式での研究、論文作成（国際コースは英語論文も作成）
この間にインドネシア・シンガポール・沖縄・ベトナム研修

＜第3学年＞

- E プロジェクト提案作成（国際コース）
また、「グローバル課題研究」の横断的学習活動として位置付けながら批判的思考力、コミュニケーション能力を高めることを狙い、英語科目「クリティカルライティング」「イングリッシュプレゼンテーション」、国語科目「ロジカルシンキング」を新設した。

2 クリティカルライティング（3カ年 6単位）

この科目は、ネイティブスピーカーの指導により、

国際コースの教科として実践している。グローバル課題研究の内容を英語で論述することを主眼に論理的思考力、情報収集力、発進力を向上させることを目的としている。イングリッシュプレゼンテーションやロジカルシンキングといった他の科目との相乗効果も期待でき、英語で書くスキルを身に付けることができる。

3 イングリッシュプレゼンテーション（3カ年 6単位）

この科目は、英語の会話、プレゼン能力の向上を意図している。スピーチやディベート、ディスカッションの技術を磨き、英語で発信して自分の考えを相手に伝えるスキルを身に付けることができる。グローバル課題研究との横断型の授業展開を心掛け、グローバル課題研究の内容を利用して、科目の目的である発信力向上を確実に実現している。その成果は各種発表の場における生徒のプレゼンテーション力に現れている。

4 ロジカルシンキング（3カ年 6単位）

ロジカルシンキングは国際コース国語の一科目として設定している。他者とのコミュニケーション能力を高めるためペアワークやグループワークを活用し、フィンランドメソッドの手法を用いて実践している。第1学年では論理力と表現力に力点を置き、第2学年では多角的なもの見方を養う批判的思考力やコミュニケーション能力の向上を目指している。

II 国際交流プログラムについて

従来のオーストラリア語学研修、シンガポール研修に加えて、SGH 指定後にインドネシア研修、ベトナム研修、オーストラリア短期・中期留学プログラムが生まれた。シンガポール、インドネシア、ベトナム研修では、「グローバル課題研究」の探究学習に基づき、現地の国際機関、企業、大学、高校等を訪問し、現地で探究活動をしている。また現地校の生徒も本校を毎年訪れ、相互に交流している。

さらに、インドネシア、ベトナム、タイ、韓国、カナダ、オーストラリアの海外6か国の提携校8校より生徒を招き、3泊4日のホームステイプログラム「Haruhigaoka SDGs Global Meeting」を開催し、SDGsをテーマにした協働学習や課題研究発表会を実施している。

京都市立西京高等学校

エンタープライジングな グローバルリーダー育成プログラムの開発

【構想の概要】

本校が育成するエンタープライジングなグローバルリーダーは、次の4つの能力、すなわち、(1)物事を「問題化」する能力、(2)真の情報活用能力、(3)異文化や他者を受け入れる能力、(4)これらを確認なものとする教養と、本校の校是である「進取・敢為・独創」の気質を併せ持つ。

本校はこれらの多種多様な能力の育成を、アジア諸国における種々の「環境」をテーマとした課題研究を軸とする教育プログラム、指導法を開発することにより、可能なものにするをねらいとする。



平成 31 年度 教育課程表 (略表)

※両コース共通

1年	国語総合 (5)	世界史A (2)	数学I (3)	数学A (3)	物理基礎 (2)	化学基礎 (2)	生物基礎 (2)	体育 (2)	保健 (1)	家庭基礎 (2)	IEC I (5)	EEC I (2)	情報学基礎 (2)	EP I (1)	LHR (1)
----	----------	----------	---------	---------	----------	----------	----------	--------	--------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	---------

■自然科学系コース

2年	現代文B (2)	古典B (2)	地理A (2)	現代社会 (2)	数学探究I (6)	体育 (2)	保健 (1)	芸術 (2)	化学研究I (3)	物理研究I 生物研究I (3)	IEC II (4)	EEC II (3)	EP II (2)	LHR (1)
3年	現代文B (2)	古典B (2)	国語演習 (1)	地理B 公民演習 (5)	数学探究II 数学演習 (7)	体育 (3)	化学研究II (4)	物理研究II 生物研究II (4)	IEC III (4)	EEC III (2)	LHR (1)			

■社会科学系コース

2年	現代文B (2)	古典B (3)	世界史基礎 (2)	日本史B 地理B (3)	現代社会 (2)	数学II (3)	数学B (2)	生物演習I (2)	体育 (2)	保健 (1)	芸術 (2)	国語研究I (1)	IEC II (4)	EEC II (3)	EP II (2)	LHR (1)
3年	現代文B (2)	古典B (3)	世界史B 公民演習 (4)	日本史B 地理B 公民演習 (4)	発展数学 (6)	生物演習II (1)	化学演習 物理演習 (2)	体育 (3)	国語研究II A (1)	国語研究II B (2)	IEC III (4)	EEC III (2)	LHR (1)			

□「総合的な学習の時間」は「EP I (エンタープライズ I)」「EP II (エンタープライズ II)」とし、3単位(105単位時間)を配当する。

※()内の数字は単位数を示す。

□ 専門科目「IEC I」は、外国語科「コミュニケーション英語 I」の代替科目とする。

□ 専門科目「情報学基礎」は、情報科「社会と情報」の代替科目とする。

西京高等学校の理念

本校は平成15年に校名を京都市立西京商業高等学校から京都市立西京高等学校に改称するとともに、専門学科「エンタープライジング科」を創設し、「進取・敢為・独創」の校是のもと、社会で活躍、貢献できる人材を育成することを目標としている。平成16年には附属中学校を併設し、高校からの入学生も含め全員がエンタープライジング科の生徒であるため、スーパーグローバルハイスクール（以下SGH）の指定を受けた際も、全員がSGHとしての課題研究に取り組み主体的に学んでいけるよう、既存のプログラムを充実させ、外部機関と連携をとりながらグローバルな活動を行えるよう留意することを、校内での共通理解としてきた。教育課程表では、「エンタープライズ（以下EP）」が総合的な学習（探究）の時間にあたる。本校教員の約80%がその中で探究活動に関わったことがあり、まさに学校全体として行っている活動である。このEPにおいては、各プログラムの実施前に、教員に詳しくルーブリック等の評価指標を渡し議論の上、それを生徒とも共有してからはじめている。以下では、本校における総合的な学習（探究）の時間のプログラム開発の取組、それに伴う教科との連携や課題研究の工夫について論じる。

EPの流れと考え方について

1年次の総合的な探究の時間である「EP I」は、2年次の「EP II」から本格的に開始される「課題研究」の準備段階であり、中学から高校という学びにおける大きな変容段階における橋渡しとなるものと位置づけている。特に、生徒の生涯の学びにおいて、情報の受容者から生産者になる準備段階として捉え、課題の提示の仕方を中学校段階とは区別し「問い自体を見つけること」や、「科学をする」という学問的姿勢を養うことを目標としている。

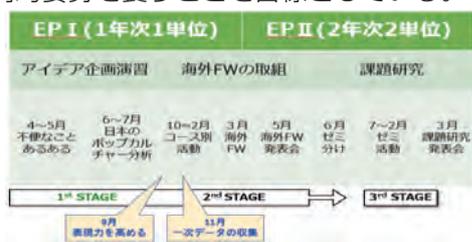


図1: H30年度「エンタープライズ（EP）」

図1のように、生徒の視点を少しずつ広く高く持

てるようにコンテンツを配置しながら、図2で示す探究のプロセスを繰り返す。1年次には身の回りの問題からより広く日本全体をとらえ、それを世界へと発展していけるよう、グループワークの仕方や、論文を書くにあたっての基本的な型を興味をもって楽しく学んでいける「アイデア企画演習」を配置し、本校の2年間のEPの中央に位置する海外フィールドワーク（以下海外FW）では「異文化＝他者を受け入れ、これに応える力」の育成およびそれに伴う「自己の変容」に関する客観的な認識を指導の柱としている。海外FWの行先を7コースから選択制とし、調査活動に問題意識を持って取り組める事前事後の研修を配列している。



図2: 本校が提示している探究のプロセス

それらの集大成としてEP II 課題研究で、EP I で培った「問題化する力」をもとに問いを立て、「アジアの環境」を全体テーマとするグループ研究活動を設定し、テーマ設定から論文執筆、研究発表に至る研究過程を経験させる。具体的な環境問題で分類するのではなく、人文科学、情報学など大学の学部学科をイメージし、視点ごとに8つのゼミを展開し、教員以外に大学生・大学院生のティーチング・アシスタント（以下TA）も配置した。TAとして関わる現役の大学院生等に、研究に対する姿勢や論文執筆の具体的なアドバイスを受け、学びを深めることができた。

ASEAN Ecological Summit (AES) の実施

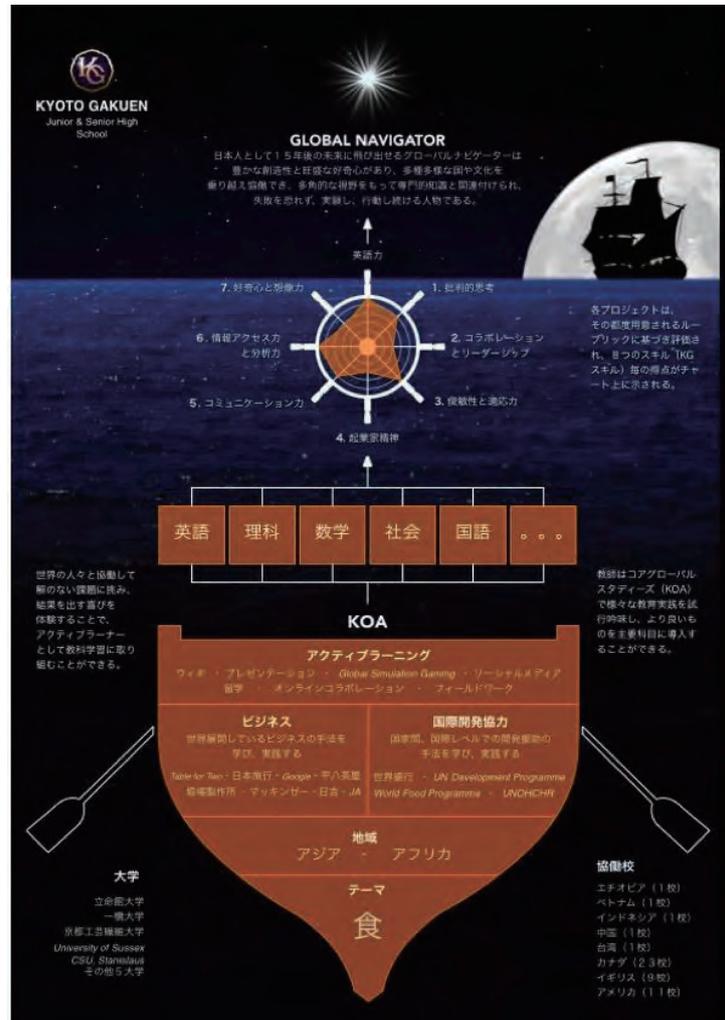
SGHの取組で育成し習得した能力等を評価・検証するため、海外FWで交流を深めたインドネシア、タイ、上海、マレーシアの提携校の生徒と教員、京都在住の留学生などを招き、第2学年の生徒全員が海外FWでの知見に関する英語ポスター発表と、「How has the “development” of a nation changed our “happiness”?’というテーマの議論を行った。AES開催のために実行委員会を立ち上げ、生徒・教員ともに活発な議論を重ね、英語専門科目EEC IおよびEEC IIにおける教育プログラムを課題研究という観点から再構築し完成させた。

京都学園高等学校

21.3 世紀の Global Navigator 育成

【構想の概要】

SGH 対象の生徒たちが社会で活躍する 21.3 世紀にグローバル・リーダーとして活躍する日本人が備えるべき資質を、ハーバード大学のトニー・ワグナー氏が唱える 7 つの 21 世紀のサバイバルスキルと考え、そこへ英語運用能力を加えた 8 つのスキルを「KG スキル」と位置づける。この KG スキルを生徒に獲得させるために、「食」をテーマに、アフリカ・アジアにおける国際開発協力モデル開発、ビジネス・モデル開発を、課題研究として、国内外の大学、姉妹提携校の高校生並びに教職員との協働で実践する。その実践を通して生徒は「正解のない問い」への免疫力を身に付け、教員に正解を求めるのではなく、自ら答えを考え出そうとするようになる。また、教員は、コア学において、探究型学習の指導法を試行吟味し、従来型の教科指導の場においても、探究型学習を導入する契機となる。



▶ カリキュラム

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38			
第1学年	文系	国語総合			5	現代社会	2			数学I		4	数学A	2	生物基礎	2	体育	2	保健	1	音楽I	2	書道I	2	英語I	5	コミュニケーション	2	英語会話	2	英語表現I	3	社会と情報	2	探究的時間	2	KOA学I	4	1	1	
第2学年	文系	現代文B	3	古典B	2	世界史A	2	日本史A	2			数学II	5	化学基礎	2	地学基礎	2	体育	2	保健	1	音楽II	2	書道II	2	英語II	5	コミュニケーション	2	英語表現II	2	プレゼンテーション	3	家庭基礎	2	探究的時間	2	KOA学II	3	1	1
第3学年	文系	現代文B	3	古典B	3	世界史B		政治・経済		英語演習A	5	英語演習B	2	数学演習	2	数学B	2	体育	3	保健		音楽III	2	書道III	2	英語III	4	コミュニケーション	2	英語表現II	3	プレゼンテーション	2	探究的時間	2	総合的な学習の時間	1	1	1	1	

※1=社会と情報(2単位)のうち、1単位はImmersion授業 ※2=KOA学I(4単位)のうち、2単位は土曜日に実施
※3=KOA学II(3単位)のうち、1単位は隔週土曜日に2時間実施し、残り2単位は水曜日の午後実施 ※カリキュラムは2019年度のもので、2020年度と異なる場合があります。

探究型学習への取り組み

SGH 事業対象コースである国際コースにおいては、従来から探究型学習に力を入れ、留学先での授業に備えてきたが、2014年3月にSGH アソシエイトに認定されてからは、コア（“KOA”はマオリ語で「幸せ」）を世界に普及できる人材の育成を目指し、「コアグローバルスタディーズ」（以下「KOA学」）を実施。立命館大学、京都外国語大学、関西学院大学、京都大学他の教授陣、また、山ばな平八茶屋、TFT International、（株）堀場製作所、WFP、UNDP など世界の最先端で活躍される諸氏のご指導を得て、単なる知識の詰め込み、あるいは他者から与えられた課題の探究ではなく、自分たちで世界を見つめ、そこにある課題をどのように見つけ、その解決策を考え出していくのに必要な8つの「コアグローバルスキルズ」の獲得を目指し、グループで協働してリサーチプロジェクトに取り組ませている。

1年次はグローバルナビゲーターとして必要なスキルをはぐくむことを目的として、「日本における食」（短期課題）、「アフリカ・アジアの食糧問題」（SDGsの視点からの長期研究課題）をテーマに取り組み、1年生ながら、関西学院大学総合政策学部リサーチフェアに参加し、大学生や大学院生に混じり、「優秀賞」や「総合政策学部長賞」などを受賞している。1年次の1月からは（株）堀場製作所の協力の下、「食を取り巻く環境とビジネス」をテーマに、ビジネスモデルキャンバスを使って売り手と買い手の双方にとって利のあるwin-winなビジネスモデルの構築を目指し、2年次におけるベトナム、フィリピンフィールドトリップで、その検証を行っている。

3年次では、それまでの課題学習の総まとめとして、東京大学と立命館大学が開発したグローバルシミュレーションゲーミング（GSG）に取り組み、コアグローバルスキルズをさらに高めることを目指している。国家アクターしかない模擬国連とは違って、国連機関やNGO、マスメディアのアクターもいるGSGは、開催初年度以来毎年フィリピンの姉妹校 Saint Pedro Poveda College の模擬国連部の生徒・教員17名の参加を得てよりリアルな国際的政治舞台のシミュレーションを経験するこ

とができている。

他教科への普及

探究型学習の学校内普及を意図して、特に対象コースである国際コースにおいて、入学時から英語科と情報科、国語科、社会科、数学科などの協働授業に取り組んでいる。これらの授業を通して生徒は、英語を「学習教科」としてより「コミュニケーションツール」として体感するようになり、今年度、国語科、理科、数学科の教員がそれぞれの教科で「SDGs」研究を導入することにしたというように、教員は、この取り組み以外の授業においても探究型学習の手法を導入するようになっている。

他コースへの普及

中学校での取り組みとして従来から総合的な学習の時間を土曜日に設け「地球学」という探究型学習を実施している。また高等学校では特進ADVANCEDコースでSGHへの指定を機に京都先端科学大学との連携の下「Science Global Studies」を実施し、毎年優秀グループの表彰を行っている。最優秀グループは私立中学高等学校理科研究会主催の理科研究発表会・研究発表の部で最優秀の京都新聞社賞に輝いている。

学外への普及

年間2回の課題研究成果発表会、並びに教員の研究成果を共有するリトリート大会を通して、本事業の成果の発信に取り組んでいる。さらに地域への普及活動としては、地元公立中学へ、教員や生徒、卒業生が向向き、課題研究成果やフィールドワーク経験談、社会奉仕活動の事例等を紹介する国際理解教育出前授業を実施している。海外への普及としては、現在8か国、13の教育機関が加盟している、Global College Networkで、本校が発起人となり、教員総会に加え、各校の選抜生徒が集い、世界が抱える課題について審議する Student Ambassador 会議を毎年開催している。成果その他については平成30年度の研究報告書を参照されたい。

同志社国際高等学校

持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム —環境先進国に学び世界に提言—

【構想の概要】

1年生必修科目「Global Understanding Skills (Basic)」を設置し、持続可能な社会について環境先進国の事例を学習する。2年生選択科目「Global Understanding Skills I」では、資源の有効活用や循環運用を、海外実地研修で学習する。継続履修する3年生選択科目「Global Understanding Skills II」では、現地での学習を発表し、持続可能社会の実現に向けた方策を、国際機関や地域社会に提案する。



()内は自由選択科目、その他の括弧内は備考欄に説明のある科目

教科	科目	高1	高2		高3		備考
			自然科学系	人文社会科学系	自然科学系	人文社会科学系	
宗教	聖書	1					
	聖書講読	(2)	(2)	(3)	(3)		
	宗教学	(2)	(2)	(3)	(3)		
国語	国語総合	4	(2)	(4)	(2)	(2)	①は必要のある者のみ履修
	現代文B		2	2	2	3	
	古典B		2	2	2	2	
日本語	日本語I	(8)(4)					
	日本語II		(2)	(2)			必要のある者のみ履修
	日本語III				(2)	(2)	
地理歴史	世界史A		2				
	世界史B			2		3	2年次および3年次で自然科学系は2単位、人文社会科学系は5単位を必修(注記参照)
	日本史A		(2)	(2)	(3)	(3)	
公民	現代社会	(2)					①は必要のある者のみ履修
	現代社会II		(2)	(2)			
	現代社会III				(2)	(2)	
数学	数学I	3					
	数学II		4	4			
	数学III					5	

- 注記 i. 自然科学系については、「世界史A」(2単位)を必修とし、さらに「日本史A」(2単位)、「地理A」(2単位)から1科目を必修とする。
ii. 人文社会科学系については、「世界史B」(5単位)を必修とし、さらに「日本史B」(5単位)、「地理B」(5単位)から1科目を必修とする。

教科	科目	高1	高2		高3		備考
			自然科学系	人文社会科学系	自然科学系	人文社会科学系	
理科	化学基礎	3					
	化学		(2)	(2)	(2)	(2)	
	選択化学				(2)	(2)	
保健体育	物理基礎		3	3			自然科学系「物理」 「生物」のいずれかを必修
	物理				4	(3)	(3)
	生物基礎		2	2			
芸術	音楽I		(2)				
	音楽II			(2)	(2)		
	芸術音楽				(2)	(2)	
外国語	英語表現I	4					
	英語表現II		2	2	2	2	
	英語表現III				(2)	(2)	
家庭	家庭基礎		(2)	(2)			
	選択家庭				(2)	(2)	
	食文化				(2)	(2)	
情報	情報科学	2					
	コンピュータリテラシー				(2)	(2)	
	Global Understanding Skills (Basic)	1	2.2	2.2	0.3	0.3	
任意選択科目	Global Understanding Skills I				(2)	(2)	
	Global Understanding Skills II				(2)	(2)	
	心理学				(2)	(2)	
その他	ドイツ語	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	
	フランス語	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	
	スペイン語	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	
必修科目	英語						
	英語II						
	英語III						
合計	必修科目単位数	32	30.2	30.2	25.3	25.3	
	選択科目単位数	2	4	4	7	7	
	総単位数	34	34.2	34.2	32.3	32.3	

教育課程表や時間割上の工夫、学校設定科目としての「Global Understanding Skills」

本校では、教育課程の中で、1年生は必修科目として1単位（週1時間）、2・3年生では選択科目として「Global Understanding Skills」（2単位）という科目を任意設置科目として設定した。任意設置科目として設定することで、教科を超えて複数の教員がチームティーチングで担当することになり、この5年間で、宗教科、国語科、社会科、理科、数学科、英語科、第二外国語科の教員がこの科目を担当し、実際に授業を行った。教員同士、意見が異なることも少なくないが、話し合いで解決するプロセスも含め、本校では生徒とも共有している。そうすることで生徒たちは、異なる立場、意見が存在することを理解し、自分の考えを深めることができ、また評価の際にも複数の教員の視点で見ることにより客観的な評価が可能になる。また、本校のテーマである環境問題、環境政策について理解するには、理科の知識、政策を可能にする法や制度、それを生んだ地理、歴史的背景、制度設計のためのインセンティブ設定など経済学の知識等社会科の知識、そしてリサーチには英語科や国語科で学ぶスキルも不可欠であり、複数教科の教員によるチームティーチングは、教員のチームワーク、そしてそれぞれの教員の成長にとって大きな意味がある。また生徒の普段の学習とSGH科目との接続、さらにSGHを全校的な取り組みにするという点においても重要な意義があった。

成果と課題

生徒たちはどの過程もおろそかにせず、成果をあげた。3年間受講した生徒たちの振り返りのレポートにあった、「社会の問題の複雑さを理解できた」「学ぶことが楽しいとわかった」「GUSは高校生活のハイライト」「（フィールドワークで）人生が変わった」等はとても嬉しい言葉である。

多様なバックグラウンド、学習歴をもつ生徒が在籍する本校では、今回はそれぞれの生徒が自由に振り返りレポートを作成するという形を取ったが、目標をどのように設定していくか、成果エビデンスをどのように収集するかは今後の継続課題である。評価に関しては他教科と同様、レポートやプレゼンテーション、試験などで細かく評価し、学期ごとの

総合評価を出したが、独自のまた客観的な評価を行うために、大学教員のアドバイスをもらう等、生徒にとってより良い方法をさらに模索していくべきであると認識している。さらに、このプログラムを通じて様々な地方自治体、国際機関、企業の方々との出会いがあり、多くを学ぶ機会となっただけでなく、こうした方々から生徒の活動に対して多くの励まし、アドバイス、評価を頂いた。また、成果の普及に関しては、成果報告会の開催、報告冊子の作成、本校ウェブサイトを通じて随時実施している。

大学との連携と今後の展望

同志社大学教員による講義の機会も多く、教員、生徒が大学教員から気軽にアドバイスをもらうことができる点で、本校は大変恵まれている。生徒たちはSGHの取り組みを通し、高校段階から高度な学習に取り組み、より進路を意識できるようになり、大学でもリーダーシップを発揮している。このプログラムで育った生徒たちが「すべての人が幸せに暮らせる、持続可能な社会」を実現するグローバル・リーダーになることを願いながら、同志社国際高校の良さ、そして本SGHの経験を生かし、新しいことにも積極的に挑戦していきたい。

OECD 東京センター副所長樋口厚志氏と

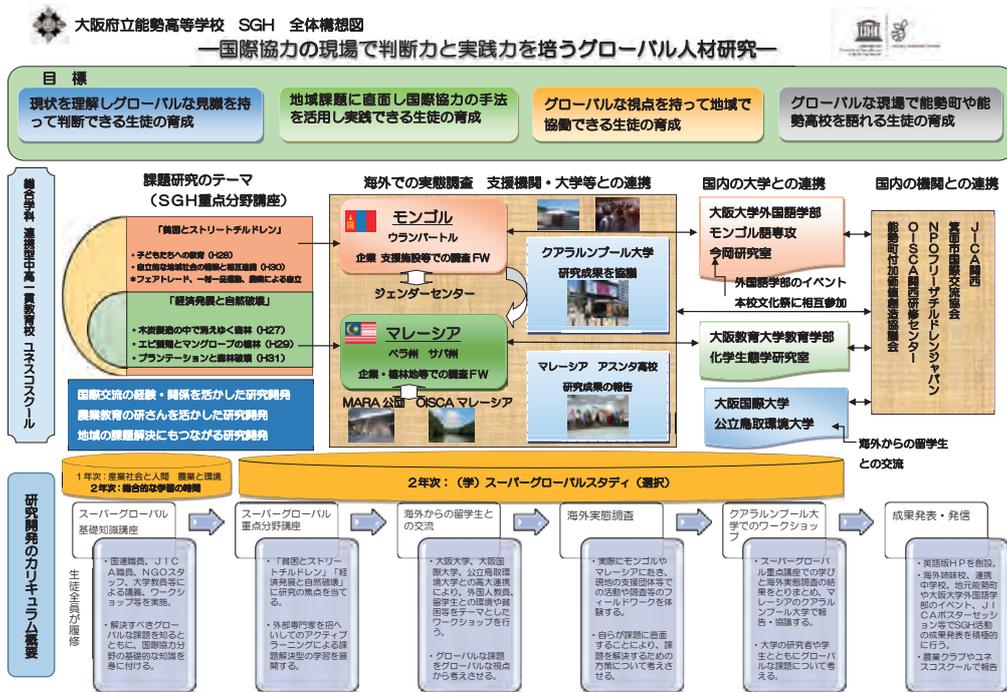


大阪府立能勢高等学校

国際協力の現場で判断力と実践力を培う グローバル人材研究

【構想の概要】

国際協力を受ける当事者と支援する外部者の協働のあり方を理解するとともに、貧困が引き起こすストリートチルドレンへの人的支援や経済的支援のあり方、経済発展の中で破壊される自然環境の保全に対する当事者と外部者との対立と調整のあり方を理解し、双方の立場に立って意見を述べることによってグローバル・リーダーとしての判断力を磨く。また、モンゴルやマレーシアでの支援活動や調査活動を体験し、「ストリートチルドレン解消」「フェアトレード」「一村一品」「植林」「農業による自立支援」という国際協力のあり方を多角的に学び、大阪府民、能勢町民、能勢高校生、人間としてできることを考える。さらに、国内外の大学や高校等と連携し、協議・ワークショップ等を重ねグローバル・リーダーとしての実践的な力を培う。



平成 28 年度入学 教育課程表 (人文・理数系列)

単位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1年次		国語総合			日本史A		数学I		化学基礎		体育		保健	芸術				英語I	コミュニケーション			家庭基礎		情報	社会と環境			産業社会と人間	HR	数学A		
2年次		現代文B	世界史A	数学選択	理科選択	体育	保健	英語II	コミュニケーション	総合的な学習の時間	HR							①・②	系列選択					①⑤	自由選択				SGS			
3年次		実践国語B	現代社会	体育	総合的な学習の時間	HR			①・②	系列選択													①⑤⑨	自由選択								

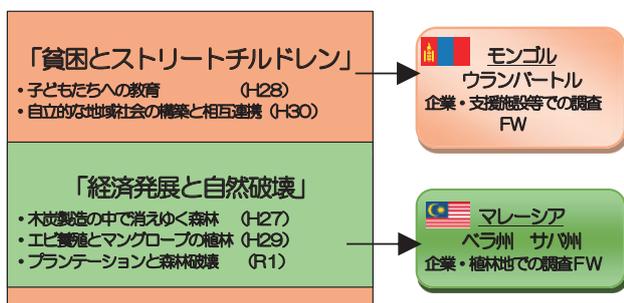
※「産業社会と人間・総合的な学習の時間」及び「SGS(スーパーグローバルスタディ)」を中心として、課題研究を実施している。

課題研究：学校設定科目「SGH 講座」

全員が履修する「スーパーグローバル（SG）基礎知識講座」を設け、産業社会と人間（1年次）、総合的な学習の時間（2・3年次）、各教科で実施した。国連職員、JICA職員、NGOスタッフ、大学教員等による講義、ワークショップ等を実施。解決すべきグローバルな課題を知るとともに、国際協力分野の基礎的な知識を身に付けた。年度末に学年ごとに研究成果発表を行った。

選択履修として「スーパーグローバル（SG）重点分野講座」を設け、学校設定科目「スーパーグローバルスタディ（SGS）」（2年次）で実施した。大学教員の継続的な指導や様々な分野からの外部講師の招聘などで、課題研究に向けた学習を集中的に行った。また、机上の学習だけでなくフィールドワークも重視し、本校の所在する能勢地域での活動や、国内・海外での活動も積極的に行った。

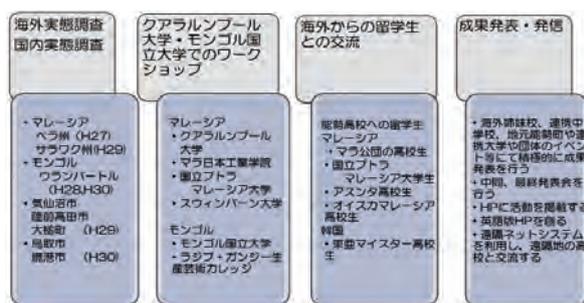
国内・海外実態調査



(モンゴル)

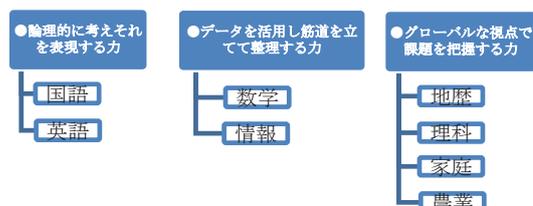


(マレーシア)



各教科の SGH への取組み

各教科では以下のような役割分担をし、各教科で SGH における取組みを進めた。また、各教科で SG 基礎知識講座を実施する際には、実施内容について「SGH 事務局」と話し合い、事前準備をすすめた。実施後は報告をまとめ、ホームページで公開した。



《各教科の授業における SGH の意識》

成果の発表と普及

課題研究の成果発表は、大きな節目として、11月に中間発表を、2月に最終の研究発表会を開いた。特に2月の発表会は地域にある「浄るりシアター」で開催し、指導をいただいた外部講師の方々のみならず、地元の能勢町住民の方々にも多数参加いただき、研究成果に対する評価や助言などを直接いただく貴重な機会となった。

高大連携において連携先の大阪大学、大阪教育大学、大阪府立大学、公立鳥取環境大学では、本校生徒が大学の授業に招かれ課題研究発表を行い、大学生との交流の中で研究を深めてきた。

海外の高校や大学での課題研究発表の機会も設け、英語での発表にも計画的に取り組み、その成果は英語検定などの外部試験での合格率の向上にもつながっている。

SGH 後継事業について

本校では平成30年度より、SGH 後継事業として以下の事業をスタートし実施してきた。今後 SGH 事業終了後も継続実施する体制が整いつつある。

①マレーシア：オイルパームプランテーションと熱帯雨林の伐採する事業。②フィリピン：マングロープ林の破壊と植林活動。③ドイツ：シュタットベルケを地元能勢町に活かす。これらの課題探究を通じて、能勢町の課題解決に挑むグローバル人材を育成する。

大阪府立千里高等学校

グローバル・マネジメント力を備えたリーダーの育成計画

【構想の概要】

課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクト（GC）4分野を取り上げ、ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を育むための教育課程、及び、高い社会貢献意識と高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させるための指導法を研究開発する。

これにより、グローバル・マネジメント力—①高い社会貢献意識、②国際的課題についての多面的な視点と深い理解、③国際的課題について他者と連携・協調しつつ探究するマネジメント力、④ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行う力、⑤高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力—を備えたリーダーを育成する。

プログラムの概要

1. 課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクト(UNGC)の4分野(労働、環境、人権、腐敗防止)を取り上げ、企業とNGOの取組の比較、及び、日米比較という手法により多面的な視点を育む。
2. 大学・企業・NGOと連携し、研究者・実践者の生き方に直接触れることにより、高い社会貢献意識とUNGCに係る深い理解を育むとともに、高いレベルのコミュニケーション力としての英語力を向上させる。
3. 生徒が互いに協力しながら連携機関等より適切に指導・支援を受け、必要な情報を収集・分析・整理する力を身につける。
4. 上記1～3を通じ、ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を生徒に育むための教育課程を研究開発する。

対象生徒

- 1, 2年生: 国際文化科4クラス全員
- 3年生: 英語選択科目『トピック・スタディズ』および『グローバル・スタディズ』選択者

本校のSGH指導 2018年度の例



学年	国際課題の理解と解決	多様性の理解と包摂への姿勢
3年	英語専門科目『トピック・スタディズ』 ・通年2コマ/週・英語科の教員・SDGsと国連機関の役割を学ぶ。	
2年	総学「探究」+『社会と情報』 ・通年2コマ/週 ・【2クラス6週間】×2 ・国・社・英・情報科の教員 +GCN加盟企業・大学教員・実生	企業訪問研修 ・企業の実践を調査 ・担当分掌 +連携企業
1年	総学「探究基礎」 ・後期2コマ/週 ・1クラス2週間 ・国・社・英の教員	海外FW研修 ・多様性への対応について米国の移民の歴史・先進実践例を学ぶ ・担当分掌 +海外NGO/実践者
	専門科目『国際理解』 ・通年1コマ/週 ・社会科の教員+NGO	GlocalFW研修 ・地元・企業の実践 ・担当分掌 +NGO+連携校 +連携企業
	講演会 ・国際課題の研究を大阪大学職生が紹介 ・1年担任 +連携大学	

総学「探究」+『社会と情報』 ・中間発表会・年度発表会において大学教員と企業CSR部門の方が助言 ・研究の中間・後半に大学院生から個別論文指導
海外FW研修 ・米英実践する学校・地域・企業における多様性推進の先進事例の視察・取材 ・Anti-Defamation Leagueによる多様性対応トレーニング
企業訪問研修 ・研究テーマに関する取組を行っている企業(GCN関西分科会加盟企業等)を訪問し、取材
GlocalFW研修 ・とよなか国際交流協会(大阪・豊中市)で在日・来日外国人の生活とサポートについて学ぶ ・コリア国際学園で、設立趣旨を学び、生徒と社会活動について交流 ・モスク(大阪・茨木市)を訪問し教養活動について学ぶ ・アジア太平洋人権情報センターより国際人権とグローバルリーダーの責任について学ぶ
専門科目『国際理解』 ・公害地域再生センター研究員から利害対立を乗り越えた実例として公害問題の実際を学ぶ

教育課程表全体については、本校SGH専用サイトに掲載の研究報告書 p.80, p.81をご覧ください。urlは次ページ文末に記載しております。

課題研究の取組経過 —SGH 指定後の変化

本校は1967年に普通科高校として設置され、1990年に国際教養科2学級を併置、その後2005年に国際文化科・総合科学科の2学科からなる国際科学高校に再編された。この際に課題研究の時間が導入され、教育課程上の位置付けや担当の仕方、校内での発表会の設定などの枠組みが作られた。

SGH 指定を機に『探究』のテーマが大きく変わった。SGH 指定以前は、国語・社会・英語の教員が各教科の枠内で内容を自由に研究させていた。だが、指定後は、テーマを人権・環境・労働とその周辺領域に限定した。また、現実の課題解決という「社会的な意義を持つ研究」とすることを求めた。このことにより、いわゆる「調べ学習」から脱却した。

同時に校外の諸機関との連携が始まった。社会課題をテーマにすることで、同じ問題に取り組む大学・企業・市民の各セクターとの協働が可能になる。この協働は、研究に関わる情報の提供にとどまらず、本校の教育を豊かにしている。(前ページの表「校外諸機関との連携内容」参照)

校内での指導と評価の標準化も進んだ。生徒の研究に対して校外から指導を求める際にこれが必要になったためである。統一の評価基準を作成し、どの時期までにどのような研究上の指導事項を統一して指導しておくかについて打合せを行うようになった。

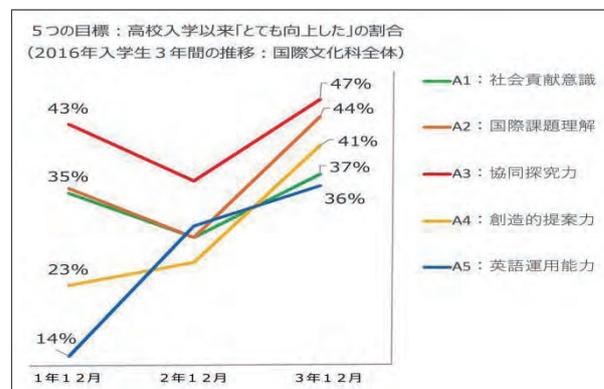
評価 —生徒の成長実感の把握

前ページに挙げた本校 SGH の5つの目標を含め22の評価指標を設定している。各学年の12月に、意識や能力が「高校入学時からどれくらい上がったか」の自己評価を生徒に尋ねている。

この評価指標を整備したのは指定2年目だった。次のグラフはその年に入学した生徒の、5つの目標についての調査結果の3年間の推移である。意識に関わる指標は1年で大きく上昇し、技能に関するものは時間をかけて上昇していることがわかる。

中間評価での指摘を受けて、年度末のアンケートに加え、研修や講演の直後にも、関係する指標についての尺度評価と記述による評価を求め、これらを合わせて研修ごとの効果の違いや数字の意味を把握することができるようになった。

また、卒後2年目の全卒業生に対して SGH を含めた本校の教育についての追跡調査を昨年度から実施している。研究の方法やまとめ方、英語による討論・発表・レポートについて高校での経験が役立っているという内容の回答が多かった。



この他、企業や大学の先生方、運営指導委員の方々からの生徒研究への評価や助言は、担当教員の指導力の向上にも大いに役立っている。

教科間連携・SSH との連携・普及活動

専門科目『国際理解』の授業との連携に加え、英語の授業において英語によるプレゼンテーションの指導が始まった。また、教科間の連携を促進するため、各教科でどの時期に何を教えているかがわかる表の作成を始めた。さらに、深い学びを実現するための授業研究が、全教科が参加する形で始まった。

指定2期目のSSHとは、同一分掌（国際科学教育部）に位置付けることによって相乗効果を実現している。指導や運営のノウハウを日常的に交流している他、SDGs をテーマに合同で公開教員研修を行う、連携実績のある外部機関の情報等を紹介し合う、国際シンポジウムのテーマを「環境」に設定して共同で開催する等の取組みを行っている。

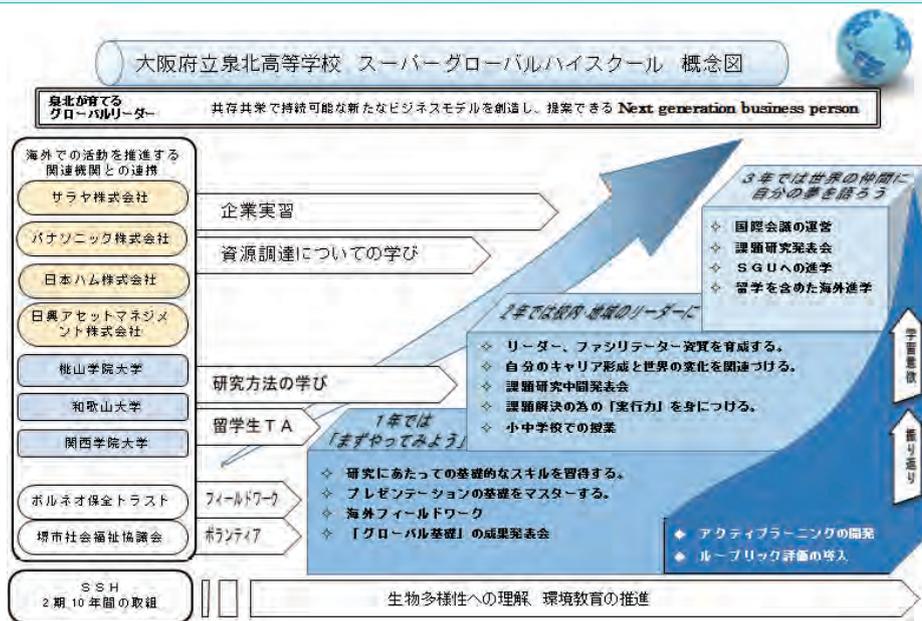
普及には年度末発表会の一般公開・実践報告会の実施に加え Web を活用している。年次報告書・論文集・『探究基礎』ワークシート集・研修等の詳しい内容や参加者の感想、さらに校外での発表の原稿やスライドも専用サイト (<http://www.osaka-c.ed.jp/senri/sgh/report.html>) で公開している。

大阪府立泉北高等学校

共存共栄で持続可能なビジネスモデルを 創造する次世代リーダーの育成

【構想の概要】

グローバル・リーダーたる資質を、「志（マインド）」、「実体験に基づく知識（ナレッジベース）」、「人とのつながりを作り活かす力（ヒューマンスキル）」と捉え、それらが高校卒業時に開花できるよう、国際学科であるがゆえに獲得できる複数言語運用能力を道具として、学年進行で、課題研究とフィールドワーク、外部機関との連携活動等を有機的に組み合わせて行う。このことを通して、ビジョンを持ち、同時に地に足のついた提案力・実行力の伴う人間を育成する。



1年	
1	
2	国語総合
3	
4	
5	地理 A
6	
7	現代社会
8	
9	数学 I
10	
11	数学 A
12	
13	生物基礎
14	
15	化学基礎
16	体育
17	保健
18	
19	音楽・美術・書道
20	
21	家庭基礎
22	
23	社会と情報
24	
25	総合英語
26	
27	CALL / 実用英語
28	ACT I
29	LHR
30	(グローバル活動 I)
31	(グローバル基礎)
32	
33	
34	
35	

2年	
1	現代文 B
2	
3	
4	古典 B
5	
6	世界史 A
7	
8	日本史 A
9	
10	数学 II
11	
12	化学基礎
13	地学基礎
14	科学と人間生活
15	
16	体育
17	保健
18	
19	数学 B
20	芸術表現
21	人間環境
22	ライフスポーツ
23	
24	英語理解
25	
26	英語表現
27	
28	異文化理解
29	CALL / 実用英語
30	ACT II
31	第2外国語
32	総合的な学習の時間 (グローバル課題研究 I)
33	LHR
34	(グローバル活動 II)

3年	
1	現代文 B
2	
3	
4	古典 B
5	
6	世界史 B
7	日本史 B
8	地理 B
9	
10	世界史 演習
11	日本史 演習
12	地理 演習
13	公民 演習
14	数学 II B
15	英語 演習
16	ライフスポーツ
17	古典 A
18	倫理
19	理科基礎 演習
20	化学 演習
21	生物 演習
22	地学 演習
23	グローバル 演習
24	母語 研究
25	数学 I A 演習
26	総合芸術
27	ライフデザイン
28	科学と人間生活
29	英会話
30	グローバル・スタディーズ
31	体育
32	英語理解
33	
34	英語表現
35	
36	英語表現
37	
38	速読演習
39	
40	政治・経済
41	ACT III
42	第2外国語
43	総合的な学習の時間 (グローバル課題研究 II)
44	LHR

※第2外国語は『フランス語文化』、『スペイン語文化』、『中国語文化』、『韓国・朝鮮語文化』から1つ選択。
※『グローバル基礎』、『グローバル活動 I・II』は希望者のみ受講。

「アクション」を重視した課題研究活動

国際文化科全員を対象に、「総合的な学習の時間」を2年次は2単位、3年次は1単位、それぞれ「グローバル課題研究Ⅰ・Ⅱ」として実施している。

生徒が自らテーマを決定し課題を「発見」し、その解明や解決の為に実際に行動を起こして外部機関や社会と連携する事を重視して、研究に取り組みさせた。具体的には下図1. で示した行程で授業を進め、1班あたり3～5名、計40班前後の研究班を作り、全班に「調査・解決策の実行」を課した。校内でのアンケートや電話・メールによる調査も認めていたが、実際に校外に出かけて外部機関と連携する例が平成29年度の17件から平成30年度には28件に増加するなど、指導の成果が出たと評価している。

また、本校は平成18年度からSSH指定校であり、「SSH課題研究」の手法を参考にして指導を行ってきた。さらにSSH課題研究発表会にSGHから代表生徒が口頭発表を行うなど、SSH事業との連携にも努めてきた。

課題研究以外でも生徒の校外活動の機会を充実させる取組みを行ってきた。学校設定科目「グローバル活動」では、学校が認定するボランティア活動を年30時間（65分授業）行えば単位を認定している。この活動を活性化するため、平成30年度には、教員歴3年目までの教員が、自らのOJT研修の一環として、地域の課題を解決する為のボランティアを社会福祉協議会と連携して企画し、生徒の募集を行った。

平成29年度には、「現代社会」の夏休み課題として、自身の住む地域の課題を「発見」し発表する宿題を課すなど、「課題研究」以外にも「生徒が主体的に学ぶ」機会を充実させようとする動きが確実に広がっている。

2年次	4月	5月	6月	7月	8月	9月
		個人発表	研究班決定	テーマ決定	文献検索	
2年次	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	課題発見発表	調査・解決策の実行・レポート添削				
3年次	4月	5月	6月	7月	8月	9月
	発表指導	成果発表	論文作成	テーマ別学習		

図1. 2～3年「グローバル課題研究」実施概要

英語運用能力の向上

1年及び2年次の学校設定科目「CALL」では、PCを使用して、生徒が英語で調べ学習を行う授業を展開している。また学校設定科目「ACT」(Advanced Comprehensive Training)では、英語4技能の習得をめざしオールイングリッシュの授業を行っている。

本校は夏季休業中にカナダや、オーストラリアへの海外語学研修を実施してきた。SGH事業としては、これらに加えプロジェクト型の海外研修として、SSHと共同実施のポルネオ海外研修、北欧海外研修を実施し、英語運用能力の向上に努めている。また、「トビタテ！留学 JAPAN」やロータリークラブを通じた交換留学、高校卒業後の海外直接進学については、進路指導部の中に新たに「グローバルキャリア課」を設け対応してきた。

		平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
トビタテ	長期	3名	1名	2名	0名
	短期	1名	2名	0名	2名
CEFR B1～B2 生徒の割合		0%	2.2%	28.3%	58.7%

図2. トビタテ！留学 JAPAN 合格者と CEFR B1～B2 生徒の推移

自走に向けて

SGH事業は令和元年度で終了するが、今後も「グローバル・ビジネス・リーダーの育成」を本校の目標とし、5年間の事業の成果や課題を踏まえ、以下の施策に取り組む予定である。

- ・「総合的な探究の時間」を活用し、堺市社会福祉協議会と連携したボランティア活動を実施するとともに、生徒の積極的な参加を促す。
- ・桃山学院大学から講師を招き、「プレゼン講習」や「論文講習」を実施する。
- ・英語運用能力の向上に向け、新カリキュラムの開発により英語教育の強化を図る。
- ・実用英語技能検定を本校全員に受検させるとともに、その合格を目標とした授業を実施する。
- ・在学中の海外留学や、卒業後の海外進学数の増加に向け、より充実した取組みや対応が可能となるような組織づくりを行う。

清風南海高等学校

エネルギーの観点から世界の改革を図る —未来を創造する産官学グローバルネットワーク構想—

【構想の概要】

地球規模の視野を持って世界のあり得べき未来図を描き、社会をより良い方向に導いていく人材を育成することを目指す。具体的にはシナリオ・プランニングの手法を教材化して「未来を読み解く力」を養い、探究型学習によるプレゼンテーション能力・ディスカッション能力の育成と、4技能の発達に主眼を置いた英語教育の充実によって、「世界に発信する力」を育成する。また、その中で、国内外の企業・地方公共団体・大学・高校等と連携していくことで、本校を中心としたグローバルネットワークの構築を目指す。



グローバルコース

学 年	2016 (平成27)年度入学生 清風南海高等学校 教育課程 (30分単位)				
	1年	2年	3年		
国 語	国語総合 6	文系 理系 文系 理系	文系 理系		
現 代 文	現代文B	4	3	2	
	古典B	4	3	3	
国 語 演 習	国語演習1			4	
	国語演習2			4	
地 理 歴 史	世界史A	2			
	世界史B	②3	①3	②3 ①3	
	日本史A	①2			
地 理	地理A	①2			
	地理B	②3	①3	②3 ①3	
	現代社会	2			
公 民	倫理	②3	①3		
	政治・経済			②3 ①3	
	数学I	3			
数 学	数学II		4	3	
	数学III			5	
	数学A	2			
	数学B		3	3	
	数学演習			4	4
理 学	物理基礎	2			
	物理		★①4	★①4	
	化学基礎	2			
化学			3	4	
科 目	生物基礎	2			
生 物	生物		★①4	★①4	
	物理演習	▲②1	▲②2		
化 学	化学演習	▲②1	▲②2		
	生物演習	▲②1	▲②2		
保 体	体育	2	2	3	3
	保健	1	1	1	1
芸 術	音楽I	2			
	英語表現I	3			
外 語	英語表現II	4	4		
	英語表現III			4	4
家 庭	英語表現I	2			
	英語表現II		3	3	3
情 報	英語表現III			4	4
	家庭基礎	2	2		
宗 教	情報の科学	2			
	宗教	1	1	1	1
総 合	総合	2	2	2	2
	ホームルーム	1	1	1	1
特 活	ホームルーム	1	1	1	1
計		39	39	39	39

備考 ①:各学年で同じ記号のついた科目群からそれぞれ1科目を選択
②:各学年で同じ記号のついた科目群からそれぞれ2科目を選択
★①:各学年で同じ記号のついた科目群からそれぞれ1科目を選択
▲②:各学年で同じ記号のついた科目群からそれぞれ2科目を選択

一般コース

学 年	2016 (平成27)年度入学生 清風南海高等学校 教育課程 (30分単位)				
	1年	2年	3年		
国 語	国語総合 6	文系 理系 文系 理系	文系 理系		
現 代 文	現代文B	4	3	2	
	古典B	4	3	3	
国 語 演 習	国語演習1			5	
	国語演習2			4	
地 理 歴 史	世界史A	2			
	世界史B	②3	①3	②3 ①3	
	日本史A	①2			
地 理	地理A	①2			
	地理B	②3	①3	②3 ①3	
	現代社会	2			
公 民	倫理	②3	①3		
	政治・経済			②3 ①3	
	数学I	3			
数 学	数学II		4	3	
	数学III			5	
	数学A	3			
	数学B		3	4	
	数学演習			4	4
理 学	物理基礎	2			
	物理		★①4	★①5	
	化学基礎	2			
化学			4	4	
科 目	生物基礎	2			
生 物	生物		★①4	★①5	
	物理演習	▲②2	▲②2		
化 学	化学演習	▲②2	▲②2		
	生物演習	▲②2	▲②2		
保 体	体育	2	2	3	3
	保健	1	1	1	1
芸 術	音楽I	2			
	英語表現I	4			
外 語	英語表現II	4	4		
	英語表現III			5	5
家 庭	英語表現I	2			
	英語表現II		3	3	3
情 報	英語表現III			4	4
	家庭基礎	2	2		
宗 教	情報の科学	2			
	宗教	1	1	1	1
総 合	総合(宗教)	1	1	1	1
	物理基礎	2			
特 活	ホームルーム	1	1	1	1
	ホームルーム	1	1	1	1
計		39	39	39	39

1. はじめに

本校の課題研究テーマは「シナリオ・プランニング (SP) を用いて未来のエネルギー事情を考える」であり、研究開発の主軸は SP である。SP を行うことで、論理性・課題発見能力を高め、主体的に活躍できる人材を育成することを目指している。しかし、本来 SP は高度なビジネス手法であり、その手順は高校生には難解である。また、SP を行うために必要な、未来に影響する因子を列挙するという作業のためには、広い視野と多角的な思考法を身につけねばならない。そこで、SP 演習に耐えうる生徒の素養を養うことを主たる目標として、STEP (Societal、Technological、Economic、Political) ゼミを開講しそれぞれの考え方を学ばせている。そのためには教員間の協力が不可欠であり、5 教科の教員が関わることで多様な視点を生み出している。また、GE (Global English) ゼミも開講し、通常の英語の授業と連携を取りながら、姉妹校との Skype 授業や、英語によるディスカッションやプレゼンテーション等を行っている。SP の成果を国内外に発信するとともに、フィールドワークの実施を通じて、現地の企業・大学・高校等との協働 SP も一部で行っており、これらの普及が進んでいる。

2. カリキュラムの開発と実施、成果等の発信

1 年次では STEP 基礎、GE、講演会・特別授業、フィールドワークを行い、2 年次における SP 実施に向けた基礎作りを行う。

2 年次になると、STEP ゼミの中から 1 つ選択する。これにより、「エネルギー」をテーマとする SP を実施するためのより深い知識を蓄える。11 月の国際シンポジウムで成果を発表し、更に改訂したものを 2 月の中間発表会で発表する。

3 年次では、班ごとにまとめた SP を論文として仕上げるとともに、個人執筆部分にも取り組む。論文の要約は英語で書き、これらを「卒業論文集」として発刊し、各 SGH 校に配布している。また、その他の成果等については、発表会・ホームページを通じて発信を行っている。

3. 生徒の成長・意識変化

グローバル (GL) コース生の海外への関心は高く、留学などの実際の行動にもつながっている。全校生徒を対象にアンケート調査を実施したところ、「情報収集やプレゼンテーションなど、ICT を活用する力」や「世界のいろいろな問題について興味を持ち、グローバルな視点で考える力」の項目で「大いにある」、「ある」と答えた生徒が、一般コース生で 25~30%、GL コース生で 80% であり、顕著な違いがあった。

また、高校 3 年生に対する調査では GL コースの教育に満足を感じている生徒は 86% であった。

「未来を考える国際シンポジウム」を実施することで、SP のプレゼンやパネルディスカッションを英語で行うという経験をする。これが生徒に与える影響は大きく、生徒の意欲的な活動の成果は勉強面でも顕著に表れている。

4. GL コース以外の生徒への波及、校内体制

海外研修への参加者数、外部コンテストや発表会への応募者数・合格者数は、グローバルコース以外の生徒でも増加している。また、トビタテ！留学 JAPAN には、全校で毎年 10 名以上が合格しており、2018 年度は 11 名が合格した。一方、2017 年度より中学校において「ポスター発表」が行われるようになり、各学年の発達段階に応じた工夫により、様々な発表が行われている。GL コースの取り組みが、学校全体に影響を与えた好例である。

さらに、教員の研修・指導力向上への取り組みが充実してきている。

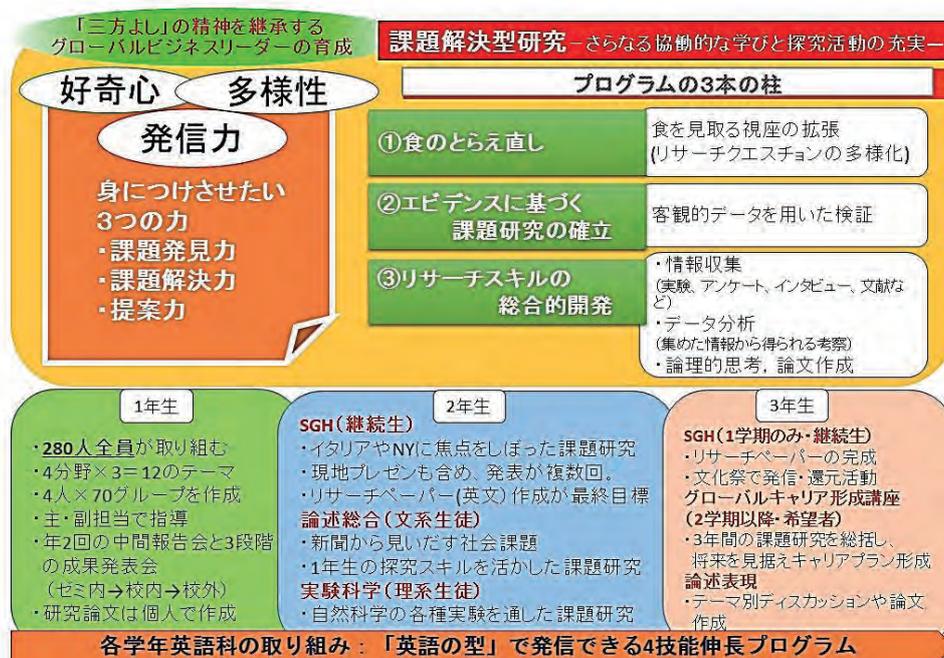


兵庫県立伊丹高等学校

『三方よし』の精神を継承する GBL（グローバルビジネスリーダー）の育成プログラム開発

【構想の概要】

「三方よし」の互惠の精神をもって世界の人々と交渉し、日本の強みを発信するグローバルビジネスリーダーを育成する。「三方よし」の精神を受け継いだ合理的で経理に明るい生活文化が伊丹にはある。食との関わりの深い地元のグローバル企業との連携を生かして「食」の分野で課題研究を進め、グローバルビジネスリーダーに欠かせない「好奇心」「多様性を受容する力」「発信力」を育成するプログラムを開発する。「食と健康」をテーマに、生活文化や経済に関する調査を、企業や大学、国際交流姉妹校との連携を通して深め、調査過程でビジネスチャンスを見だし、アイデアを具現化して「英語の型」で発信する力を高める。伊丹とNYと台中での「おいしく食べて健康になる新しい食」の提案をもって成果発表の機会とし、普通科のキャリア教育の新たな手法を結実させた「日本再発見—この国の「食」の強みを発信する」プログラムを完成させる。



教育課程表(H31年度)																																必修科目	
第1学年(第74回生)																																	
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
科目	国語総合					現代社会			数学I			数学A		物理基礎		生物基礎		体育		保健		音楽I 美術I 書道I		コミュニケーション英語I		英語表現I		家庭基礎		総合探究	LHR		
第2学年(第73回生)																																	
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
人文 社会 類型	現代文B		古典B		世界史A		日本史B※		数学II			選択		化学基礎/ 地学基礎		体育		保健		コミュニケーション英語II		英語表現II		実践 英語I		社会と情報		総合学習	LHR				
自然 科学 類型	現代文B		古典B		地理B		数学II			数学B		化学基礎		化学		物理※ 生物※		体育		保健		コミュニケーション英語II		英語表現II		情報の科学		総合学習	LHR				
選択：国語表現、数学B、生物※、総合音楽、ビジュアルデザイン、総合書道、総合英語、ライフデザイン																																	
第3学年(第72回生)																																	
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
人文 社会 類型 I	現代文B		古典B		日本史B※		世界史B※		選択A		選択B		選択C		選択D		選択E		選択F		選択G		体育		コミュニケーション英語III		英語表現III		総合学習	LHR			
人文 社会 類型 II	現代文B		古典B		日本史B※		世界史B※		政治・経済		人文数学 研究α		人文数学 研究β		選択H		選択I		選択J		選択K		体育		コミュニケーション英語III		英語表現II		総合学習	LHR			
自然 科学 類型	現代文B		古典B		地理B		世界史A		数学III			自然数学 研究α		自然数学 研究β		自然数学 研究γ		化学		物理※ 生物※		体育		コミュニケーション英語III		英語表現III		総合学習	LHR				

SGH プログラム内容

本校 SGH は 1 年生全員が参加し、週 1 回の総合的な探究の時間で取り組む。2 年生以降は継続生（台湾 FW 参加者+チャレンジ生）が取り組む。原則、教員全員が総合を担当し、1 年生ではグループ研究（4 人× 70 グループ）、2 年生以降は複数担当制で個人研究の指導にあたる。

(1) 1 年生の取り組み

課題研究について学びながら、グループでテーマ設定を行い活動を進めていく。3 学期には個人で研究論文を作成し、1 年生の課題研究は完了する。

(2) 2 年生の取り組み

1 年生の 3 月頃から 2 年生での課題研究について活動をスタートする。対象地域（イタリア・ニューヨーク）に焦点を絞り、1 年生で学んだ課題研究のメソッドを活かしつつ研究を進める。3 学期にはリサーチペーパー（英文）を作成する。

(3) 3 年生の取り組み

リサーチペーパーを完成させるとともに、文化祭を利用して活動の発信・還元を行う。2 学期以降は大学や将来を見据えて大学進学後の研究を計画したり探究活動の総括を行ったり大学進学後の計画をするグローバルキャリア形成講座（希望者）を開講する。

(4) 「英語の型」による発信ができる 4 技能伸長プログラム

これは各学年の英語科が行っているプログラムである。定期考査にリスニングやエッセイテストを出題するだけでなく、授業内にインタビューテストやエッセイテスト、パフォーマンステストを組み入れることでアウトプットの機会を全員に与えている。外部検定（GTEC）を年 2 回受けることで成果の検証を行っている。

課題研究の工夫

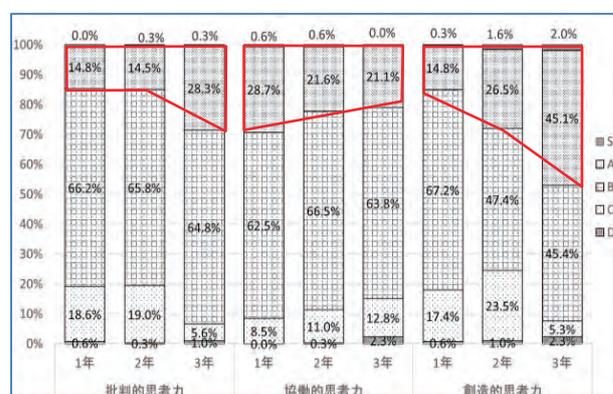
グループでの活動は成果を上げている点が多いが、グループによっては成員間の温度差による人間関係の不調や活動の停滞が生まれる。テーマ設定の際には、キーワードの関心度評価を行い、全員の関心の高いテーマになるようにしている。また、複数の担当者が関わられるように教員を配置する。評価ルーブリックを用いることで担当者間のプレを無くし、活

動ごとに生徒へのフィードバックを行う方式を定着させた。これにより、多くの教員の参画する体制が整った。

総合的な学習（探究）の時間以外の結びつきとして、職員研修で意識を向上させ、研究授業を設定し、教科への波及を促す。

成果とそのエビデンス、来年度以降について

取り組みの成果を測るために行っていることは 4 点。①評価ルーブリックによる評価の数値化、②意識調査や SGH アンケートによるプログラムの検証、③ GPS - Academic による思考力の判定、④英語外部検定による 4 技能の測定。以下は昨年度の資料である。



グラフ SGH 2 期生 3 つの思考力の総合評価
(赤枠は S・A レベルの部分)

表 各回生の 1 年生と 3 年生の CEFR レベルの比較(人)

	卒業年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度	現3年生	現2年生
	CEFR レベル	—	—	—	SGH 1期生	SGH 2期生	SGH 3期生	SGH 4期生
1 年 初回	B1以上	0	0	0	1	0	4	0
	A2	11	16	41	52	26	280	154
	A1以下	309	303	279	262	294	34	165
3 年	B1以上	4	1	2	42	15	—	—
	A2	198	150	187	199	151	—	—
	A1以下	107	160	119	19	27	—	—

批判的思考力や創造的思考力、また CEFR レベルの伸びが確認できる。

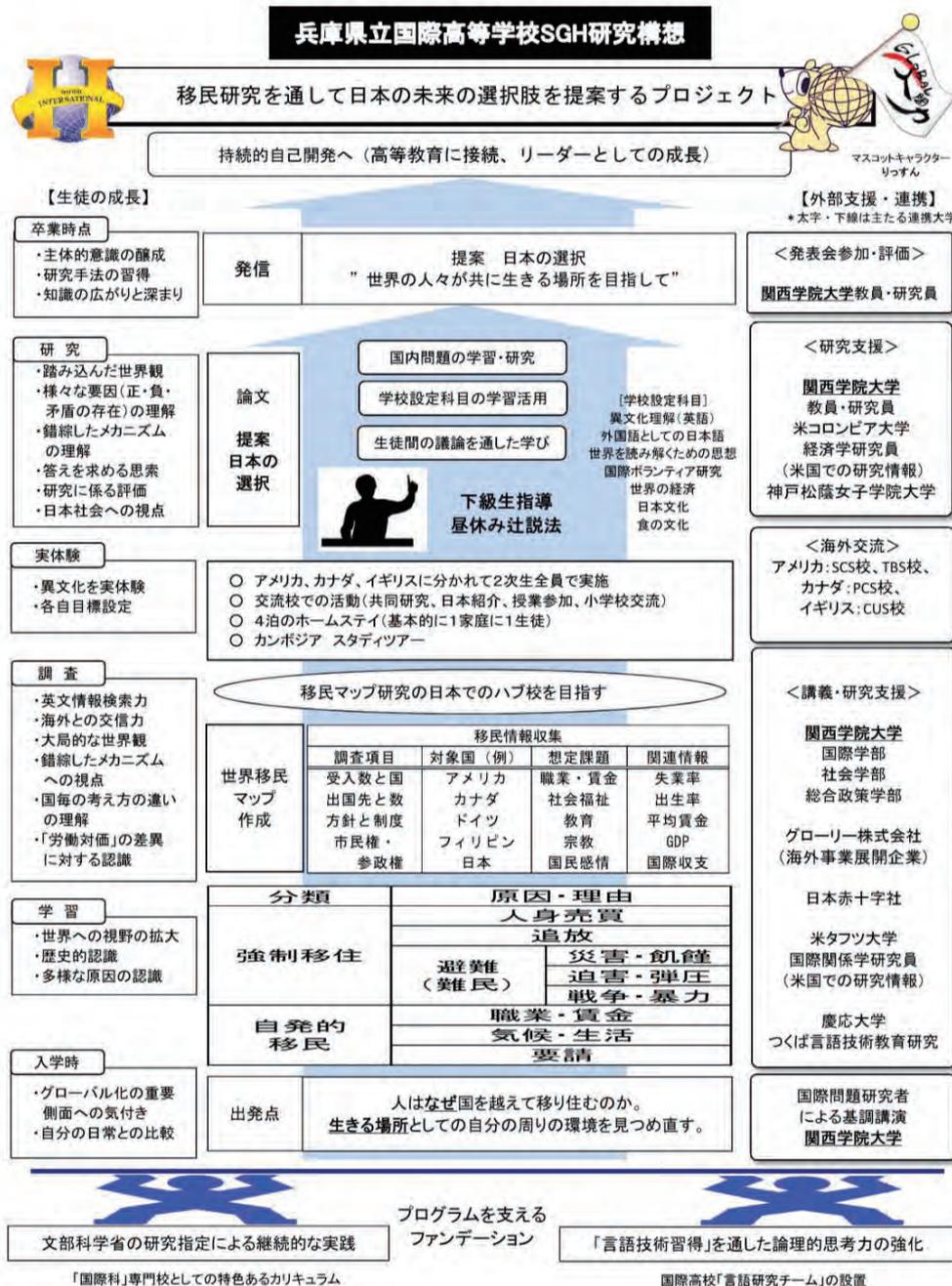
今後は、確立してきたプログラムを継続していく。探究手法を教科の授業に波及させていくことが課題だ。海外 FW は国際交流事業として継続していく。

兵庫県立国際高等学校

移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト

【構想の概要】

移民研究と今日的な国内問題の学習を積み重ね、「世界の人々が共に生きる場所」としての日本の未来の選択肢を提案する活動を、3年間の課題研究として実施する。グローバル社会の課題は日本の国内問題と無縁ではない。人々が国を越えて移り住む理由や実情、それに伴う諸課題を、海外の事例やマクロ的なデータを通して学び、それを基に日本の未来社会に予測される課題を学習することで、この国の可能性、役割、ニーズ等を総合的に捉える研究を進め、グローバル・リーダー育成に資する教育プログラムとして完成させる。



兵庫県立国際高等学校 平成30年度実施教育課程表

兵庫県立国際高等学校

1年次 16回生(平成30年度入学生)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
L H R	総合英語						体育		保健		国語総合				現代社会		数学Ⅰ		数学A		化学基礎		家庭基礎		社会と情報		芸術選択		C.C.C.		
	総合英語A		総合英語B		DDD		国語総合(現代文)				国語総合(古典)														音楽Ⅰ、美術Ⅰ		#				

C.C.C.: Communication, Cultural Understanding, Contribution (総合的な学習の時間)

2年次 15回生(平成29年度入学生)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32						
L H R	英語理解		英語表現		体育		保健		現代文B (3年次へ継続)		芸術選択※		C.C.C.		【外国研究Ⅰ】 ドイツ研究Ⅰ フランス研究Ⅰ 中国研究Ⅰ スペイン研究Ⅰ 韓国・朝鮮研究Ⅰ イタリア研究Ⅰ		【地歴選択】 世界史B 日本史B (3年次へ継続)		数学Ⅱ		化学		物理基礎 (前期4) 科学と人間 生活α		物理 (後期4) 生物		古典B (3年次へ継続)		世界地誌 (3年次へ継続)		数学B						
																																			【選択X】 (2年次限定) Discussion & Debate 世界を眺みたく ための原書		【選択Y】 (2年次限定) 数学B 世界を眺みたく ための原書

※ 芸術選択:音楽Ⅰ、美術Ⅰ、書道Ⅰ 1・2年次継続履修

3年次 14回生(平成28年度入学生)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32							
L H R	英語理解		英語表現		体育		現代文B		古典B		世界地誌		世界史A		物理 生物		化学		数学Ⅲ		【外国研究Ⅱ】 ドイツ研究Ⅱ フランス研究Ⅱ 中国研究Ⅱ スペイン研究Ⅱ 韓国・朝鮮研究Ⅱ イタリア研究Ⅱ		【選択A】 ドイツ研究Ⅲ フランス研究Ⅲ 中国研究Ⅲ スペイン研究Ⅲ 韓国・朝鮮研究Ⅲ イタリア研究Ⅲ		世界史探究 日本史探究		国語表現 国語探究 数学探究Ⅰ 数学探究Ⅱ 自然科学探究 フード デザイン		English for Qualifications (3年次限定) 国語探究 Practical English II		子どもの 発達と保育 から2科目		【選択CD】 国語探究 異文化理解 世界の経済 応用科学		【選択E】 (3年次限定) 国語探究 異文化理解 世界の経済 応用科学		【選択F】 (3年次限定) 国語探究 異文化理解 世界の経済 応用科学	
											世界史B		日本史A		【選択A】 ドイツ研究Ⅲ フランス研究Ⅲ 中国研究Ⅲ スペイン研究Ⅲ 韓国・朝鮮研究Ⅲ イタリア研究Ⅲ		【選択B】 世界史探究 日本史探究		【選択CD】 国語表現 国語探究 数学探究Ⅰ 数学探究Ⅱ 自然科学探究 フード デザイン		【選択E】 (3年次限定) 国語探究 異文化理解 世界の経済 応用科学		【選択F】 (3年次限定) 国語探究 異文化理解 世界の経済 応用科学		【選択G】 (3年次限定) 国語探究 異文化理解 世界の経済 応用科学		【選択H】 (3年次限定) 国語探究 異文化理解 世界の経済 応用科学		【選択I】 (3年次限定) 国語探究 異文化理解 世界の経済 応用科学		【選択J】 (3年次限定) 国語探究 異文化理解 世界の経済 応用科学							

※ **ゴシック解体**:国際科の専門科目

1 教育課程における課題研究活動の取組

1年次生全員が「C.C.C.」の授業（「総合的な探究の時間」）において、課題研究活動に取り組んでいる。具体的には、移民をテーマとしたディベートの実施、「移民マップ」の作成を行っている。2年次生全員も「C.C.C.」において、課題研究活動を行っている。具体的には、異文化理解をテーマに課題研究を行い、その成果をまとめ海外研修でプレゼンテーションを実施している。3年次ではグローバルリーダーコース（GL）の生徒が学校設定科目「提案日本の選択」において、課題研究の成果を論文としてまとめ発表する活動を行っている。

また、1年次の「社会と情報」、2年次の「言語技術」において、移民研究や論文作成のための授業を行っている。

1年次の「総合的な学習の時間（C.C.C.）」の時間では16人、2年次の「総合的な学習の時間」では10人の教員が担当している。本校の教員数は31人であり、ほぼ全員が課題研究活動に関わっている。

2 課題研究の指導の工夫

本校では課題研究活動のルーブリックを作成し、ディベート、「移民マップ」、論文など、すべての課題研究活動でルーブリックを用いた評価を行い事業の改善を進めている。

3 成果の普及

課題研究活動の成果の普及は、校内・校外での発表会において実施している。校外では西宮市立西宮浜中学校において英語劇を通して課題研究活動の成果普及を行っている。

4 高大連携および特色ある取組

関西学院大学、立命館大学、神戸大学、神戸市外国語大学、兵庫県立大学など多くの大学と連携し課題研究活動を実施している。他に、本校は移民政策学会と連携し、学会において本校生が課題研究の成果を発表している。平成27年度から令和元年まで12人が学会発表を実施した。

啓明学院中学校・高等学校

ソーシャル・アントレプレナーシップを備えたグローバル・リーダーの育成

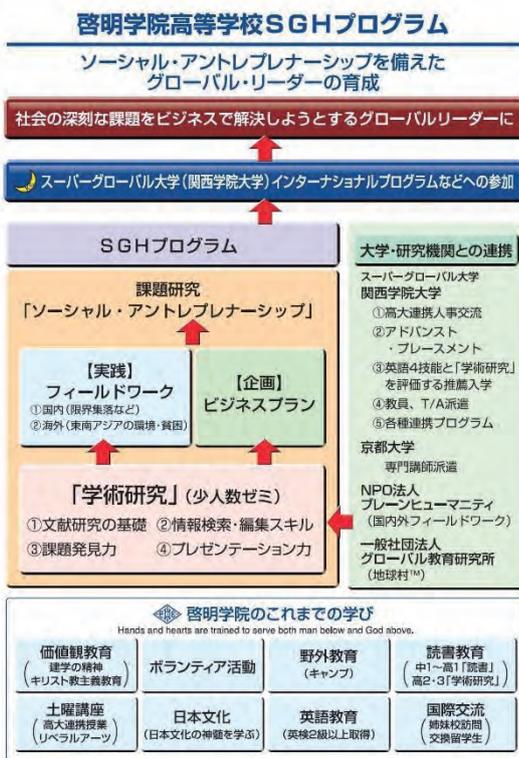
【構想の概要】

ソーシャル・アントレプレナーシップとは、公と民の間に立ち、公共の精神をもちつつ、社会的課題をビジネスで解決しようとするマインドを指している。

本構想では、文献研究をベースにした探究型学習で思考の基礎力を養い、フィールドワークやビジネスプランなどの実践的な取り組みを経て、問題解決の過程において、自主性・協働性・多様性を身に付けさせようとしている。

本校の教育の特色である価値観教育、野外教育、読書教育をベースに、生徒の社会的課題への関心を高め、深い教養と、問題解決力、コミュニケーション力を培い、ソーシャル・アントレプレナーシップを育むカリキュラムおよび指導法を大学・各機関との連携により開発する。

本校ではコース制にせず、全校生徒を対象にしている。本校が独自に開発したソーシャルビジネスプランコンテスト、ミャンマースタディーツアーなどで、グローバルな社会課題に取り組むソーシャルビジネスについて学んでいる。



高校 教育課程表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
中入学	国語総合	日本史B	数学I	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	音楽I	コミュニケーション英語I	英語表現I	英語会話	社会科	総合	英語表現II																			
1年	国語総合	日本史B	数学I	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	音楽I	コミュニケーション英語I	英語表現I	英語会話	社会科	総合	英語表現II																			
2年	現代文B	古典B	世界史B	地理A	数学II	数学B	物理基礎	体育	保健	コミュニケーション英語II	英語表現II																						
3年	現代文B	古典B	世界史B	現代文B	世界史B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	現代文B	

※ 高校入学生に対して、定書特別講座あり

高2選択科目
・英語特選
・化学（高3理系希望者必修）
・音楽
・工業
・古典特選

高3選択科目
・英語特選（国文学部英米文学英語学・総合教養学部・国際学部希望者必修）
・数学特選
・数学特選（理系）
・数学特選（理系）
・数学特選（理系）
・国際政治・国際経済
・法医学（国文学部法文学部希望者必修）
・音楽
・美術（音楽）
・社会学入門（国文学部社会学部希望者必修）

平成 27～30 年度は「総合的な学習の時間」を独立して設定していた。

令和元年度からは「総合的な探究の時間」として、(中学入学者)

2・3 年次は「学術研究」を設定した。

教育課程 学校設定教科・科目

学校設定教科に読書科を、学校設定科目としては2・3年次に「学術研究」を設定している。人文科学、社会科学、自然科学の3分野に約20講座を開設し2年間にわたって探究を行うゼミである。全教科の教員、35名が指導に当たっている。

2年次は指定されたテキストを使い文献研究の基礎を学ぶ。2年次後半～3年次にかけて、グローバ



ルな社会課題探究分野と基礎研究分野に分かれ、それぞれ個人研究テーマを練っていく。

3年次に論文の中間報告、「学術研究発表会」で最終発表を行う。

なお2講座は、外国人教員が英語で授業を行い、生徒は研究論文を英語で書いている。

令和元年度より、1年次の「地歴特講」と「読書」を「総合的な探究の時間」とし、グローバルな課題をトピックに取り上げ、グローバルイシューへの関心を育てている。

総合的な学習の時間

①SGH講演会を設定し、SDGs、国際協力・支援、ソーシャルビジネスなどをテーマに大学教授、社会起業家、ジャーナリストを招聘して実施。「学術研究」や国内外のフィールドワークへの問題意識を喚起している。

②フィールドワークは、2年次に異文化理解をテーマに必修の海外フィールドワークを実施。さらに希望者向けには、国内、ミャンマー、インドで実施。研修成果は、発表会、ポスター掲示などで共有。

③ソーシャルビジネスプランの作成を全校生徒必修としている。啓明ビジネスプランコンテストを平成28年度に開設。ソーシャルビジネス特有の観点を学んでいる。NPO法人で活躍する実践家、経営コンサルタント、学識経験者を講師と審査員に招いている。生徒相互審査、専門家による審査を経て、全校生徒の前で最終プレゼンテーション審査が行われる。

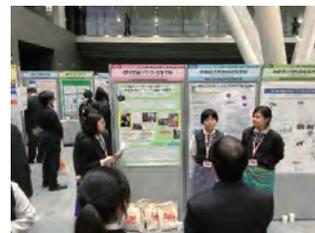
特色ある取り組み

平成29年度よりミャンマースタディーツアーを

実施している。参加者数は延べ80人である。一般社団法人ベアフットドクターズグループとともにプログラムを開発。内戦時代にケシ栽培をしていた地域で八角を栽培し、地域住民の経済力向上と平和をもたらすための「八角平和計画」に取り組んでいる。八角はインフルエンザの薬の原料とするものである。現地YMCAでミャンマーの大学生と社会課題に関する議論も行う。

高大連携

希望者は、関西学院大学との高大連携プログラムに参加できる。



SDGsに関連した社会課題を学び大学の単位を取得する科目履修「総合政策トピックスA」、生徒が実行委員会を組織して行う「KGオールスターキャンプ」、「高校生国際交流の集い」など。

教科間の連携、進め方

国語科、社会科、英語科が中心となりグローバルな社会課題、異文化理解等をテーマに授業を実施。英語科では、1・2年次に社会課題の解決に関するプレゼンテーション、ディベートコンテストを行い、英語での表現力を鍛えている。また校内のICT環境整備を進め、平成30年度には、タブレット端末を活用したプロジェクト型学習を実施している。

成果とエビデンス

将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合はSGH指定以後70%台を維持。大学への進路選択に影響があったと考える生徒は6～8割である。自主的に留学又は海外研修に行く生徒数は毎年100人以上になっている。

H27年度	H28年度	H29年度	H30年度
71人	132人	111人	104人

高校在学中に1年間の留学をする生徒数は21名(3%)となっている。(令和元年7月時点)

生徒の卒業時の英語力については、CEFRのB1～B2レベルの生徒の割合が、SGH指定1年目の88%から4年目には95%に上昇した。

大学進学後の海外留学・海外研修参加者数は、SGH指定以降、157名(22%)である(平成31年3月時点)。

鳥取県立鳥取西高等学校

地域・世界とつながり新しい価値を創造する グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

本研究では、全校生徒を対象にグローバル・リーダーに必要な知的総合力及び探究心や協調性、行動力などの姿勢・態度の育成に効果的なカリキュラム開発に取り組む。特に「グローバル化の中の地域創生」を課題研究のテーマとして、地域・世界とつながり、探究的な活動を通じて、行動力と創造力をもって問題解決に臨める人材を育成する。

本校の目指すグローバル・リーダーに必要な思考力・コミュニケーション能力・情報活用能力等の知的能力、社会の種々の場面で活用できる実践力、および探究心や協調性などの姿勢・態度を、「協同的・探究的な学習」「課題研究」「海外交流」等により養うためのカリキュラムや手法を実証的に研究する。



1年

●英数英の学力のバランスをとると同時に、現代社会、物理基礎、生物基礎など基礎的教養を幅広くしっかりと身につけます。
 ●個人活動を盛ね、一人ひとりの個性と進路意識にそった文理進路をします。

単位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	
1年	国	英	現代社会	数	物理基礎	生物基礎	体育	芸術	英語	家庭	情報	総合	英語																								

2・3年 文系

●人間、社会、文化などについて学習する歴史・英語・社会（地理歴史・公民）の履修が多くなります。大学の人文科学分野での学習に必要な知識や能力を身につけることができます。
 ●3年次には幅広い選択科目が用意されており、希望進路に応じて学習できます。

単位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	
2年	国	英	歴史・公民	数	物理基礎	生物基礎	体育	芸術	英語	家庭	情報	総合	英語																								
3年	国	英	歴史・公民	数	物理基礎	生物基礎	体育	芸術	英語	家庭	情報	総合	英語																								
大学では	法学 経済学 社会学 経営学 文学 外国語 社会学 心理学 国際関係 教育 環境 芸術などの学部へ 専攻における選択プラン例 法学（裁判官・検察官・弁護士） 外交官 経営学 研究者 教員 ジャーナリスト 公務員 など <small>（印刷用紙、地図、辞書、辞典、英辞対日辞書など1科目あたり2科目を選択し、（歴史・地理などの選択科目は、希望者が少人数の場合は開講されません。）</small>																																				

理系

●数学や理科の履修が多く、実験や観察、演習などを通して自然（環境・環境など科学的・数学的な関心や能力を伸ばします。大学の自然科学分野での学習に必要な知識や能力を身につけることができます。

単位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36		
2年	国	英	歴史・公民	数	物理基礎	生物基礎	体育	芸術	英語	家庭	情報	総合	英語																									
3年	国	英	歴史・公民	数	物理基礎	生物基礎	体育	芸術	英語	家庭	情報	総合	英語																									
大学では	医学 産学 薬学 理学 工学 情報 生命科学 農学 教育 環境などの学部へ 専攻における選択プラン例 医師 看護師 薬剤師 獣医師 研究者 エンジニア 建築士 教員 公務員 など																																					

課題研究「思索と表現」を軸とするカリキュラム開発

「地域・世界とつながり新しい価値を創造するグローバル・リーダーの育成」のため、(1) 協同的・探究的な学び (2) 課題研究 (3) 海外交流の開発と実践に取り組み、検証と工夫改善を重ねた。(1) では、鳥取県が重点化してきた学習科学理論研修を背景に「対話的・主体的で深い学び」の研究と実践が進み、グループ活動等による対話や議論をもとにして、探究的なテーマ学習に取り組んできた。(2) では、1年次に地域医療、防災、国際化等をテーマとするフィールドワークと研究発表等とおして、本校で開発した『探究学習マニュアル』を活用しながら、探究学習における基本的なスキルを身に付ける取組を行った。2年次・3年次には、グローバル化、地域創生や持続可能な社会、自然科学等をテーマとする課題研究を、2学年縦割りを実施した。(3) では、アデレード大学との相互派遣事業とおして、持続可能な社会やエネルギー等をテーマとする日豪比較研究を実施したほか、韓国春川高校交流や台湾研修旅行を実施した。県や外部団体が実施する海外派遣事業や大会にも積極的に応募し、日本代表に選考される生徒が複数出てくるなど、年々活躍の幅を広げている。(1)～(3)の取組が、点から線へ、線から面へと、広がりをつながりを持つことにつながったことに加え、構想を超える取組もみられた。

また、ESD日米教員交流に2名の教員が参加したことを皮切りに、ESDに関する授業実践や課題研究が進み、ユネスコスクール加盟に向けた申請を進めた結果、概要に述べたグローバル・リーダーとしての資質に加え、①システム思考、②未来思考、③規範的思考、④戦略的思考、⑤協調的思考を含む持続可能性に関するコンピテンシーを意識化した。

海外派遣事業と生徒の主体的な活動

海外研修・留学等に参加した生徒数の推移は、30 (H 27)、24 (H 28)、44 (H 29)、22 (H 30)、26 (H 31 予定) と横ばいに見えるが、内容を見るとアデレード大学研修への派遣者数減の影響にも関わらず、自主的参加の大会等への派遣が増加したことにより内容と質は5年間で大きく変容している。派遣生徒は海外で生徒交流や視察先を楽しむだけでなく、調査研究を同時に行い、派遣後に校外で積極的に

発表をし、その成果等を普及している。また、ビデオ会議やSNSをとおした海外の大学生や高校生との交流を継続することによって、グローバル化の中で高校生活そのものを送る生徒も増えてきた。

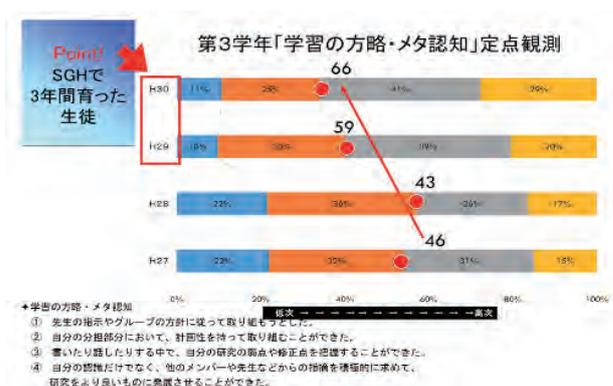
事実、平成30年度のグローバルクラスルーム国際模擬国連日本代表団派遣などにより国際大会に参加したり、日本地理学会高校生ポスターセッションで受賞したりするなど、全国規模の大会に出場する生徒が増加した。部活動としてグローバル課題について研究する生徒も出てきている。国内外の大会への入賞者・参加者数の推移は以下のとおりである。

	H 2 6	H 2 7	H 2 8	H 2 9	H 3 0
入賞者数	18人	30人	34人	49人	39人
参加者数	45人	59人	67人	138人	133人

SGH事業による生徒の変容

「思索と表現アンケート」(平成27年から継続実施)と「年度末SGH事業振り返りアンケート」(平成29年から継続実施)により、生徒の変容を検証した。「コミュニケーション・コラボレーション等」は、第3学年で高次に著しく移行した。「学習の方略・メタ認知」は学年を追って高次に移行した。3年生の定点観測(図1)では、年度を追うごとに上昇している。「思索と表現」は半数以上の生徒が有益であると感じるとともに、生徒の進路意識に影響を与えている。また、海外研修や国際的な仕事への関心は6割以上に増加している。中間評価で指摘された研究の質向上への取組として、研究成果の最低基準を設定するとともに、県外大会派遣選考を新たに実施した。3年生が作成する研究レポートは質的向上がみられており、量的評価により昨年度との比較検証を実施中である。

図1



岡山県立岡山操山高等学校

「和して流れず」の精神で、岡山と日本の未来を切り拓くグローバル・リーダー

【構想の概要】

グローバル・リーダーに必要な「幅広く深い教養」「課題解決能力」「コミュニケーション能力」「リーダーシップ」「社会貢献の意識」の「5つの資質・能力」の向上を目指し、次の3つの研究開発単位の取組を行い、その相乗効果により、「和して流れず」の精神をもって、世界の課題に果敢に挑戦するグローバル・リーダーを育成する。

(1)「未来航路」: 総合的な学習(探究)の時間に中学1年生から高校3年生までの6年間を見通して系統的・発展的に、岡山・日本・世界の課題を発見し、その課題を研究する。(2)「SOZAN 国際塾」: 意欲のある生徒で組織し、研究者や企業関係者等多様な人と協働しながらグローバル課題解決を目指して研究する。(3)「GLOBAL STUDIES」: 各教科で育成する「5つの資質・能力」の教科目標を設定し、アクティブ・ラーニング等により授業改善を図る。

【構想図及び教育課程表】



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
標準 コミュニケーション 英語Ⅲ			発展 英語表現Ⅲ		標準 数学Ⅰ					標準 数学Ⅱ		現代文		古典Ⅰ	
発展 コミュニケーション 英語Ⅲ			発展 英語表現Ⅲ		発展 数学Ⅰ					発展 数学Ⅱ		評論研究		古典Ⅱ	

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
標準 コミュニケーション 英語Ⅲ			標準 英語表現Ⅲ		標準 数学Ⅰ					標準 数学Ⅱ		現代文		古典Ⅰ	
発展 コミュニケーション 英語Ⅲ			発展 英語表現Ⅲ		発展 数学Ⅰ					発展 数学Ⅱ		評論研究		古典Ⅱ	

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
標準 コミュニケーション 英語Ⅲ			標準 英語表現Ⅲ		標準 数学Ⅰ					標準 数学Ⅱ		現代文		国際総合	
発展 コミュニケーション 英語Ⅲ			発展 英語表現Ⅲ		発展 数学Ⅰ					発展 数学Ⅱ		評論研究		古典Ⅱ	

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
標準 コミュニケーション 英語Ⅲ			標準 英語表現Ⅲ		標準 数学Ⅰ					標準 数学Ⅱ		現代文		古典	
発展 コミュニケーション 英語Ⅲ			発展 英語表現Ⅲ		発展 数学Ⅰ					発展 数学Ⅱ		評論研究		古典Ⅱ	

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
標準 コミュニケーション 英語Ⅲ			標準 英語表現Ⅲ		標準 数学Ⅰ					標準 数学Ⅱ		現代文		古典	
発展 コミュニケーション 英語Ⅲ			発展 英語表現Ⅲ		発展 数学Ⅰ					発展 数学Ⅱ		評論研究		古典Ⅱ	

17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
物理基礎	化学基礎	生物基礎	世界史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
化学基礎	生物基礎	世界史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
生物基礎	物理基礎	世界史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
英語表現Ⅲ																

17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
物理基礎	化学基礎	生物基礎	世界史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
化学基礎	生物基礎	世界史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
生物基礎	物理基礎	世界史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
英語表現Ⅲ																

17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
物理基礎	化学基礎	生物基礎	世界史A	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
化学基礎	生物基礎	世界史A	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
生物基礎	物理基礎	世界史A	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
英語表現Ⅲ																

17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
物理基礎	化学基礎	生物基礎	化学	物理	日本史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
化学基礎	生物基礎	化学	物理	日本史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
生物基礎	物理基礎	化学	物理	日本史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
英語表現Ⅲ																

17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
物理基礎	化学基礎	生物基礎	化学Y	生物Y	物理Y	日本史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
化学基礎	生物基礎	化学Y	生物Y	物理Y	日本史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
生物基礎	物理基礎	化学Y	生物Y	物理Y	日本史B	現代社会	英語理解Ⅰ	英語理解Ⅱ	英語理解Ⅲ	英語理解Ⅳ	英語理解Ⅴ	英語理解Ⅵ	英語理解Ⅶ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ	英語理解Ⅷ
英語表現Ⅲ																

各教科における SGH の取組

「GLOBAL STUDIES」は、中学高校の各授業の中で、本校の定める「5つの資質・能力」を向上させ、未来航路や SOZAN 国際塾での取組の基礎を作ることを目標としている。

主な取組の1つ目が「Global Can-do List による授業」である。これは、全教科・科目で「5つの資質・能力」を育てるために到達度目標表 (Global Can-do List) を作成し、それを生徒とも共有し授業改善に取り組むものである。そのため、教科を越えてアクティブ・ラーニングや課題研究についての校内研修も実施している。

2つ目が「教科研究」である。これは、統一テーマ (平成30年度は「グローバル・リーダーの育成に向けた取組」)のもと、各教科が主体となって教科テーマを設定し、研究を行うものである。アドバイザースタッフを大学や岡山県総合教育センターの指導主事に依頼し、年間を通じて、授業改善に向けた指導をしていただく。年末には、校内外の教員参加のもと教科研究会を実施する。研究成果を外部に発信するだけでなく、外部参加者を含んだ研究協議により、新たな課題を発見したり貴重なアドバイスを多数いただく機会となっている。

＜教科テーマの一部＞

教科	教科テーマ
国語科	Global Can-do Listを活用した授業改善の取組
地歴公民科 社会科	グローバル・リーダーに必要な資質・能力を高める授業実践～Global Can-do Listに応じた指導～
数学科	授業で育てる資質を踏まえた課題学習における教材開発
理科	効果的な仕掛けづくりとその検証法の開発
保健体育科	コミュニケーション能力と課題解決能力の向上を目指した表現活動の実践
芸術科 (美術)	新指導要領をふまえた、鑑賞と表現を双方向に結びつけることによる学びの深化を通じた課題解決能力の育成と社会貢献意識の涵養の研究

教材開発と普及

事業3年目に1年1学期の教材として「ラーメンで世界進出」を開発した。この教材の特徴は

- ・講演会「博多一風堂」と課題研究のリンク
- ・ビジネス課題の発見と進路学習の融合

である。講演会、課題研究、進路学習は独立したものになりがちであるが、この3つを関連づけたものである。

まず、「博多一風堂」による講演会を実施し、

ラーメン業界における世界進出の意義や課題、グローバル展開などについて話をいただいた。その後、課題研究として、ラーメン会社を起業し、世界進出していく社長に対して「専門家として貢献できること (ビジネス課題の発見)」「貢献に対して必要な力を身に付けるために、どこの大学・学部・学科で何を研究すればよいのか」を8系統 (文学系統、法・経済系統、教育系統、理学系統、工学系統、農・水産系統、医療・生活系統、芸術系統) で研究し、ポスター発表するものである。

「ビジネス課題の発見 ⇒ 進路学習」の流れが高く評価され、この教材は、ベネッセコーポレーションの教材として掲載された。多くの学校や教育機関に成果普及できたと考える。

成果と課題

学校アンケートや GPS - Academic の結果から、「幅広く深い教養」「課題解決能力」「コミュニケーション能力」が向上している。また、下表のとおり、留学者数が増加したり、高校3年間で培った課題解決能力やプレゼン能力等をアピールする推薦 AO 入試受験者数も増加している。その他、地域小学生への課題研究で身に付けた GIS の技術指導、学会での発表、SGH 最終年度の姉妹校 (オーストラリア) 締結などが成果として挙げられる。

課題は、「社会貢献の意識」の伸び悩みである。

	H30年度 (4年目)	H29年度 (3年目)	H28年度 (2年目)	H27年度 (1年目)
国立推薦AO 合格者数	27	11	20	14
長期留学者数 (3ヶ月以上)	1	1		
短期留学者数(10日 以上、姉妹校除く)	6		2	
科学系オリンピック 等入賞者数	生物：金2 銅1 化学：銅1 物理：銅1		哲学： 日本代表 1	

岡山学芸館高等学校

グローバル社会に貢献できる リーダー育成のための研究開発

【構想の概要】

岡山学芸館高等学校は建学以来、全校を挙げてボランティアや東南アジアの開発途上国において教育支援を行うなど様々な形で社会貢献に取り組んできた。グローバル・リーダーに求められているのは、新しい価値の創造だけでなく、まずは現状の社会が抱えている課題の是正が必要であると考えます。その課題の一つが、世界に蔓延する貧困や不平等の是正である。具体的には、「世界に貢献する」グローバル・リーダーに必要な資質・能力を「グローバル・マインド・問題解決能力・交渉型コミュニケーション能力・協働力・実践力」の5つに集約し、これらの資質・能力の養成・修得を進めるものである。この5つの資質の修得にあたり、PBL(Project Based Learning)の手法を用いて、実践活動を伴う研究活動を行う。



岡山学芸館高校SGHに関わる教育課程表

教科	科目	履修単位	1年	2年	3年
グローバル スタディーズ	グローバル課題研究Ⅰ	1	1		
	グローバル課題研究Ⅱ	1		1	
	グローバル課題研究Ⅲ	1			1
	総合的な探求の時間	1	1		

科コースの編成とSGH対象		特性	対象生徒数
普通科	清秀高等部	6か年教育専用コース	74名
	医進コース	旧帝大、最難関私大、医学科 ※理系特化型カリキュラム	54名
	スーパーVコース	旧帝大、最難関私大	240名
	特別進学コース	難関大学	415名
	進学コース	文武両道による進学	549名
英語科	2年次に1か年留学	79名	
SGH対象生徒数			862名

教育課程の工夫と教科関連系

岡山学芸館高等学校では、学校設定教科としてグローバルスタディーズ、学校設定科目としてグローバル課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを設定し、課題研究の授業を展開している。ここでの学びを教科横断的なものとするため、本校では「教科のSGH化」と銘打ち、英語、国語、社会、情報との連携を密にして、課題研究と教科が有機的に結びつくよう工夫している。特に、英語はコミュニケーション英語の改革により、英語で行うミニ探求をはじめとした取り組みが結果として現れ始めている。卒業時におけるCEFRB1以上取得者がSGH対象クラスのうち39%まで向上した。これはSGH指定以前の11%から飛躍的に増加している。



異なる教科の教員の係わり合いは、SGH指定を契機に大きく変化した。SGH対象科コースに所属する教員のうち65%が課題研究に関わっている。このため、課題研究の進め方等に関して異なる教科の先生方がお互いに意見を交わす機会が増加した。最近では異なるテーマのゼミ間で連携して、様々な視点を生徒が享受できるよう教員が工夫している。

課題研究活動の特徴と生徒の意識

グローバル課題研究Ⅰ（1年生）では、①全ての対象クラスをシャッフルすることで多様性を担保した課題研究用クラスの設定②教員が作成するオリジナル教材の使用（毎年改訂）③アクティブラーニングをベースにした100分授業の展開、という3つの特徴的取り組みを行っている。グローバル課題研究Ⅱ（2年生）ではPBL(Project Based Learning)の手法を用いた、Action Planの作成と実行を基本とした実践活動を伴う研究活動が特徴である。考えたことを実社会で表現することを必須とすることで、社会貢献意識が育めていると自負している。グローバル課題研究Ⅲでは研究の再策定と普及活動を行

っている。このように研究活動の振り返りを重視することで、生徒の自己成長の再認識につながっている。

評価項目	1年生	2年生	3年生
視野が広がった	82%	90%	85%
新たな発見や思考を持つようになった	82%	90%	83%
世界の出来事への興味関心が深まった	75%	81%	79%
社会問題の解決に向けて高校生ができることがある	78%	86%	80%
自分の考えを表現したりディスカッションができるようになった	63%	67%	58%

課題研究の評価

課題研究の成果は以下3点により行っている。①課題研究ルーブリックによる活動の客観的評価②グローバル・リーダーに関するアンケートによる5つの資質能力の間接的評価③自己成長評価ルーブリックによる5つの資質の自己成長評価。このように客観的評価と主観的評価を合わせて評価している。

観点	準備	行動	チェック	明確化
評価レベル	Stage 1	Stage 2	Stage 3	Stage 4
問題意識の設定	興味関心が定まっており、問いに対して研究活動するのイメージできている状態。	先行研究で何をやるのが明確になっている状態。（題名、論文、読めるテーマ等が分かっている状態）	先行研究を通して、研究を行う社会的課題が客観的に立証できている状態。「問い」が問いとして成立している状態。	研究テーマおよびサブテーマが決定しており、明確に課題研究の問題意識を他者に説明できる状態。
Action Planの策定	問題意識がある程度明確化されており、その解決にあたりどのような活動が効果的であるか議論できている状態。	問題意識をもある程度明確化されており、自分達で、どこに、何を、どうやって活動するのかが議論できている状態。	問題意識が明確化しており、どこに、何を、どうやって活動するのかが決定している状態。また、効果測定の議論ができている状態。	問題意識が明確化しており、どこに、何を、どうやって活動するのかが決定している状態。また、効果測定の議論が完了している状態。
Action Planの実行	問題意識に対応した行動になっているか確認ができている状態。また、外部連携機縁が決定している状態。	活動の目的、権限が決定しており、行動の準備がすべて整っている状態。	実際に行動を行い、活動成果をアウトプット化できている状態。（活動履歴を残している）	実際に行動し、活動履歴を振り返り、その効果を確認し始める準備ができている状態。（取得したデータの整理ができている状態。）
Actionの効果測定	自分達が実施したデータから、問題意識に対応したデータを抽出できている状態。	抽出したデータの関連性を明らかにし、グラフ等により適切にデータの可視化が行われている状態。	抽出したデータの関連性を明らかにし、問題意識に対応したものであることを論理的に明らかにできている状態。	骨子で、問題意識の策定から行動、効果測定までを整理し直し、論理的な流れが立てられているか確認できている状態。
研究の考察	自分達の先行研究、問題意識、Action、効果測定すべての素材がそろっていることを確認できている状態。	問題意識（リサーチクエスト）の考えとなる結論を、データに基づく事実（根拠）としてまとめられている状態。	得られたデータ（事実）から新たな問いを発生し、次年度に向け引き継ぎ準備がまとめられている状態。	すべての研究活動の過程が完了し、自分達の研究活動のすべてが可視化されている状態。

課題研究の成果と普及活動

目標設定数値に関しては、概ね達成できる状況にある。特に先にも記載した英語力の向上、自主的に留学あるいは海外研修に参加する生徒数が161名から365名への増加など、SGH指定を契機に大きな変化を得た。普及活動に関しては、公式SNSの開設、小中学校と連携した出前授業や中学校の職員研修での講演の実施を通して、外部普及活動への参加生徒数193名（延べ数）の実績など、取り組みを年々増加させている。また、他校との連携したカンボジア合同研修会の開催や地元NPOと連携したワークショップの開催など縦横の新たな関係性が広がっている。



課題研究課題と新たな取り組み

課題意識は、評価において2年生をピークに3年生で数値が下がることである。生徒のより主体的な研究活動を促すことが必要だという認識から、今年のテーマを「教員のファシリテーター化」を合言葉に教員のスキル向上に努めている。

愛媛県立宇和島南中等教育学校

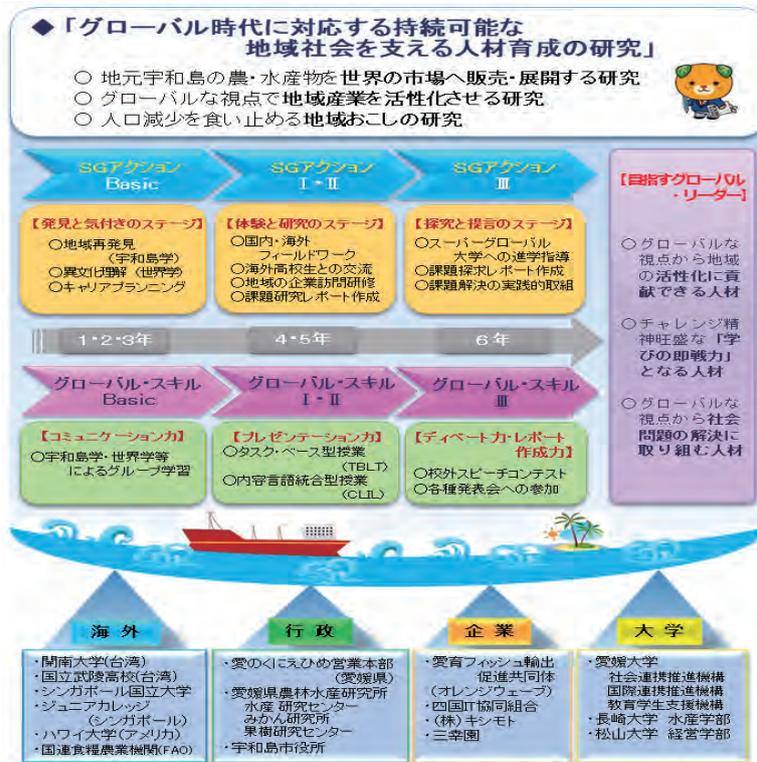
宇和島のうみ・やまから世界を考える

～ Global Leader Project from the Local Area ～

県立中等教育学校のSGチャレンジ

【構想の概要】

本校では、『グローバル人材を育成するための課題研究プログラム開発（SGアクション）』『コミュニケーション能力を高めるための教育課程の開発（グローバルスキル）』『グローバルマインドの向上』の三つの柱に基づく取組を有機的に展開している。そして、それらの活動を通して、ローカルに対する理解と愛郷心を基盤として地域の課題を解決し、グローバル化していく世界の中で地域の持続的発展のために実践的な行動の取れるリーダーと、探究活動から得た知識や技能、実践力を生かして、自ら考え、判断・行動し、グローバル社会の課題を解決することのできるグローバル・リーダーの育成を目指している。



教育課程

(注: 1目盛りは適当に1時間を示す。)

年次	科目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32		
4年	共通	国語	現代	数I	数II	数A	化基	地基	体育	保健	音I	美I	コミュ英I	英表I	英基	情報	SGA I	GS I	H	R															
5年	SG文系	文系I	現文B	古典B	世史A	世史A	世史B	数II	数B	生基	探究理I	体育	コミュ英II	英表II	保健	SGA II	GS II	H	R																
		文系II	現文B	古典B	世史A	世史A	世史B	数II	数B	生基	探究理I	体育	コミュ英II	英表II	保健	SGA II	GS II	H	R																
	SG理系	理系I	現文B	古典B	世史A	地理B	数II	数III	数B	物基	物理	化学	体育	コミュ英II	英表II	保健	SGA II	GS II	H	R															
		理系II	現文B	古典B	世史A	地理B	数II	数III	数B	物基	物理	化学	体育	コミュ英II	英表II	保健	SGA II	GS II	H	R															
6年	SG文系	文系I	国表	現文B	古典B	世史B	数研I	数研II	科学人間	生基	探究理II	体育	コミュ英II	英表II	総合社会	SGA III	GS III	H	R																
		文系II	国表	現文B	古典B	世史B	音II	音II	科学人間	生基	探究理II	体育	コミュ英II	英表II	総合社会	SGA III	GS III	H	R																
	SG理系	理系I	現文B	古典B	地理B	地理B	数III	数研II	物理	化学	体育	コミュ英III	英表II	SGA III	GS III	H	R																		
		理系II	現文B	古典B	地理B	地理B	数III	数研II	物理	化学	体育	コミュ英III	英表II	SGA III	GS III	H	R																		

課題研究「SGアクション」

後期課程(4～6年次)で設定している「SGアクション」は、グローバル人材を育成するための課題研究プログラムであり、各年次において以下のように構成している。

SGアクションⅠ(4年次)では、講演会を実施して地元宇和島の現状を把握し、愛郷心の育成を図るとともに、課題研究への興味関心の喚起及び地元の基幹産業等の知識を習得することを目標としている。課題研究は4～5人のグループで行い、自ら課題を見つけて、より良く問題を解決する資質や能力、プレゼンテーション能力の育成を目指している。

SGアクションⅡ(5年次)では、SGアクションⅠで学んだ知識や技術を生かし、地域の活性化につながる新たな研究課題を見つけ、将来の進路と自らの課題を結び付けながら、個人で課題研究に取り組んでいる。学び方や考え方を身に付け、課題解決や探究活動に主体的・創造的に取り組む態度の育成を目指している。

SGアクションⅢ(6年次)では、SGアクションⅡにおける課題研究成果を論文にまとめることで、問題の解決や探究活動に主体的に取り組み、自己の在り方や生き方を深く考えることを実践している。

学校設定科目・教科間の連携について

後期課程(4～6年次)において、学校設定科目として「グローバル・スキル」を設定し、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業を展開している。この授業では、3年間の継続的な取組により、「話す」「聞く」「読む」の3技能の育成を特に念頭に置いている。4年次では、スピーチ及びミニディベート等の活動を行い、それらの活動を深化・発展させ、5年次では即興スピーチやインタビューを、6年次では即興プレゼンテーションやエッセイライティングなどを、それぞれ実施している。さらに、ICT機器を活用して海外の姉妹校の生徒とテレビ会議交流を行い、議論を深めながら実践的な英語力の育成に努めている。

また、教科間の連携については、CLIL(内容言語統合型学習)を取り入れており、数学科や地歴公民科等の授業の中で、実践的な英語でのコミュニケーションを図っている。

上記の活動等を継続的に行うことにより、英語を話す場面で、間違えることを恐れない積極的な姿勢の生徒が多くなり、英語の各種検定でも成果を上げている。

海外フィールドワーク

海外フィールドワークでは、「シンガポール・マレーシアコース」と「台湾コース」を設定している。事前研修と事後研修に力を入れており、現地でのフィールドワークが目的意識を持った活動となるよう取り組んでいる。平成30年度の「シンガポール・マレーシアコース」では、「自動翻訳機(MT)を用いたコミュニケーションの実践」というテーマを設定し、企業訪問等を通じて、自動翻訳機が今後の英語学習や企業の海外進出、国内のインバウンド事業等にどのような影響を与えうるか深く考察することができた。

一方、「台湾コース」では、「真珠」「防災」「ぶりだいこん缶詰」という三つのテーマを設定して研究を行った。特に、ぶりだいこん缶詰班は、平成29年度の同フィールドワークにおける、台湾に住む人たちの味覚についての研究結果に基づき、愛媛県立宇和島水産高等学校が製造した「ぶりだいこん缶詰」を台湾で販売することの可能性を探った。現地のスーパー裕毛屋において行われた「愛媛フェア」において、事前研修で学んだ中国語を駆使し、ぶりだいこん缶詰を完売させることに成功した。

海外フィールドワークの経験を通して、様々な学校や企業と協力することで、自分たちの研究構想を実現できることが実感できたり、少しの勇気を出してアクションを起こすことで新しい発見があることを実感できたりした。この経験を生かし、将来グローバルマインドを持った国際人として活躍することを期待している。

福岡県立鞍手高等学校

筑豊から世界へ！グローバルシティズンシップを持った「たくましき前進者」の育成

【構想の概要】

- ①「内向き志向」や自国家・自民族中心の思考を脱し、地球的な視野から地域の持続可能な発展に対して自覚と責任を持って行動するグローバルシティズンシップを持った「たくましき前進者」の育成を目指し、グローバル社会を生きるうえで必要な7つの力（人間関係調整力・行動力・共感力・思考力・理解力・判断力・表現力）を身につけるためのプログラム開発
- ②生徒の学習プロセスを見据えながら、課題研究を効果的・効率的に進め、生徒の能力の伸長を促す手法の開発
- ③生徒の能力の伸長を測る能力評価指標の作成に関する研究



【課題研究に関する連携大学】

- ・北九州市立大学
- ・京都大学東南アジア地域研究研究所
- ・九州大学
- ・東北大学金属材料研究所
- ・福岡女子大学
- ・福岡県立大学
- ・福岡工業大学
- ・九州産業大学語学教育研究センター

人間文科コース教育課程表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
1年次	国語総合		現代社会探究		数学Ⅰ・A		体育	保健	芸術	コミュニケーション英語Ⅰ	英語表現Ⅰ	家庭基礎	社会と情報	SS科学探究基礎	HR																		
2年次	現代文B	古典B	世界史B	日本史B	数学Ⅱ・B	化学基礎	生物基礎	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅱ	異文化理解	人文探究	課題Ⅰ	HR																			
3年次Ⅰ型	原書講読	近現代文研究	日本史探究	世界史探究	政治経済	数学総合演習	化学探究	生物探究	体育	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅱ	課題Ⅱ	HR																				
3年次Ⅱ型	原書講読	近現代文研究	日本史探究	世界史探究	政治経済	体育	芸術 フードデザイン	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅲ	英語理解	実用の書	課題Ⅲ	HR																				

課題研究の取組

◆人間文科コース課題研究

人間文科コースについては、シンガポールの研究班とマレーシアの研究班を設定し、それぞれのグループに担当教員を1名つけて、少人数ゼミ形式で研究を進めている。大学との連携については、北九州市立大学の協力のもと、専門的なアドバイスを受けるようにしている。また、夏に京都研修を実施し、京都大学東南アジア地域研究研究所を訪問し、専門の教授の講義も受講している。

12月にはシンガポール・マレーシアに実際に行き、現地で研修を行う。現地の学生とともにアンケート調査や協議をしたり、課題研究の中間発表をしたりして、現地でしか得られない情報を収集し、研究内容を深めている。



【海外研修での協議の様子】

海外研修終了後に、研究論文を仕上げ、人間文科コース課題研究発表会を2月末に実施。この発表会には、大学教授等を招聘し、外部による評価を受けている。人間文科コースの研究発表はすべて英語による発表を行っている。

◆普通科課題研究

普通科の課題研究は「ドリームプラン班」「フットパス班」という2つの研究班に分けて研究活動を行なっている。ドリームプラン班では、筑豊地域の活性化につながるビジネスアイデアの創出、フットパス班については地域へのフットパスコースの提案から提案後の地域への浸透等について調査している。ドリームプラン班については、九州大学および学生ティーチングアシスタントの協力により、様々な観点から指摘を受けながら研究内容を深めるようにしている。

フットパス班については、実際に直方市の地域にフットパスコースを提案し、地域への影響を研究している。直方市役所、地域自治会、さらに北九州市立大学および学生ティーチングアシスタントと連携して、生徒が地域でフィールドワークを行ったり、地域の人を巻き込んだフットパス体験ツアーを実施

したりしている。

各教科の授業改善および教科間の連携

SSHと連携して各教科において、能力の育成に関する授業改善を行っている。教科指導にお



いて、どのような能力の育成するのかについて、手法は適切かどうかについて明らかにするための授業改善アンケートを平成29年度から実施しているが、初年度の実施結果を見ると、やや基礎力を重視した授業が多く見られた。30年度においては応用的・実践的な力（批判的思考力・創造的思考力・協働的思考力）にも重点をおいた改善がなされているとの結果が出ている。また教科間の連携については、各教科で英語イマージョン授業を実施している。

成果の普及

成果普及については、文化祭の中に課題研究発表会を位置付けることによって、校内での共有や地域への普及を図っている。また、平成29年度には「筑豊会議」と称して、地域の方を巻き込んで研究発表やパネルディスカッションを実施した。また、教育関係者向けに事業説明等も実施している。平成30年度には韓国の高校の教員の訪問も受けた。人間文科コースにおいては、京都で行われた東南アジアの研究者の集まる国際シンポジウムで英語発表をしたり、普通科においては、熊本で行われたフットパスに関する国際シンポジウムや、市の産業振興に関する地域イベントにおいて発表したりするなど、校外での発表の機会を設け、広く研究成果を発信している。



【H29・筑豊会議の様子】

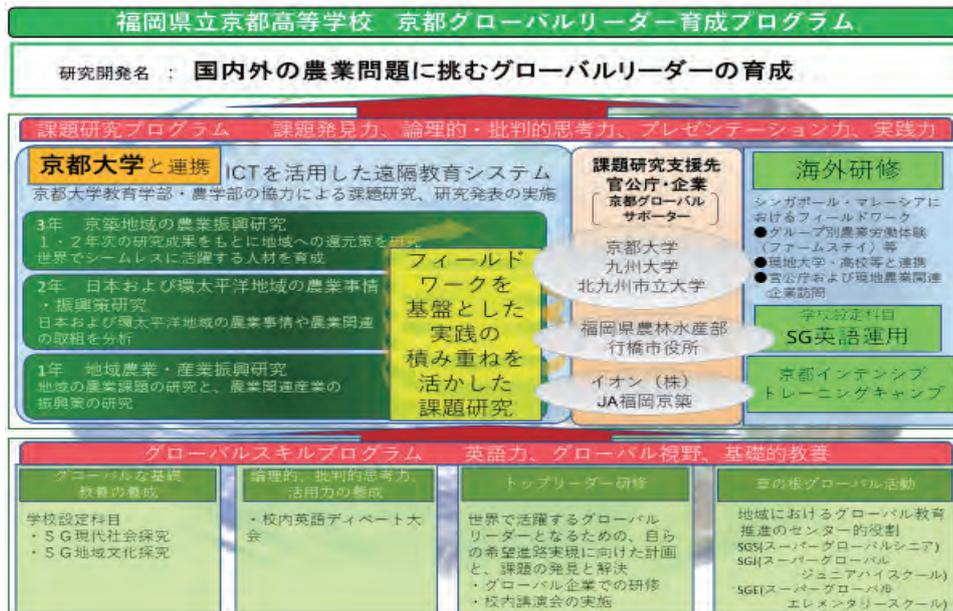
福岡県立京都高等学校

国内外の農業問題に挑む グローバルリーダーの育成

【構想の概要】

京都大学（ICTを活用した遠隔教育システム）や地元行政機関、大学、農業関連企業等との連携のもと、世界的視野に立って農業問題を研究し、その課題解決に必要な主体的かつ協働的に行動できる力、批判的思考力や論理的思考力等を有するグローバルリーダーの育成方法に関するプログラムの開発を行う。

研究はフィールドワークを中心に生徒が京築地域の農業事情を調査するとともに、日本及び環太平洋地域の農業問題や農業活性化に向けた取組を学び、京築地域に紹介・還元をする形で進める。その過程において、生徒は農業の振興策をグループで研究し発表を行う協働的な学習に取り組む。教育効果については、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価・アンケート・ポートフォリオ等によって評価・検証を行う。



平成30年度入学生 教育課程表

教科	科目	学年 類型	学年																			
			1	2	3	4	5	6	7	8												
国語	国語総合	4	4																			
	国語表現	3																				
	現代文B	4		2	2	2	2	2	2	2												
	古典B	4		3	2	2	4	4	3	3												
	* 55年度文化探査	1	1																			
	歴史	世界史A	2																			
		世界史B	4		2	2	2	2														
		日本史A	2																			
		日本史B	4		③	②	②					②	②									
	公民	現代社会倫理	2	2																		
* SG現代社会探究		1	1																			
数学	数学Ⅰ	3	3																			
	数学Ⅱ	4		4	3	4																
	数学Ⅲ	5																				
	数学A	2	2																			
	数学B	2		2	2	2																
	* 応用数学α	2~6										5	4									
	* 応用数学β	2~6																			3	
	理科	物理基礎	2	2																		
		物理	4					③														④
		化学基礎	2		2	2	2	2														
化学		4																				
生物基礎		2	2																			
生物		4																				
* 総合化学		1~4										2										
* 総合生物		1~4		1																		

保健体育	芸術	外国語	総合的な学習の時間	特別活動	学年								
					1	2	3	4	5	6	7	8	
育 7~8	育 1 2	英 1 2	3~6	ホームルーム活動	33	33	33	33	32	32	32	32	32
保 2	美 1 2	外 コミュニケーション英語Ⅰ 3 3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
健 2	芸 1 2	外 コミュニケーション英語Ⅱ 4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
	書 1 2	国 コミュニケーション英語Ⅲ 4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
	道 1 2	語 英語表現Ⅰ 2 2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
		語 英語表現Ⅱ 4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
		* SG英語運用 1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
		家 家庭基礎 2 2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
		情 社会と情報 2 1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
		※ 総合英語 2~19											
		総合的な学習の時間 3~6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
		特別活動	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
		合 計	33	33	33	33	32	32	32	32	32	32	

はSGH事業に伴う学校設定科目

学校設定科目との連携による探究の推進

「SG現代社会探究」では、「地域農業・産業振興策研究」を行うにあたり、農業問題の基礎的学習、新聞を活用したグループワーク、SDGsを題材に社会問題の相関を考察する学習を行うことによって、生徒が現代社会の諸課題を自分事としてとらえ主体的・意欲的に研究テーマを設定することにつながっている。また、ディベート活動の実施により論理的・批判的思考力を養い、研究レポート作成の一助としている。さらに、「SG地域文化探究」では、本校が位置する京築地域の伝統文化（神楽・連歌・歴史）を学ぶことによって、研究を進める上での基盤となる郷土への理解と地域を愛する心を育てている。

「SG英語運用」では、SDGsに関するグループディスカッション、世界の農業事情に関する文献講読、日本の文化に関するプレゼンテーション、英語ディベートを行い、「日本及び環太平洋地域の農業事情・振興策研究」と相互補完的な連携を保っている。なお、培われたグローバルな視野や英語コミュニケーション力は海外研修およびJICA九州における外国人研修生との交流をより有意義なものとしている。

高大連携の深化

京都大学農学部・教育学部と連携し、テレビ会議システムを活用した遠隔講義・レポート指導を実施している。また、1学年を対象として教育学部准教授によるセミナー「課題研究の意義と留意点」を毎年開催している。さらに、京都大学森里海連環学教育研究ユニット主催による「森里海ラボ」およびポスター発表会へ参加の機会を頂き、他校の生徒とのつながりを築くとともに、持続可能な社会の実現に貢献できる人材を育成している。

北九州市立大学とは「高大接続を意識したアクティブラーニング研究」を共同実施し、職員研修の開催や指導法の開発・実践・検証に取り組んでいる。コミュニケーション力向上を目的とした生徒対象のワークショップはその後の研究グループの協働推進やインタビュー調査の充実にも活かされている。

成果普及の取組と生徒の変容

3年次に「草の根グローバル活動」を実施している。行橋市役所、福岡県行橋農林事務所、京築地域の中学校（写真）にて成果発表や協議等を行うことで成果の普及に取り組み、地域を支えるグローバル人材としての意識を高めている。また、九州大学アカデミックフェスティバル、農林事務所主催「農林業が育む京築地域元気づくり推進大会」、九州SGHフォーラム、ESD国際シンポジウム等に出場している。



生徒の変容としては問題発見・解決力や社会参画意識の向上等がある。解決策の提案にとどまらず、実践・検証に取り組む研究グループが増えている。

新たなカリキュラムの策定と評価

SGHの成果を指定終了後にも活かすため、新カリキュラム（「京都グローバル人材育成プロジェクト」3か年プラン）の策定に取り組んだ。SGHの諸活動、進路学習等、各教育活動により育てたい資質・能力を明確化し、活動相互のつながりを重視した上で整理し、3年間の流れのなかに配列し直した。今後は各教科とのつながりもより明確にしていく。

また、本校が目指す生徒像について、その達成に必要な資質・能力の定着を測る指標の作成に取り組んだ。3年間の全課程において活用し、活動の節目において評価する。さらに、生徒が自己評価を行う本校独自のポートフォリオ『Plus One』を作成した。『Plus One』を介した教員との対話によりメタ認知を高め生徒の成長を促すことおよび評価結果を新カリキュラムの改善にいかすことを推進していく。資質・能力は客観的な把握が難しく、結果が出るのに時間がかかることもある。だからこそ少しずつの変容を生徒・教員がともに気づき、その自覚を深め、さらなる成長につなげていきたい。

福岡雙葉中学校・高等学校

国家戦略特区FUKUOKAからはばたく 女性グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

女性グローバル・リーダー育成のため、イノベーション創出手法である「デザイン思考」などを含めた教育課程を開発し、九州大学と共にこれに資する真の学力を涵養する教育の在り方について高大接続により研究開発を行う。また、早期英語教育導入の在り方及び教科横断型学習による教育システムを小中高連携で開発する。これまで本校が育ててきたグローバルシティズン教育に、グローバル・リーダー育成に資する教育課程と、スーパーグローバル大学創成支援（トップ型）に採択された九州大学との高大接続を加えて、国内トップレベルのグローバル教育推進校を目指す。その中で多様な文化や価値観を有する人々と協働し、グローバルな舞台で積極的に課題解決を図り、新たな価値を創造できる人物を育成する。



【教育課程表】

学年	科目	内容	備考
GC	高1	宗教 国語総合 世界史 現代社会 数Ⅰ 数A 化学・生物基礎 保健・体育 芸術 コミ英Ⅰ OC	国際教養 家庭基礎 情報 総合 HR
	高2	宗教 現代文B・古典B 世界史B or 日本史B 地理B or 公民	ディスカッション 国際教養 情報 総合 HR
	高3	宗教 現代文B・古典B 世界史B or 日本史B 地理B or 公民 総合数学 化学・生物演習 保健・体育	ディスカッション 国際教養 総合 HR

カリキュラム開発について

2015年度に、SGH活動を中心的に行うコースとしてGC（グローバルコミュニケーション）コースを高校に設置した。このコースでは、総合的な学習の時間にデザイン思考を、また学校設定教科（国際教養）を開設し、国際問題について学ぶ・話す授業を展開してきた。外国語には、R.W.P.（リサーチ・ライティング・プレゼンテーション）、Discussionの科目を加え、国際通用性を高める英語力の伸長を目指した。

高大接続について

大学との連携は、授業・イベント・教員間・入試などあらゆる面から取組んだ。デザイン思考の授業は、九州大学芸術工学部の教員と、カリキュラム開発から授業支援まで幅広く連携した。国際教養の授業は、九州大学の教員の講義、また大学生・大学院生・留学生が授業設計に携わり授業自体に参加するなど、これまでの高校での学びにはなかったことを行った。

また、高大の教員間で情報交換を定期的に行うようになり、大学で専門性を高める研究をするために高校で身に付けておくことなどを知る機会となった。

特に九州大学は、毎年SGH、SSH活動の発表の場を設けられるので、生徒は大学の教員の評価を直接聞く機会に恵まれた。多くの大学のAO入試・推薦入試で、SGHでの課題研究は評価され、生徒は高校での学びを大学での学びに繋げていくことができた。

小中高一貫教育における英語教育について

2012年度本学園小学校に英語で理科・算数・道徳・学級活動をする英語イメージのコースが設置された。2018年度にその生徒が中学に入学し、現在は小学1年～中学2年まで在籍している。

中学では、英語を週8単位設け、その中で、英語で行う理科・数学・社会・英語を実施するCLIL（Content and language integrated learning）教育をしている。教員は全てネイティブである。小学校で算数・理科などの授業を英語で行うことで、当初学力について不安の声があったが、結果として全く問題がな

いことが分かった。中学で行っているCLIL教育でも真の学力の涵養が期待できる。

成果と課題

成果として数字で明らかに表すことができるものは、英語でのコミュニケーション力や発信力の向上である。それは英検の合格者数（準1級以上の取得率34パーセント）から実証できる。また自ら学ぶ意欲が向上し、2019年度トビタテ！留学ジャパン（第5期）には10名の生徒が選抜された。

課題としては主に2点ある。1点目はデザイン思考の評価の難しさ、2点目は校外での活動に対する指導である。この2点の課題については、今後も対策・対応を考えていく。

成果①：トビタテ！留学JAPANへの参加者推移



成果②：実用英語検定合格者



事業の継続（今後）について

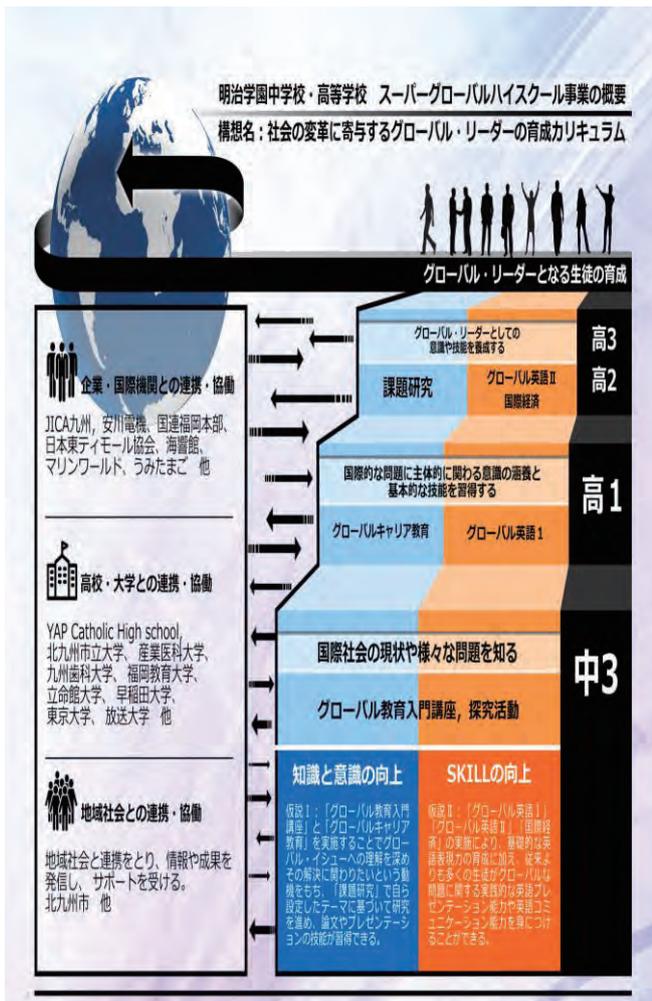
2019年度WWLコンソーシアム構築支援事業における立命館宇治高等学校の連携校として活動する。国際会議や海外研修なども、連携して取組めるようになり、1校だけで研究開発していたものと比較して学びの質が上がり深くなることを期待している。SGHで生徒がどれ程成長したかを見てきた本校だからこそ、その経験を土台にSociety 5.0に向けた人材育成にフォーカスした教育をしていく。

明治学園中学校・高等学校

社会の変革に寄与するグローバル・リーダーの育成カリキュラム

【構想の概要】

本学園が考えるグローバル・リーダーの資質は、国際的な社会課題に対して、自分の考えを持ち他者の考えを統合しつつ独自の最適解を導き出し、それを実践することである。このようなリーダーに期待されることは、その人間力によって社会を変革し、よりよい未来社会を創造する主体としての役割を果たすことにある。本学園は、このような人材育成のためのカリキュラム開発をすすめてきた。とりわけ「課題研究」を効果ある学びとするために、高校では「グローバルキャリア教育」と「グローバル英語Ⅰ・Ⅱ」、「国際経済」を開設し、互いに響き合い、相乗効果が出るように内容充実に努める。特に、「課題研究」の内容を充実するとともにこれまで実施してきた「Catholic Spirit」をPOST S GHのコアカリキュラムとして位置付け、指定の期間に培ってきた分析的思考力や論理的表現力を育成する指導のノウハウを統合する場としてカリキュラムの強化を図る。



RI (2019) 年度教育課程表

教科	学 年	1		2		3	
		科目	単元	科目	単元	科目	単元
国	国語総合	(4)	4				
	現代文B	(4)	2	3	2	2	3
	古典B	(4)	2	3	2	2	4
語	英語					3	
	世界史A	(2)	2				
理	世界史B	(4)		4			
	日本史B	(4)		4			
歴	地理B	(4)	3	4			
	歴史探究				3		
史	地理探究				4	4	4
	歴史演習					2	
公民	現代社会	(2)	2				
	公民探究					3	3
数	数学Ⅰ	(2)	4				
	数学ⅡA B	(8)			4	4	
	数学Ⅲ	(5)			4	3	
	微分・積分		3	4		4	
	探究数学		2		4	3	3
	数学α	2					3
	数学β						3
数学γ				(4)		2	
学	数学概論		1				2
	物理基礎	(2)	2				
	物理	(4)		4			
	化学基礎	(2)	2		1	1	
	化学	(4)		4		4	
	生物基礎	(2)	2				
	生物	(4)					
	細胞化学				2		
	材料演習						3
	医療生命倫理		0~1				
保体	体育	(7)	3	2	2	2	2
	保健	(2)	1	1	1		
芸術	音楽Ⅰ	(2)	2				
	書道Ⅰ	(2)					
	コミュニケーション英語Ⅰ	(3)	3				
	コミュニケーション英語Ⅱ	(4)		4			
	コミュニケーション英語Ⅲ	(4)			3	3	4
国	英語表現Ⅰ	(2)					
	英語表現Ⅱ	(4)			3	3	4
	グローバル英語Ⅰ	2					4
	グローバル英語Ⅱ						4
語	総合英語					3	
	家庭英語	(2)	2	2			
情報	社会と情報	(2)	2				
	情報の科学	(2)			2		
総合	総合的な探究の時間	(3)					
特別	ホームルーム活動	(3)					
学校	Catholic Spirit	2	2	2	2	2	2
	課題研究		0~1	0~1	0~1	0~1	0~1
教科	グローバルキャリア教育	1					
合計			34	34~36	34~36	33~34	34~35
						34~35	34~35

※グローバル英語Ⅰ・Ⅱは、英語表現Ⅰの内容を含む

本学園の概要

1910年に開校し、長い歴史をもつ本校は「まことの自由への教育」を通して、21世紀を担う子どもたちの教育に励んでいる。グローバル社会のますますの広がりの中で、「人々のための人に」を合言葉に、神様に愛されている自分自身を大切に、他者をも尊重する生き方を実践し、学びを通して自分自身の使命に目覚め、自分にしかできない社会貢献を見出すことを目的とする全人教育を目指している。

「自律した学習者」になるための取り組み ～アカデミックメソッド～

新学習指導要領では様々な人と協働・協力する姿勢、自分の考えを明確に述べて、他者の考えを正確に理解する力、そして具体的な根拠にもとづき見解を述べる力が重要視されている。

本校ではただ学ぶのではなく、学び方を学ぶことを目指す。今ある知識はすぐに古びてしまうからこそ、学び続ける姿勢を育み、常に最先端の「知」を追究し続ける生徒を育てるため、以下に示す探究型教科「アカデミックメソッド」をカリキュラムに組み込み、新たな学びに対応している。

① ソーシャルスキル

他者と良好な人間関係を築くための社会的スキルを育む。相手を承認しつつ自分の感情や意見を表現し、安全・安心な場所で協力しながら共に成長していく基礎を培っていく。

② プレゼンテーションスキル

表現・発信に関するスキルを習得する。自分の意見や考えを他者と共有するために、本当に伝えたいことを整理することや、わかりやすい表現方法を学び、実践する。ICTを使った発表の指導も行う。

③ アカデミックスキル

問いの立て方や必要な情報の集め方といった研究方法の基礎を習得していく。探究の技能を意識して主体的に活動していくことで、思考力と探究方法を培い、アカデミックメソッドの後に履修する課題研究の更なるレベルアップを図る。

上記を通じて探究活動に親しんだ後、各自のテーマに沿って課題研究を行っていく。いずれの活動でも日常生活や社会環境に目を向け、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を繰

り返し行いながら、問題解決的な学習を発展させていく。こうした一連のカリキュラムを通じて、広い視野を持って、言語運用能力や論理的思考力、考えや価値観の異なる他者と協働する力を発揮して、自主的自発的に課題を発見し、解決する意思と力を備える「自律した学習者」になれると考える。

カリキュラム上の体験的活動

1. 大学・企業・国際機関等との連携授業

外部諸機関との連携授業を年間計画上に配置し実施している。以下はその例を示す。

※「 」はテーマ、()は連携機関

「医療と海外支援活動」(国境なき医師団)

「難民と海外支援活動」

(国連高等難民弁務官事務所協会)

「貿易とグローバル企業」(伊藤忠商事)

「グローバル時代の外交官の役割」

(元衆議院議員)

「途上国支援と水ビジネス」

(北九州市上下水道局海外事業課)

「EUの成り立ち」(ベルギー大使館/公使参事官)

「JICAと途上国支援」(九州海外協力協会事務局)

他、平成30年度計14回実施

2. 課題研究コンテスト・発表会

校内発表会のみならず、校外の課題研究コンテストや発表会、シンポジウム、学会に参加。

・「YWP Water - Wise Innovation Challenge! -Mission for Phnom Penh Cambodia」

(国際シンポジウム)

・「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山

・九州大学アカデミックフェスティバル

・「Asia Pacific Conference in FUKUOKA」

(国際学会)

・「SGH 甲子園」

・「SGH 全国高校生フォーラム」

・「国際環境シンポジウム」

(韓国大邱カトリック大学)

・高校生起業家教育プレゼンテーション大会

・「サイエンスキャッスル 2018 九州大会」

高大連携・他教科連携の課題研究

宮崎大学との高大連携協定にもとづき、本校の課題研究は、生徒グループ（6～7名×13グループ）の研究テーマに応じて、担当の大学の先生が設定され、助言をいただくことができるようになっている。

あくまでも助言である指導をするのは、本校の高校教員である。SGH 指定前は教科ごとのゼミナール方式であったが、指定後は職員も協力しあえる合教科の体制をとっている。

多面的評価—参加者も評価者に—

研究成果を2年次1月の「SGH 生徒探究発表会」において発表し、さらには、年次6月には、県内 SGH 校・SSH 校で「3校合同ポスターセッション」において英語で発信する。



この際に、宮崎大学との協働で開発したポスターセッションの専門家による評価と、参加者による投票形式の評価を行うことによって、多面的に生徒の評価を行うことができるようになった。

地域の魅力を素材にイノベーションの方法を学ぶ

一般社団法人 i.school と連携し、「T I S P（イノベーション・サマープログラム）」を実施している。イノベーションの方法論を学んだ国内外の学生が高校生をファシリテートする4泊5日のワークショップである。宮崎の企業を訪問しインタビューで情報を収集し、これをもとにアイデアを創出していく。期間中すべて英語でディスカッションを行う。現在県内の高校にも普及し、3校合同で実施している。

現地校・機関と緊密に連携した海外研修

台湾は姉妹校の高雄高級中學、ベトナムはカオバクワット高校・グエンタタン高校、シンガポールはジュロン・パイオニア・ジュニア・カレッジ、シンガポール国立大学の海外高大連携、クリアシンガポールなど海外機関との連携のもと海外研修を実施している。課題研究にもとづいたテーマ設定を行い、現地校で研究計画のプレゼンを行って、ディスカッ

ションを行い、現地高校・大学生と協働で調査を行い、プレゼンを作成し、発表を行う。

航空券とホテル等を業者、内容はすべて現地校と本校職員が海外研修を設計している。

指定学科の中でも海外研修の経験者と非経験者では英語活用能力においても伸びに差が見られる（表1）。また、プログラムの性質の異なる研修先別でも異なる（表2）。これは、海外研修を実施して毎年同様の結果が得られている。

表1 海外研修経験者と非経験者（共に SGH 対象生徒）の4技能の平均点推移（2018年度6月-12月）

学科	月	R	L	W	S	Total
海外研修経験者	6月	235	243	243	235	956
	12月	224	251	247	275	997
海外研修非経験者	6月	209	220	237	224	890
	12月	205	218	236	260	919

表2 海外研修先別の（すべて SGH 対象生徒）4技能の平均点推移（2018年度6月-12月）

学科	月	R	L	W	S	Total
台湾	6月	225	251	247	229	952
	12月	207	244	244	268	963
ベトナム	6月	240	243	246	241	971
	12月	232	258	244	272	1006
シンガポール	6月	241	241	237	237	955
	12月	233	252	253	285	1022

海外連携校と科学を通じた国内交流

台湾・ベトナム・シンガポール4校の連携校の先生・生徒が本校に来校し、①課題研究のプレゼンテーション・ディスカッション、②5校合同のフィールドワーク・科学実験教室を宮崎大学と連携し実施している。

英語4技能に見られる生徒の違い

開発研究の過程で、英語活用の機会を得た生徒は、6ヶ月後に顕著な変化があることが明らかとなっている。また、活用の機会が多い SGH 対象生徒と乏しい非対象生徒では明らかな差がある（表3）。活用の機会を得ることは4技能向上には有用な視点である。

表3 2018年度3年生・SGH 対象生徒 GTEC34 回結果

CEFR LEVEL	SGH 対象生徒		SGH 非対象生徒	
	Reading	Listening	Reading	Listening
B 2	23%	24%	1%	3%
B 1	65%	68%	29%	30%
A 2	12%	8%	65%	60%
A 1	0%	0%	6%	7%

鹿児島県立甲南高等学校

地球規模でものを考え行動する 21世紀薩摩スチューデントの育成

【構想の概要】

国内外の「人口問題に起因する諸問題」の解決を目指し、食・環境・ビジネス・観光をサブテーマに課題研究を行う。また、海外派遣事業を実施し、他国の生徒と問題点の共有、発表、討論等を行う。これらの研究活動により、地域・世界の持続可能な発展に寄与する積極的な提案が可能な21世紀薩摩スチューデントを育成する。

また、上記の目標を達成するため3年間の課題研究を中心に添えた計画を作成し、「課題研究のための教材開発」、「課題研究及びグローバル・スキルの評価」、「大学や企業、公的機関等との連携」、「フィールドワークや成果発表の場としての国内外研修」、「生徒の発表方法の改善や発表機会の拡充」に関して研究開発を行う。上記の取組をとおして、教員のさらなる授業力向上、学校変革を行う。

鹿児島県立甲南高等学校 SGH 概要

PLAN 地球規模でものを考え行動する21世紀薩摩スチューデントの育成

21世紀 薩摩スチューデント 人口問題に起因する諸問題の解決を目指し、国内外の事例を参考に論理的思考を用いて地域・世界の持続可能な発展に寄与する積極的な提案ができる **グローバル・リーダー**

DO **Wazze Konan!! - Innovation Project -**
【課題研究、海外派遣事業、グローバル・スキルの向上】

メインテーマ 人口問題 **サブテーマ** 食 環境 ビジネス 観光 **Local Global**

課題研究・・・調べる まとめる 提案する
1年 国内外課題把握、事例研究
2年 ポスター発表、論文・プレゼン
3年 学会発表等

海外派遣事業・・・発表する 広げる
1年【学びの場】フィールドワーク
2年【学びの場】UK プレゼン発表

グローバル・スキルの向上・・・考える 協力する 発信する 伝える
授業 **Active Learning** グローバル化に対応した授業 **発表力** 国内外大会での課題研究発表 **英語力** CEFR B1, B2

他機関との連携 東京大 鹿児島大 広島大 和歌山大 台湾蘭陽女子高 台湾師範大学 MLL HILL SCHOOL 南日本新聞社 マジミュージカル7か国-

CHECK ① Can-doリストによる評価
② 運営指導委員会による事業評価

ACTION ① SGH事業の内容・運営の改善
② 地域トップ校として、他校への情報発信

GOAL 現在の課題を理解し、持続可能な発展に寄与する教養・実践力を持ったリーダーの輩出
国際化に重点を置くスーパーグローバル大学・海外大学への進学

鹿児島県立甲南高等学校 2019年度教育課程表

年 度	2019年度								備 考					
	学 年	1年	2年	3年	計	学 年	1年	2年		3年	計			
新 課程	英語総合	④4	5			5	5							
	現代文B	4		3	2	4	3	7	5					
	情報B	4		3	3	3	2	6	5					
	世界史A	●②								0, 2				
	世界史B	●④		4	①	④	⑤			4, 8	0, 6			
	国 語													
	国語A	②2								0, 2				
	国語B	④4								0, 6	0, 6			
	地理A	②2								0, 2				
	地理B	④4								0, 6	0, 6			
	現代社会	②2	2							2	2			
	倫理	2								0, 2				
	政治・経済	2								0, 2				
新 課程	数学Ⅰ	③3	3						3	3				
	数学Ⅱ	4	1	3	3	3			7	4				
	数学Ⅲ	5			1				5	6				
	数学A	2	2			1	1	3	3					
	数学B	2		2	2	⑤	1	2, 4	3					
	物理基礎	②2	2						2	2, 3				
	物理	4							0, 7					
	化学基礎	②2							2	3				
	化学	4							4	7				
	生物基礎	②2	2						2	2, 3				
	生物	4							④	0, 7				
	地学基礎	②2								3				
	*生物探究	3		1					2	3				
*地学探究	2							2	2					
新 課程	体育	⑦7-1	3	3	3	2	2	8	8					
	保健	②2	1		1				2	2				
	音楽Ⅰ	②2							0, 2	0, 2				
	音楽Ⅱ	2							0, 2					
	美術Ⅰ	②2							0, 2	0, 2				
	美術Ⅱ	2							0, 2					
	工業Ⅰ	②2							0, 2	0, 2				
	工業Ⅱ	2							0, 2					
	家庭Ⅰ	②2							0, 2	0, 2				
	家庭Ⅱ	2							0, 2					
	外国語Ⅰ	②2							0, 2	0, 2				
	外国語Ⅱ	2							0, 2					
	特別活動	②2	2						2	2				
情報社会と情報	②2	1	1	1				2	2					
科目単位数合計		32	33	33	33	33	98							
W-VIプロジェクト		2		1			1		4					
合 計		34	34	34	34	34	102							
特 殊	ホームルーム	1		1			1		3					
道 徳 時 間		35	35	35	35	35	105							

◎は必修科目、○は必修選択科目、●は世界史と世界史の必修選択科目

課題研究をとおしたスキル育成

本校では、課題研究を中心にした3か年計画を立てた。1年は課題研究の進め方を学び、生徒は自分の関心のある研究テーマを決める。2年からは本格的な研究を個人で行い、3年次には英語で研究論文を執筆する。(図1)

図1 甲南高校課題研究年間計画



SGH 対象生徒：1年全員 320人，2年 40人，3年 40人

研究を進める中で、合計6回の校内での発表機会を設定した。これらの発表をとおして生徒は、課題研究の進捗状況の確認、論拠が明示されているか等課題研究の筋道の確認を行うことができ、またスライド等プレゼンテーションによる表現力・コミュニケーション能力、周りの人と協力して発表会を実施する協働力を身につけることができた。さらに、発表会で学んだことの振り返りと次の計画を立てることの重要性の認識することができた。この校内発表を繰り返しながら、課題研究を行なうことで、生徒は課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身につけていく。

そして、課題研究の発表の場を主な目的としている2年3学期の国内外研修(英国、広島大、和歌山大)では、学校で学び研究してきたことを発表することで得られる達成感はもちろんのこと、プロセスの大切さ、「学び」の大切さを実感する場にもなっており、それが生徒の主体的な進路研究にもつながっている。このことは、本校が行っている「SGH アンケート」において、学習活動で身についたこととして「主体性」「課題発見」に対して「当てはまる」、「ややあてはまる」と答えた生徒は全て8割を超え、SGH非対象の生徒との差も顕著で、課題研究の意義を理解していることからわかる。(図2)

図2 「SGHアンケート」抜粋

(数字は%)		主体性		課題発見	
質問番号	年	1	2	8	9
SGH 対象者 (40人)	H28	85.0	87.5	90.0	82.9
	H29	87.5	92.5	87.5	72.5
	H30	91.4	89.1	91.8	83.7
その他 (273人)	H28	77.9	78.1	86.6	60.2
	H29	83.4	78.2	86.1	64.7
	H30	79.0	75.9	82.6	61.6

(対象3年 H30. 2月)

大学や企業等からの協力による効果

大学や企業等からの協力による効果は主に2つある。まず、生徒は、大学の先生から専門的なアドバイスや協力を得ることができる。専門知識の他、論拠のはっきりとしたストーリーのある研究の進め方、仮説を検証するためのフィールドワーク・実験等の手法についても助言をいただく。鹿児島大学の先生方からは継続的に課題研究に対する指導助言を受けており、生徒が課題研究の道筋を作るサポートにもなっている。そして生徒は、研究や社会情勢について最新の情報を得ることができる。現在の高等教育の教育内容や、企業等から社会の最新トレンドを知ることによって生徒だけでなく本校職員の多角的な視野・考えにつながっている。

学校における変革

SGH指定当初は、課題研究の指導ができる職員がほとんどおらず、職員は指導方法や指導力向上のため外部指導をとおして学んだ。おかげで、課題研究や発表の指導や運営方法についての知識や経験が学校に蓄積されてきた。

本校職員はSGH事業の他、アクティブラーニング型の授業を行うために、全教科で研究を続け、輪番で研究授業を学校外にも公開してきた。年複数回職員研修を行ってきた。これらの経験をおとして「将来、生徒が身につけるべき能力を考えたとき、高校現場ではどのような授業・事業を行うべきか」全職員で考えるようになった。職員の変容によってカリキュラムマネジメントを全職員で考えるきっかけとなっている。

文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当）付
高等学校改革推進室
〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
TEL：03-5253-4111 [内線3300] E-mail：sgh@mext.go.jp

〈幹事校管理機関〉 筑波大学附属学校教育局
担当：筑波大学東京キャンパス事務部企画推進課国際担当
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
TEL：03-3942-6432 E-mail：sgh-kanjiko@un.tsukuba.ac.jp



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN



筑波大学
University of Tsukuba

発行：2019年8月
<http://www.sghc.jp/>